

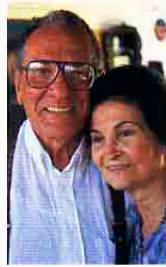
聖徒の道

11
1997

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道



表紙

ブラジルの初期の改宗者であるミルトン・ソアレス、イレーン・ソアレス夫妻(表紙)は、家族や友人が収穫できるよう、福音の種をまいた。本誌「ブラジルのあいさつ『トッド・ベン』」34ページ参照。(写真撮影/ドン・L・シール、デビッド・ミッチェル)

こどものページ

フィリピン人の改宗者、ネイン兄弟と家族。この絵は、6才のフィリピン人、エラ・マエ・L・オリバシが描きました。14ページの「開拓者になろう」を見ましょう。

一般

- 2 大管長会メッセージ——行って、彼らを平原から連れて来なさい
第二副管長ジェームズ・E・ファウスト
- 16 独身成人との語らい 大管長ゴードン・B・ヒンクレー
- 26 新しいワードになじむ ジョアン・ドクシー
- 28 正直に事を行う アラン・V・ファンク
- 34 ブラジルのあいさつ「トッド・ベン」
ドン・L・シール、デビッド・ミッチェル

青少年

- 10 「あなたはイエス・キリストの友達なの？」 マイケル・グリフィス
- 12 すべてのものをなくした後に
- 33 プレッシャーからの開放 テレサ・ハンセーカー

定期特別記事

- 1 読者からの便り
- 15 モルモンメッセージ——天国への入り口
- 25 家庭訪問メッセージ——「知識の言葉」

こどものページ

- 2 たんけん——大平原の横断 シェリー・ジョンソン
- 5 おもちゃばこ
- 6 小さなお友だちへ——トーマス・S・モンソン長老
- 8 分かち合いの時間——今日わたしは、だいじなせんたくをします
カレン・アシュトン
- 10 ケビンの誕生日のおくり物 ティモシー・S・ホワイト
- 14 開拓者になろう



12ページ参照



16ページ参照



28ページ参照



「こどものページ」
14ページ参照

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会: ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームス・E・ファウスト
十二使徒定員会: ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング

編集長: ジャック・H・ゴズリン
顧問: ジェイ・E・ジェンセン、ジョン・M・マドセン

教科課程管理部責任者

実務部長: ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター: プライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター: アラン・R・ロイボーク

国際機関誌スタッフ

編集主幹: マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐: R・バル・ジョンソン
編集副主幹: デビッド・ミッチェル、ディエーン・ウォーカー

編集補佐: ジェニファー・グリーン・ウッド
工程管理: マアリーアン・マーティンデル
出版補佐: ベス・デーリー

デザインスタッフ

機関誌グラフィックスディレクター: M・M・カワサキ

アートディレクター: スコット・バン・カンペン
デザイナー: シェリー・クック

制作主幹: ジェーン・アン・ピーターズ
制作: レジナルド・J・クリステンセン、デニー・ズ・カービン、マシュー・H・マックスウェル

予約購読スタッフ

ディレクター: ケイ・W・ブリッグス
配送部長: クリス・クリステンセン
マーケティング部長: ジョイス・ハンセン

聖徒の道1997年11月号第41巻第11号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック

定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)
 半年予約1,200円(送料共)

普通号/大会号200円

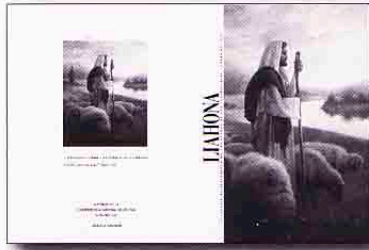
Copyright©1997 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—

1995年9月 翻訳承認—1995年9月 原題—International Magazines November, 1997, Japanese. 97990 300

●定期購読は、「『聖徒の道』 予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて資料管理部配送センターへご送金いただければ、直接郵送いたします。●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150-3223. U.S.A. and Canadian subscription price is \$14.00 per year. Sixty days' notice required for change of address. INCLUDE ADDRESS LABEL FROM A RECENT ISSUE. CHANGES CANNOT BE MADE UNLESS BOTH OLD ADDRESS AND NEW ONE ARE INCLUDED. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O. Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368, USA. SUBSCRIPTION HELP LINE: 1-800-453-3860, U.S. EXT. 2947; CANADA EXT. 2031. CREDIT CARD ORDERS (VISA, MASTERCARD, AMERICAN EXPRESS) MAY BE TAKEN BY PHONE. PERIODICALS POSTAGE PAID AT SALT LAKE CITY, UTAH.

POSTMASTER: Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O.Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.



「神は……強制はなさいません」

わたしは、チリのオソルノ伝道部で専任宣教師として働いています。先週、同僚と一緒に、1997年1月号の『リアホナ』(スペイン語版)に掲載された1996年10月の総大会報告を読んだこのことです。その中のある話の一節から、個人として、またイエス・キリストを代表する者として、大きな助けを受けました。「わたしたちの『心の望みに応じて』」という話の中で、ニール・A・マックスウェル長老は「行うのはわたしたちです。神は助けてはくささいませんが、強制はなさいません」と話されました。(『聖徒の道』1997年1月号, 23)

宣教師として、わたしたちはいつも、一定の条件を満たすよう人々にチャレンジしています。それは、彼らが天父の計画に従い、天父に似た者となるうえで助けとなる条件です。マックスウェル長老の話を読んで以来、わたしはこのように言えるようになりました。「分かるでしょう。行うのはあなたです。神は助けてはくささいませんが、強制はなさいません。」

チリ、オソルノ伝道部、
 ドワルテ姉妹

わたしの宝物

『聖徒の道』を読むことは、わたしにとって喜びに満ちた経験です。末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となって以来、27年間ずっと機関誌を保管してきました。毎回新しい機関誌を読み、以前のものと比較します。こうすることで、天父の王国が急速に成長しているのがいっそうよく分かります。

京都ステーキ、彦根ワード
 福岡 勝

幸福を分かち合う

わたしは1994年2月にバプテスマを受けました。それ以来、いつも幸福と平安、自信を強く感じています。この教会がイエス・キリストの真実の教会であることを知っています。

わたしは病院で働いていますが、そこは苦痛と悲しみに満ちた場所です。わたしたちの兄弟や姉妹たちが、愛と助けと希望とを必要としています。わたしは、自分の証と幸福を分かち合うために、できることをすべて行っています。支部の集会所で開かれるバプテスマ会に患者さんを招待することもあります。また、病院で働く人々や、患者さんとその家族に読んでもらえるようにと、病院の許可を得て、待合室に『リアホナ』(ポルトガル語版)を置くようにしています。

わたしたちが贖いを通して天父のもとへ帰れると知ることは、何とすばらしいことでしょうか。

ポルトガル、アルガルベ地方部、
 ファロ支部
 マリア・フェルナンダ・ゴイス



預言者の約束

1996年5月号の『リアホナ』(スペイン語版)にゴードン・B・ヒンクレー大管長のメッセージ「恐れることはない。ただ信じなさい」を掲載して下さったことを感謝しています。わたしはテモテへの第二の手紙第1章8節の「だから、あなたは、わたしたちの主のあかしをすること……を、決して恥ずかしく思ってはならない」という聖句をこれまで何度も読んできました。そして、預言者が約束されたとおりに、奇跡が起きるのを目の当たりにしています。

スペイン、ハーエン地方部、
 グラナダ第2支部
 マーガリータ・サルメロン・ハリド



行って、 彼らを平原から 連れて来なさい

第二副管長
ジェームズ・E・ファウスト

『聖書』の中で最も忘れ難い聖句の一つに、主がカインにお尋ねになつた次の言葉があります。「弟アベルは、どこにいますか。」これに対してカインはこう答えました。「わたしが弟の番人でしょうか。」(創世4:9) わたしは、教会員一人一人にこの同じ問いかけをしてみたいと思います。わたしたちはわたしたちの兄弟の番人となっているでしょうか。ベニヤミン王はこう教えました。「むしろあなたがたは、彼らに……互いに愛し合い、互いに仕え合うように教えるであらう。」(モーサヤ4:15) わたしたちが教会の中で教え合う最も大切な原則の一つは、常に人々の必要を満たすように努めるということです。わたしたちは、よく奉仕について話題にします。なぜでしょうか。

聖徒たちが必要としているものは、ほかの人々と異なっているわけではありません。それは、わたしたちも普通の人間だからであり、わたしたちが必要なものとは、結局のところ、第1に霊的なものだからです。マリオン・D・ハンクス長老はかつて、ある著名な精神科医に次のように言ったことがあります。「一言^{ひとこと}で言えば、あなたは人々のためにどのようなことをしておられるのですか。」この問いに、その精神科医は次のように答えました。「一言で言えば、わたしが人々のためにしていることとは、神が彼らを愛しておられるのを彼らに確信させることです。」愛は、まず第1に最も必要とされていることです。わたしたちはなぜそれが分かるのでしょうか。それは主がそう言われたからです。第一の戒めは神を愛し、神に仕えることであり、第二もそれ



ウィリー手車隊の一行が立ち往生しているという知らせがソルトレーク・シティに着いたとき、ヤング大管長は総大会に集まっている聖徒たちに「今その人々を連れて来てください」そうでなければ、「信仰〔は〕徒勞に終わることでしょう」と説教しました。

と同様に、^{はらから}同胞を愛し、同胞に仕えることです（マタイ22：37-39参照）。このことから、わたしたちは、福音の第一の原則の一つが仕えることでなければならないのが分かります。

ベニヤミン王はこう尋ねています。「あなたがたは、互いに務め合うようにすべきではないだろうか。」（モーサヤ2：18）この問いに対する最も思慮深い答えを、わたしたちはすでに知っています。「あなたがたが同胞のために務めるのは、とりもなおさず、あなたがたの神のために務めるのである……。」（モーサヤ2：17）

わたしたちは自分の兄弟たちの番人でしょうか。ガラテヤ人への手紙の中で、パウロは愛をもって互いに仕えるように、聖徒たちに教えています（ガラテヤ5：13-14参照）。また、ヤコブの手紙の中には、神の前に清く汚れない信心とは、「困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない」（ヤコブの手紙1：27）と説かれています。足の利かない男が神殿の門の外で施しを請うて来たとき、ペテロが語った偉大な言葉を忘れることのできる人がいるでしょうか。「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。」（使徒3：6）

教義と聖約第81章では、「弱い者を助け」るよう書かれています。同じように、「垂れている手を上げ、弱くなったひざを強めなさい」（5節）という言葉もあります。「教義と聖約」にはまた、裁かれる基準を思い起こさせるような言葉もあります。わたしたちは皆、それによって裁かれます。「また、貧しい者と乏しい者、病気の者と苦しんでいる者を、すべてのことにおいて思い起こしなさい。これらのことを行わない者は、わたしの弟子ではないからである。」（教義と聖約52：40）わたしたちは自分の兄弟たちの番人となっているのでしょうか。

ハロルド・B・リー大管長は、1973年4月の総大会で、一つの偉大な啓示について触れ、次のように語りました。「ロサンゼルス神殿が奉獻される少し前のことでした。わたしたちは皆、そのすばらしい奉獻式のためにいろいろな準備をしていました。その出来事は、どちらかと言うと、わたしの生涯では新しい経験でした。明け方の3時か4時ころのことだったと思いますが、わたしは一つのすばらしい経験をしました。それは夢とは思えませんでした。確かにそれは示現でした。その示現の中で、わたしは数多くの霊たちが一堂に会しているのを目撃しました。そこでは数多くの男女が立上がり、一度に2、3人ずつ、種々の異言で語っていました。そのときの光景は、並々ならぬものでした。そのときわたしは、デビッド・O・マッケイ大管長が次のように言う声を聞いたような気がしました。『もし神を愛したいと望むなら、人々を愛し、人々に仕えるようにしなければならぬ。これが、神に対する愛を示す方法である。』」¹

わたしたちは自分の兄弟たちの番人でしょうか。その

とおりで。ここで教会歴史の中から、この偉大な原則を示す一つの経験談を読みたいと思います。

開拓時代の手車隊の一つであったウィリー隊の副隊長を務めたジョン・チズレットという人物は、次のように書き残しています。

「9月1日か2日のことだったと思うが、我々は〔フォート〕ララミーに到着した。しかし、そこには我々が期待していたような物資は、我々のために何一つなかった。そこでウィリー隊長は集会を招集した。我々の置かれている状況や状態、今後の見通しなどについて考え、今後どんなことが可能か、話し合うためである。現在のペースで旅を続け、小麦粉を消費していったら、少なくとも小麦粉は、目的地の350マイル（約560キロ）ほど手前で、尽きてしまうことは確かであった。そのため、1日当たりの割り当てを、1ポンドから4分の3ポンド（1ポンドは約450グラム）に削減することになった。それと同時に、あらゆる努力を払って少しでも速く進むこととした。我々はこの割り当てを、ララミーからインディペンデンス・ロックまで続けた。

ちょうどこのころ、ウィリー隊長は〔ウィラード・〕リチャーズ使徒から1通の手紙を受け取った。その中には、我々がサウスパスに到着するころまでには、（ソルトレーク）盆地からの食糧を受け取れるであろうと書かれてあった。我々の小麦粉の残量を調べたところ、我々がその地点に到着する以前に、すべて消費してしまうことが分かった。我々に残された唯一の選択肢は、1日当たりの割り当てをさらに減らすことであった。こうして、小麦の割り当ては、1日当たり平均10オンス（約280グラム）まで減らされることになった。……

我々がようやくスイートウォーター川まで到着したころには、ララミーを出てから、少しずつ冷え込んでいた夜も、非常に厳しく冷え込むようになっていた。行く手を阻む山々は、近づくに連れて、^{あらし}のすそ野まで雪に覆われていることが分かり、また、嵐が近づいていることも、我々を取り巻く雲の高度が毎日低くなっていくことで、はっきりと分かった。……

1台当たり17ポンド（約8キロ）の衣類と寝具類では、休息を得るには、まったくもって不十分であった。ほとんどすべての者たちが、毎晩寒さに悩まされていた。朝になっても、もう一日困難な旅を続けようという、体力も気力も決意も持たず、哀れな聖徒たちは、やつれた様子で寒さに凍えながら、テントから^は這い出て来るのである。我々の成功に不可欠な活気というものがまったく感じられない様子であった。

寒さや食糧の欠乏、そして重労働による衰弱や過労は、間もなくそのきばをむき始めた。まず、年老いた者や虚弱な者とその標的となり始めた。生き抜く気力や勇気を失い始めるや、彼らの表情に死相が現れ始めたのである。



手車の開拓者たちがいる場所を確認するために先発隊が派遣されました。この先発隊の隊長は、ヤング大管長にあてた手紙の中で、ウィリー隊の悲惨な状況について触れ、「我々の中の最も屈強な者でさえ、この光景を見るに堪えられません」と報告しました。

油が尽きるとランプの火が消えるように、生命も速やかに失われていくのである。最初のころは、亡くなる者もそれほど多くなく、時々死者が出る程度だった。しかし、何日かすると、亡くなる者も多くなり、やがて、毎日、野営地を出発するときに、一人か二人の人を埋葬してから出発することに、何の不思議も感じなくなっていたのである。

死が年老いた者や虚弱な者だけを標的にしている期間もそう長くはなかった。若い者も壮健な者も、やがてそのえじきになっていったのである。……数多くの父親たちが、自分の死の前日まで、子供たちを乗せた手車を引いていた。わたしは、朝は手車を引き、昼はへとへとに疲れ果て、そして次の朝を迎えないまま亡くなっていった父親を何人も見ている。

我々は、毎日毎日、失意と悲しみのうちに旅を続けた。時には、かなり距離を稼いだ日もあった。しかし、ほとんどの場合、進むことができた距離はほんの数マイルだった。やがて、我々は吹雪に巻き込まれ、肌を刺すような風が激しく吹き荒れた。……

朝になると、雪は30センチほどの深さだった。家畜は嵐あらしの中で散り散りになり、命を落としたものもあった。しかし、我々にとって何よりもつらかったのは、男女合わせて5人を冷酷な死の手にゆだねなければならなかったことである。

嵐あらしの前の朝、いや、嵐の来たその日の朝、我々は、小麦粉の最後の割り当てを配給した。

それゆえ、この運命の日の朝には、我々は配給するものが何もなかったのである。しかしながら、我々には乾パンが1たるか2たるほど残っていた。これはウィリー隊長がいよいよ欠乏した日のことを考えて、フォートラミーで入手しておいたものである。これが、隊員たちに、平等に、また公平に分配された。……

30センチほどの深さの雪に囲まれ、食糧も尽き、多くの人々が病気にかかり、家畜も死んでいく状況の中で、我々は、物資の補給部隊が我々のもとに到着するまで、現在の野営地にとどまることを決定した。……先ほど説明したとおり、わずかに支給された乾パンも粗末な牛肉も、その大部分が、1日目に、腹をすかせた者や飢えた者の食物となった。……

我々は家畜を殺し、その肉を配給した。しかし、パンもなく肉を食べても、飢えを満たすことはできなかった。しかも、赤痢で苦しんでいる人々にとっては、救いになるどころか、苦しみを増すばかりだった。この疫病は、ここ3日の間に、我々の間に急速に広まっていった。その結果、極度の疲労により、数人が亡くなった。……この3日間のことを思い出すと今でも心が痛む。このとき、わたしは病人を訪れ、家族のために仕える夫を亡くした女性たちを訪れ、自立できない高齢の人々を訪ねた。これは、わたし自身で、自分に責任が託された物資をどこに配給したらよいかを知るためであった。これほどひどい飢えはそれまで目にしたことがなかったほどである。わたしは、神の憐れみを受けて、このような光景を二度

と見る必要がないように心から願うものである。』²

この同じ手車隊には、ジャクソンという名前の女性も加わっていました。彼女は次のように記録しています。

「9時ごろ、床に入る準備をした。寝具もわずかだったので、服は脱がなかった。眠りに就いた後、確か真夜中ごろだったと思うが、ひどく寒けがした。外気もひどく寒かった。夫が呼吸をしているかどうか、耳を近づけてみた。夫は静かに横になっていた。寝息もまったく聞こえなかった。わたしは恐れて、夫の体に手を触れてみた。恐ろしいことに、最も恐れていたことが現実のものとなったのだ。夫はすでに亡くなっていた。わたしは同じテントに眠っていた人々に助けを求めた。しかし、それに応じられる人はだれもいなかったのである。自分としては、夫の亡骸のわきで朝まで過ごすしかすべがなかった。その時間が何と長く感じられたことか。朝の光が差し込んだころ、隊の男性が何人かやって来て、夫の埋葬の準備をしてくれた。その埋葬も葬儀もひどく悲惨なものであった。夫が身に着けているものもわずかだったが、その衣服を脱がすこともなく、夫の遺体は毛布に包まれて、ほかに亡くなった13人の遺体とともに地面の上に置かれた。そして、その上に雪がかぶせられた。地面は寒さで凍結していたために、墓を掘ることができなかったのである。夫はそこで、神のラッパが鳴り響いて、キリストにあって死者が目を覚まし、第一の復活の朝によみがえるまで、安息の眠りに就くことになった。……

夫が亡くなってから数日後のことであるが……さらに死者が出て、隊の男性の数がめっきりと減り、残っている男性たちも衰弱し、病気のためにやせ細っていた。そのため、その晩、野営地に到着したときも、テントを張るだけの余力のある男性の数が十分いかなかった。その結果、我々は、天空を屋根とし、星を友として、外で野営をするほかなかつたのである。雪も10センチほど積もっていた。その夜もひどく寒かった。わたしは岩の上に座り、一人の子供をひざに、それに両わきに子供を一人ずつ抱えたまま、夜明けまでまんじりともせず過ごしたのである。』³

この時点で、先発隊の一員であったグラント隊長からブリガム・ヤング大管長のもとに1通の書簡が送られました。その内容は次のようなものでした。

「この人々の状況を説明するに当たっては、多言を必要としないだろうと思います。この緊急の書簡を携えた、ご息のジョセフ・A〔・ヤング〕兄弟やガー〔兄弟〕から詳細な報告をお受けください。ご想像ください。500人から600人の老若男女が、雪と泥の中で手車を押す作業に、疲れ果てています。街道わきで力尽き、倒れ、寒さに凍えています。子供たちは泣き叫び、関節も寒さのために固くなっています。足からは血を流し、中にははだしのまま、雪と霜の中を歩いている者さえいます。我々の中の最も屈強な者でさえ、この光景は見るに堪え

られません。』⁴

ソルトレーク・シティーでは、1856年10月5日に総大会が開かれていました。その中で、ブリガム・ヤング大管長は次のような説教をしています。

「大勢の兄弟姉妹が、高原を手車でこちらに向かっていきます。ほとんどの人は、ここから700マイル（1,100キロ）ぐらい離れた所にいます。彼らをここへ連れて来なければなりません。彼らに援助を送る必要があります。……

わたしは今日、監督の皆さんに要請します。60頭の元気ならばの隊と12台から15台の幌馬車が必要で、明日まで待つことはできないし、その翌日まで待つこともできません。牛を送ろうとは思いません。必要なのは元気な馬とらばです。そしてわたしたちの周りには馬もらばもいます。ぜひそれを集めなければなりません。また1万1,000キロの小麦粉と、実際に馬やらばを駆る人のほかに、良い御者を40人そろえる必要があります。……第1に、馬車を操り、部隊を統率することのできる元気な若者が40人必要です。現在、その部隊は、馬車の操り方を何も知らない男女や子供たちが動かしているからです。第2に、60頭から65頭くらいのらばか馬の隊が必要です。この隊には、馬具、連結用の横木、くびき、足かけ、連結用チェーンなどが必要です。第3に、1万1,000キロの小麦粉が必要ですが、それは今手もとにあります。……

皆さんに申し上げます。わたしが今話しているような原則を実行に移さないかぎり、皆さんの中で、その信仰、宗教、信仰告白によって神の日の栄えの王国に救われる人はだれもいないでしょう。さあ、行って、今平原にいる人々を連れて来てください。現世のこと、あるいは現世の義務と呼ばれるこうしたことを確実に実行してください。もし実行されなければ、皆さんの信仰も徒勞に終わることでしょう。皆さんが耳にした説教も、皆さんにとって無駄なものとなります。わたしたちが皆さんに申し上げたことを実行しないかぎり、皆さんは地獄に落ちることになるでしょう。』⁵

この準備が進められているころ、ウィリー隊には物資を積んだ幌馬車隊が接近中であるという知らせが届いていました。そこで、ウィリー隊長ともう一人の人が、この幌馬車隊の探索のために派遣され、立ち往生している聖徒たちを救出するために急いでほしいと要請することになりました。ジョン・チズレットはこう記しています。

「ウィリー隊長が出発して3日目の夕方（10月21日）、太陽が遠くの丘に美しく沈みかけたときのことであった。野営地のすぐ西の山の上に、数台の幌馬車が姿を現したのである。それぞれ、4頭の馬に引かれ、わたしたちの方に向かって進んで来るではないか。その知らせは、りょう原の火のように、瞬く間に野営地中に伝わった。そして、ベッドから起きられる者は皆、こぞってその幌馬車隊を出迎えたのである。数分経過すると、わたした



苦しんだ開拓者たちが、救出に当たった幌馬車ほろに乗せられてソルトレーク盆地の近くまでやって来たとき、ヤング大管長は聖徒たちを集めて、宿舎を提供し、病人の看護に当たるよう要請して、こう言いました。「自分の子供として迎えてあげてください。自分の子供に接するときと同じ気持ちで接してください。」

ちのあの信仰深い隊長が、幌馬車隊のほんのわずか前を進んで来る様子をはっきりと分かった。喜びの叫び声が天空に響きわたった。屈強な男たちも泣き、陽焼けしてしわの刻まれた頬ほおに涙がとめどなく流れた。幼い子供たちの中には、その理由が理解できない子供たちもいたが、大半の子供たちは一緒になって喜び、喜びのあまり迎いはばからず踊り始める者もいた。大勢の人々が喜びに浸る中で、それまで抑えられていたものが一気に解き放たれた。兄弟たちが野営地に入ると、姉妹たちは兄弟たちを抱き締め、何度もキスをした。』⁶

その後、このウィリー隊の人々がソルトレーク盆地まで近づいて来ると、ブリガム・ヤング大管長は再び聖徒たちをタバナクルに集め、次のように言いました。

「この人々が到着したときには、わたしとしては、すぐに自力でそれぞれの家に入るようなことはさせたくないと考えています。前からこの町に住み、すでに立派で快適な家を持つ家族のもとに割り振りたいと考えています。今わたしの前にいるすべての姉妹の皆さん、そして、新しい客人を迎え、世話をすることのできる皆さん、また適切な医療活動ができる皆さんや、食事を提供することのできる皆さんをお願いします。このようなことについて語るというのは、わたしにとっては、信仰の一部なのです。それは、聖徒たちの面倒を見るということに関連しているからです。……

午後の集会は中止とします。姉妹の皆さんには、これから帰宅して、到着したばかりの人々に何か食べる物を

提供する準備を開始していただきたいのです。ふろに入れ、看護に当たる準備を開始していただきたいのです。もしわたしが今到着したばかりの人々のような状況に置かれていたとしたら、皆さんの一致した祈りよりも、軟らかい食べ物や牛乳、あるいは塩味の焼いたじゃがいもといったものの方がいっそう必要とされているということは、皆さんも御存じでしょう。もちろん、皆さんが午後もここにとどまって、祈りをささげるつもりでおられたことは分かります。祈ることはよいことです。しかし、焼いたじゃがいもや軟らかい食べ物、牛乳が必要とされているとき、祈りだけでは、この場合、必要を満たすことはできません。あらゆる義務は、その優先順位を考えて実践することが大切です。……

到着した人の中には、足首まで凍傷にかかっている人がいるかもしれません。ひざまで凍傷にやられている人や、手が凍傷にかかっている人もいるだろうと思います。……どうぞ、自分の子供として迎えてあげてください。自分の子供に接するときと同じ気持ちで接してください。わたしたちは、彼らの一時的な救い手です。それは、わたしたちが彼らを死から救ったからなのです。』⁷

さて、わたしは、わたしたちの現代の預言者も、わたしたちすべての者に向かって、今の時代にあって、行っているのではないかと考えています。ふさわしい若人は皆、伝道に出るべきです。そして、わたしたちは皆、実際に専任宣教師としての召しを受けるかどうかは別にして、伝

道活動に携わり、今まで以上に大なる大義のために働くことができるのです。それは、世界のあらゆるものうち、最も偉大な大義、すなわち、わたしたちの御父の子供たち一人一人の救いに携わることだからです。

このことに関して、1996年10月の総大会で、ゴードン・B・ヒンクレー大管長が次のように述べましたが、わたしはその話に非常に感動を覚えました。「兄弟姉妹の皆さん、これまでこの壇上から多くのすばらしい話が語られてきました。しかしあの状況の中で、ヤング大管長が語った話以上に、雄弁な説教はありません。

来年は、聖徒たちの^{かんなん}艱難辛苦や死の話が度々繰り返されることでしょう。彼らの救助についての話も、何度も繰り返される必要があります。その話は、イエス・キリストの福音の真髄だからです。

わたしは、この教会にこのような開拓者の歴史があることを感謝しています。山中のこのシオンに向かう途中で、雪に見舞われ、凍えたり死んでいたりする兄弟姉妹が、今はいなくなったことに、感謝しています。しかし、絶望的な環境の下にあって、助けを求めている人は大勢います。

飢えや貧困に苦しむ人、助けを必要としている人は、世界中に大勢います。わたしたちは、この教会の会員ではなくてもほんとうに援助を必要としている人々、わたしたちの力で援助できる人々に、助けの手を差し伸べていますが、それができると、感謝しています。しかし、あまり、その間口を広げすぎではいけないと思います。苦しみや、悩み、孤独、恐れのために、助けを求めている人が、身近な所にいるからです。そのような人々に援助の手を差し伸べて、彼らを引き上げること、飢えている者を食べさせ、真理と正義を切望している人の霊をはぐくむことは、わたしたちに与えられている神聖かつ重大な責任です。

目的なくさまよい、麻薬や非行、不道德な行為、そしてそれらにまつわるあらゆる罪悪に巻き込まれ、悲しみの道を歩いている若人が非常に多くいます。夫に先立たれ、親切な言葉や、愛に満ちた心からの気遣いを待ち望んでいる人々もいます。かつては信仰を持って熱心だったにもかかわらず、だんだんそれが冷めてきている人がいます。教会に戻ることを望んでいるのですが、どうしたらよいのかまったく分からずにいる人々も大勢います。彼らは優しく差し伸べられる手を必要としています。わずかの努力があれば、その多くの人々が、また戻って来て、主の食卓で再び恵みにあずかれるようになります。

兄弟姉妹の皆さん、わたしには今、望み、祈っていることがあります。それは、……皆さん一人一人に、困っている人、苦しみを抱えて困難な状況にある人を見つけ、愛の心をもって教会に導く決心をしていただきたいのです。そしてその人たちが、教会員の力強い手と優しい心

ブリガム・ヤングがウィリー手車隊の開拓者たちを救うよう聖徒たちに求めたと同様に、わたしたちの現代の預言者も、わたしたちのすべての者に向かって、今の時代にあって、世界のあらゆるものうち、最も偉大な大義、すなわち、わたしたちの御父の子供たち一人一人の救いに携わるように、と言っています。

によって温かく迎えられ、慰められ、支えられ、幸せの道を歩めるようにしてほしいのです。』⁸

願わくば、わたしたち一人一人が^{ほらから}同胞のために仕える者となる決意をすることができますように。また、天父の助けがあつて、わたしたちが望まれているとおりに偉大な御業に深くかかわることができますように。そして、行って、今「平原に」いる人々を連れて来ることができますように。□

注

1. *Ensign* 『エンサイン』1973年7月号, 124
2. リロイ・R・ヘーフェン、アン・W・ヘーフェン共著、*Handcarts to Zion* 『シオンに向かう手車隊』101-105
3. 同上, 111-112
4. 同上, 116-117
5. 同上, 120-121
6. 同上, 106
7. 同上, 139
8. 『聖徒の道』1997年1月号, 98-99

ホームティーチャーへの提案

1. わたしたちが教会で教えている最も大切な原則の一つは、人々の必要を満たすよう努めることです。
2. 聖文や教会歴史には、偉大な奉仕の原則について語る話が数多くあります。
3. 現在、ヒンクレー大管長は次のような人々を探し出すよう、強く勧めています。
 - 目的なくさまよい、麻薬や非行、不道德な行為といった悲劇の道を歩んでいる若人 ^{ほんりょ}
 - 親切な言葉を待ち望んでいる、伴侶に先立たれた人や独身成人
 - 物質的にも霊的にも飢え乾いている人々
 - 困難な状況にあつて、愛の心で支えられる必要のある人々



「あなたは イエス・キリストの 友達なの？」

マイケル・グリフィス

その少年の言葉に、
わたしは深く考えさせられました。
自分はこう呼ばれるに
ふさわしいのだろうか、と。

わたしはそのとき、アルゼンチン中部のある町外れの、道端に座っていました。わたしは宣教師で、そこが最初の任地でした。同僚は面接をしていて、わたしは時間を無駄にするよりも、腰を下ろして宣教師が使うレッスンプランの勉強をしようと思いました。

レッスン5のページを開いたちょうどそのとき、一人の少年がふざけるようにしながら道を渡っている姿が目に入りました。彼はだれかに追いかけているようでした。わたしは、だれに追いかけているのだろうと思いました。捕まえられるのをとても怖がっているという感じでした。そして、彼のすぐ後に迫っている「鬼」の姿が見えました。それは女の子でした。少年はきっと、その鬼の女の子に捕まっては大変だと思いながら逃げたのでしょう。

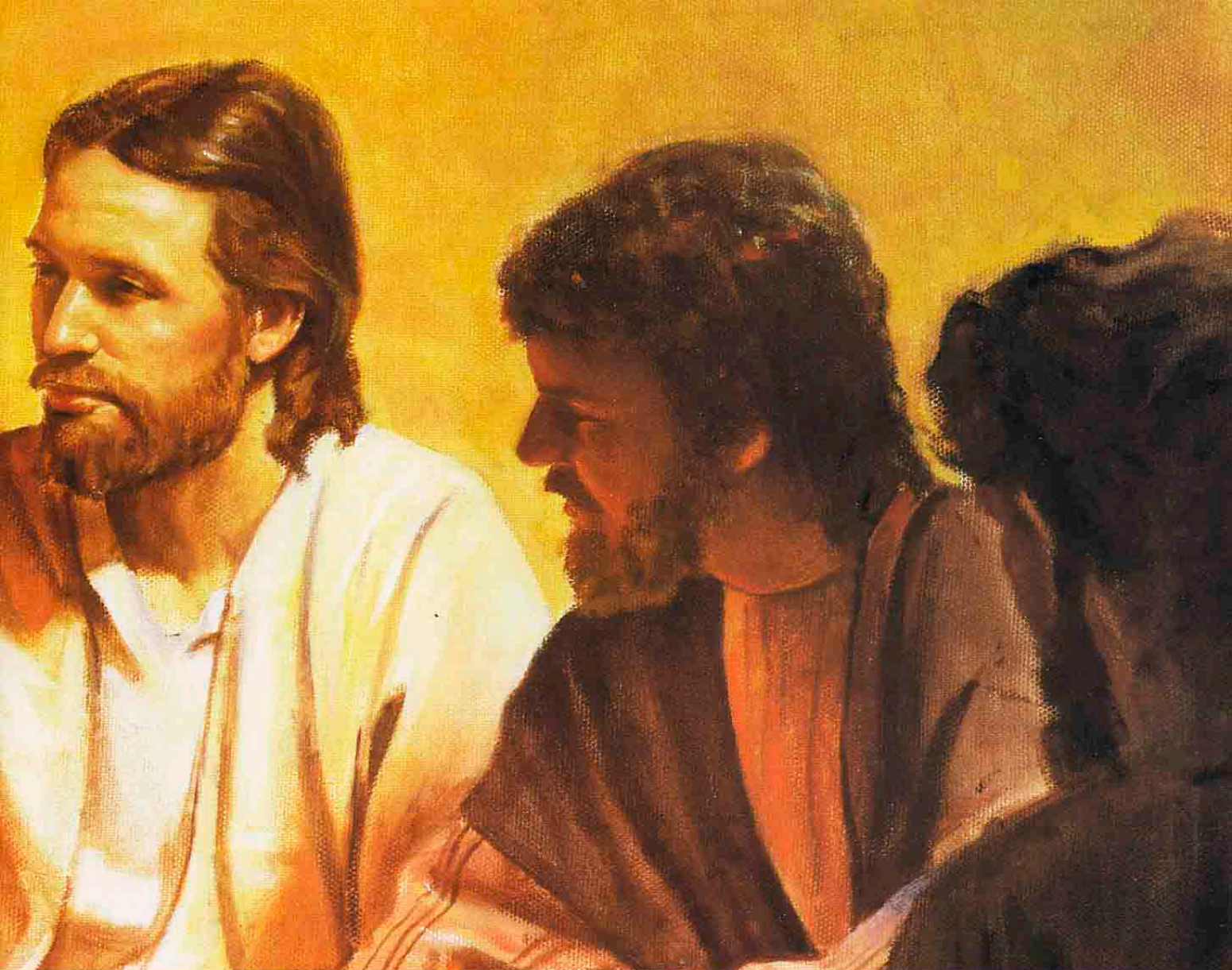
そのとき、少年がわたしの方を見ました。彼はそのとき「まさかスーツを着たアメリカ人のところまでは追いかけて来ないだろう」と考えたのだと思います。そのとおりでした。すぐに彼はわたしのところへ来ました。道にはほかにだれもいませんでした。その10歳くらいの少年はわたしのコートの下に隠れました。

彼はわたしが持っていたレッスンプランをひったくると、「キリストに倣った生活」というレッスン5のタイトルを読みました。そして彼とわたしの間で福音についてのレッスンは始まりました。彼が何か言いました。彼が話したことをはっきり理解できませんでしたが、恐らく「ところで、あなたはどのような人なの」というようなことを聞いてきたのだと思います。

わたしは宣教師がしていることを簡単に説明しようとしたのですが、彼から聞き返されて、深く考えさせられ、謙遜な気持ちにさせられました。彼はわたしが話した全部のことをまとめようとして、スペイン語でこう聞いてきたのです。「あなたはイエス・キリストの友達なの？」

「そうだよ」とわたしが答えると、彼は自分の言ったことが、わたしの心をどんなに騒がせたかなどとは少しも考えず、また遊びに戻るために駆け出して行ってしまいました。

彼の言葉がわたしの頭から離れませんでした。「あなたはイエス・キリストの友達なの？」わたしには彼がスペイン語で話したその言葉のニュアンスがはっきり分かりませんでした。「彼は単なる事実関係の確認として聞いたのだ



ろうか、それとも、もっと深い意味で聞いたのだろうか。」
「わたしはイエス・キリストの友達なのだろうか」と自問しました。イエス・キリストの友達であるとは、どういうことなのだろうか。

その体験をしてから少したったある日の朝、『教義と聖約』を読んでいるときに、その中のある一節に目が留まりました。その箇所ではジョセフ・スミスは、預言者の塾で語られるあいさつの言葉を記録しています。

「あなたは兄弟、または兄弟たちですか。わたしは永遠の聖約のしるし、すなわち記念として、主イエス・キリストの御名によってあなたにあいさつします。この聖約に従って、わたしは、神の恵みにより、愛のきずなをもって、あなたの友になり兄弟になるという、また感謝をもって、罪がなく、神のすべての戒めに従ってとこしえにいつまでも歩むという、確固とした揺るぎない不変の決意をもってあなたを仲間を迎え入れます。アーメン。」(教義と聖約88:133)

友についての定義で、これ以上のものを見たことはありません。このような関係こそ、固い決意で結ばれた友情による兄弟愛であり、この祈りはその意味するところ

をよく説明しています。このあいさつの中で、「確固とした」「揺るぎない」「不変」「従う」「罪がなく」という言葉で表現されている数々の特質は、わたしの心を強く打ちました。そしてイエス・キリストの友であるためには、これらの特質が求められるとしたら、自分はふさわしくないということに気づきました。

キリストは友とはどういうものかを、完全な模範によって示されました。キリストはわたしたちに、御自分の友としてふさわしい者となり、その御業^{みわざ}によって可能になった恵みを受けるようにお望みです。ヨハネによる福音書第15章14節で、主はこう述べておられます。「あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」そして、その前の聖句にはこう書かれています。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」(13節)

主は普通の友人ではありません。

あの少年は「あなたはイエス・キリストの友達なの」と言いました。わたしたちは皆、この問いかけが事実関係の確認だけのものなのか、それとももっと深い意味のものなのか、自分自身で結論を出さなければなりません。□



すべてのものを なくした後に

匿名

ILLUSTRATED BY GREG G. THORKELSON

わたしたちはこの世の人生において、家、家族、財産など、文字どおりすべてのものを失ってしまうことがあります。しかし、天の御父が生きておられること、わたしたちが神の子供であること、神がわたしたちを深く愛しておられることなどの知識、すなわち最も大切なものは、だれも取り去ることができません。わたしはこのことを、まだ若いころに味わった、決して忘れることのできない経験を通して学びました。

それは1983年、わたしが15歳のときでした。そのちょうど1年前に、わたしは福音を見いだして、バプテスマを受けていました。

わたしの家族が住んでいたペルーの

その地域は、特にテロ行為に悩まされていました。4月20日の午後、テロリストの一隊が銃やダイナマイトで武装して町へ入って来ました。彼らは、わたしの母、兄、そしてわたし自身も含めて、人々を駆り集めだし、殺すと脅しました。わたしは心の中で、もし死ななければならないのなら、パラダイスに行けるようにしてくださいと祈りました。

テロリストたちは、自衛のために石、棒、あるいはほかの武器を持っていた人々をすべて縛り上げ、機関銃で撃ち殺しました。女の人たちは、夫、兄弟、息子を殺されて泣き悲しみました。わたしの母も、息子（わたしの兄）を殺され、泣き悲しみました。

それからちょうど1か月後の日の午

前1時に、そのテロリストたちがまたやって来て、特にわたしの父を捜しました。父はその町の指導者で、テロリストに対して自警団を組織したというデマを流されていました。このときテロリストたちはわたしの両親とほかに何人かの人たちを捕えて殺しました。わたしは弟や妹たちとおばの家で寝ていました。もしそうでなければ、わたしたちも殺されていたことでしょう。しかし、わたしたちは山の中へ逃げ込みました。

明け方になって、わたしたちは激しい雹に見舞われましたが、小降りになるとすぐ、わたしは山の向こうの町に助けを求めるために走りだしました。しかし、その山にはテロリストが何人

か潜んでいて、彼らはわたしを追いかけて来ました。電でとても滑りやすくなった山肌を下り始めながら、わたしは主に助けを祈り求めました。そして奇跡的にテロリストたちの追跡を逃れることができたのです。

危機を脱したわたしは、すぐにひざまずいて、主に感謝し、御守りを求める祈りをささげました。祈り終わると、それまで何事もなかったかのような、すばらしく安らかな気持ちを感じました。それまでは足がひどく震えて仕方がなかったのが、また力が戻って来て、走り続けることができました。恐怖心はすっかり消えていました。両親を殺されたばかりでしたが、天の御父が自分を見守り、愛してくださっているという強い確信がありました。

逃げ込んだ町の人たちの助けを得て、兄弟たちを助け出すことができました。

わたしが当面、最も差し迫って考えなければならないのは、小さな兄弟たちの世話をどうするかということでした。いちばん小さい子はまだ4歳にしかありませんでした。数週間、わたしたちは避難民として、ひどい飢えに苦しむ日を送りました。

その後、わたしは仕事を探しに、首都のリマへ行きました。その間、わたしはいちばん上の弟に世話を頼んで家に残してきた兄弟たちのことが心配でなりません。時々、その地域でテロが続いているというニュースも入って来ました。わたしは、兄弟たちが死んでしまっただけではないかと、泣いて過ごすことがよくありました。それでも、あの日山の中で受けた、天の御父が生きておられ、わたしたちを愛してくださっているという証が、心の支えとなりました。

もうこれ以上仕事探しをしても無駄だとあきらめかけたときに、さつまい

も掘りという短期間の仕事を得ることができました。わたしは年も若く、きちんとした証明書なども持っていませんでしたが、信仰と祈りによって、いつまでも働ける仕事をついに見つけることができました。それから数か月して、わたしは弟や妹たちをリマに呼び、一緒に暮らせるようになりました。おばの一人がわたしたちに住む所を提供し、別の人からも台所用品を幾つかもらうことができました。両親の持ち物はほとんどが盗まれてしまっていて、わたしたちは着のみ着のままの状態でした。しかし家族が皆で一緒にいられるかぎり、ほかのことは大した問題ではありませんでした。

わたしの両親は子供たち全員に、だれ一人例外なく、仕事や家事の仕方を教えてくれていました。後になって、わたしは両親がほんとうにすばらしい模範だったことを深く理解するようになりました。今わたしは、小さいときから責任を持つよう両親に教えられたことを感謝しています。事の成り行きで、いきなり親代わりをすることになりましたが、両親はわたしたちに、直面する困難を乗り越えるための備えをさせてくれたのでした。そして主の祝福もありました。主はわたしたちを見守っていてくださり、わたしたちは何度も奇跡を目の当たりにしました。

その後、年を重ねていく中で、兄弟たちを養う責任を考えると、「自分は果たして伝道に出られるだろうか」と思うようになりました。それでも伝道への望みは抑え難く、伝道に出なければ得られない祝福について何度も考えました。ある晩、わたしは夢の中で、救い主が自分のすぐそばにお座りになっている姿を見ました。そのときに感じた安らぎはとてすばらしいもので、わたしは自分に求められていることをそれ以上疑わなくなりました。

雇い主が長期の休暇をくれ、わたしは伝道の召しを受けました。伝道に出て1年たったとき、弟から手紙が来て、雇い主の気持ちが変わり、わたしが戻るまで仕事場の空きをそのままにしておくことはできないという話になったのを知らせてきました。伝道を中止して戻らなければ、仕事を失うことになるというのです。わたしは弟にこう返事を書きました。「そのことで心配する必要はない。今の仕事をなくしても、もっと良い仕事が見つかるよう、主が助けてくださる。」そしてわたしは伝道を任期どおり務めました。

わたしの伝道中、兄弟がだれ一人大きな病気にかからなかったことに感謝しています。わたしに戻ったとき、皆元気な顔を見せてくれました。わたしたち兄弟は、助け合いながら、今一緒に暮らしています。両親との結び固めも受けました。わたしはとてすてきな女性と神殿で結婚し、二人の子供に恵まれました。ですから、今は9人家族です。

わたしはほかにも幾つかすばらしい祝福を授けられてきました。教会の職員として雇われ、リマ神殿で事務の仕事をする傍ら、儀式執行者として奉仕しているのです。またこれまで数年間監督としての召しを受けています。これもわたしの人生におけるすばらしい祝福となっています。

わたしは監督としての召しを通して、人々が味わっている様々な苦しみを理解する機会を得てきました。この召しとほかの様々な体験を通して、わたしは困難を克服するには、主への信仰を強め、全力を尽くし、主の約束が果たされるという固い望みをもって仕えるのが最善の方法であることを学んできました。わたしたちが自分の責任を果たすなら、主の約束は必ず果たされることを証します。□

モルモンメッセージ

天国への入り口



主の家でわたしたちは、世を離れ、永遠の栄光に至る道を歩み始める
(教義と聖約110：7-9参照)。

独身成人との語らい

大管長ゴードン・B・ヒンクレー



愛する兄弟姉妹の皆さん、こよい皆さんとともにこの場に集えるのはすばらしい特権です。お分かりとは思いますが、わたしにはいろいろ異なったたくさんのグループの方々に向けて話をする機会があります。しかし現在、こよいの皆さん以上に話をしたいグループはありません。皆さんは悩みや問題への答えを求めてここに来られました。皆さんはたくさんの問題を抱えておられます。確信を得たい、助けを得たいと思っておられます。聖なる御霊の導きにより、皆さんにとって助けとなることを語れるように祈っています。

皆さんは様々な人々が集まっているグループです。わたしの理解では、皆さんは30歳を超えています。でもある意味では、皆さんを一つにまとめる共通項は、主の教会の会員であることを除けばそれだけです。

中には結婚の経験のない方がおられます。結婚の後に離婚した方で、お子さんがいらっしゃる方とそうでない方がいらっしゃいます。多くの方々は、お子さんの養育のために苦勞をしておられます。皆さんは経験を通して、世の中というものは冷たく残酷なものであることを感じてこられました。皆さんは助けを求めておられます。皆さんには助けが必要です。

また、伴侶に先立たれた方がおられます。その孤独感はたとえようのないものであり、しかも終わることを知りません。

このように、皆さんの置かれた立場は様々ですが、わたしたちは皆さんがあたかも同じであるかのように、一つのバッジを皆さんに着けました。そのバッジには「S-I-N-G-L-E-S」(訳注——「独身者」の意)と書いてあります。わたしはそういう言葉が好

きではありません。人を分類するのが嫌いなのです。わたしたちは皆、ともに生活する個人であり、個人的な事情はそれぞれ異なっても互いに尊敬し合える間柄なはずです。

わたしは皆さんと一緒にいて親近感を覚えます。それは皆さんが末日聖徒だからです。皆さんの心には、神が生きておられ、イエスがキリストであり、この教会が全能者である救い主によりつくられ、その名を冠する教会であるとの信仰があります。皆さんは祈りをささげています。それはすばらしいことです。しばしば助けを求めて、連れ添える人を求めて、また困難から逃れる道を求めて熱烈に祈られることもあるでしょう。そして、なぜ希望どおりに祈りがこたえられないのだろうと考えておられることと思います。

わたしたちは皆、同じことを経験してきました。しかし時がたつにつれて、天の御父は確かにわたしたちの祈りを聞いてくださるということを理解します。神の知恵は人の知恵よりも偉大です。時には答えを識別するのがなかなか難しいこともあると思いますが、神は確かにこたえてくださるのです。

わたしは心から皆さん一人一人を愛しています。わたしは少なくともある程度は、皆さんの抱えておられる問題や望んでおられることを理解しているつもりです。こう申し上げると皆さんは反論されるでしょう。「あなたはわたしたちのような経験はしていないのですから、ほんとうのことは理解できませんよ。」

その反論はある程度真理であると言えます。でも、だからと言って皆さんに対するわたしの思いを拒まないでください。わたしは皆さんに同情するつもりはありません。人から哀れに思わ

れることは嫌なものですから。そうではなく、わたしは愛と理解の精神で単に皆さんと語り合いたいと思うのです。

ここにいらっしゃるすべての方は、伴侶がおられないと思います。そして多くの方が結婚を望んでおられます。結婚できれば問題はすべて片付くと考えておられるのです。確かに幸福な結婚生活は、通常の末日聖徒であればだれもが抱えている目標です。でも、皆さんにお分かりいただきたいのは、結婚生活を営んでおられる大勢の人々にとって、生活は惨めで、恐れや不安の渦巻くものなのです。与えられている責任の中でわたしが最も重荷に感じるのは、民事離婚の後の結び固めの取り消しの申請に対して判断を下さなければならぬ時です。それぞれのケースについて別個に検討を加えなければなりません。わたしは知恵を求めて、主の導きを求めて祈ります。最も神聖な場で永遠にわたって交わされた神聖な聖約を扱うからです。

離婚に至った状況、神殿の結び固めの取り消しを申請するに至った事情には、利己心や貪欲さ、時には野蠻とも思われる態度、それに虐待や心痛や悲劇の様子が切々と述べられています。

わたしが申し上げたいのは、結婚していても大変に不幸な生活を送っている人もおり、心をえぐり、焼き尽くすような悩みを経験しておられるのは独身の方々だけではないということです。

このテーマについて以前お話をしたとき、たくさんのお手紙を頂きました。わたしはいつも手紙をたくさん頂きます。そのときに受け取ったものの一つをご紹介します。

「わたしは20年以上もの間、自分が独身であることへの教会員の思いやり



皆さん一人一人に何かしら神から受け継いだものがあることを、決して忘れないようにしてください。

のなさに耐えてきました。わたしは仕事の関係で国内各地を転々としてきましたが、それぞれの地元の教会の活動に参加するに当たって様々なレベルの歓迎を受けました。温かくて気さくな歓迎から非常に冷たい無関心の態度までです。また、わたしにどう接したらよいか分からないところから来る不快感といったものが見られました。あるワードでは、教会員がわたしが集わないことを望んでいるように強く感じました。それが6か月間続いた後でようやく、不承不承

ながらも受け入れてもらっているという感じに変わりました。でもそれは、なかなか出て行こうとしない厄介者だから我慢しなければならないという受け入れ方なのです。」

これが事実であれば、悲劇です。教会のすべてのユニットの中になければならない精神への裏切りです。皆さんのような男性女性は偉大な才能を持っていて、教会のほとんどすべてのワードにおいて教育と指導性の質を高めるために貢献することができます。監督をはじめとする教会の指導者が一人一人の教会員を温かく歓迎し、その才能を生かすよう指導するのは、教会全体に課せられた責任です。

このように、わたしたちは既婚者や

独身者としてではなく、教会員として分類されるべきです。同じ注目と同じ思いやりを受け、同じ奉仕の機会を与えられる存在としてです。

神性を認める

わたしたちはそれぞれが神の息子、娘、個性のある男性、女性であって、外見や行動の似通った者の集まりではありません。わたしたちはすべて、考えたり、理由づけをしたり、望むならば惨めになったりする能力が同じように備わっています。幸福になりたい、愛し愛されたいとの望みは同じなのです。わたしたちは同じ痛みと感受性と情緒に左右されます。

皆さん一人一人に何かしら神から受け継いだものがあることを、決して忘れないようにしてください。皆さんは神の息子、娘であり、神のすばらしい遺産です。そうした自分を決してないがしろにすることのないように願っています。

この会と同じような場でわたしは、昔の自分自身の体験について話したことがあります。ある晩、妻が女性の間で「シャワー」と呼ばれている集まり（訳注——結婚や出産を控えた人に贈り物をするパーティー）に出かけていて、わたし一人が家に残っていました。わたしは照明を落としてレコードをかけました。ベートーベンのバイオリン協奏曲です。薄暗がりの中でその曲を聞きながら、一人の人間によくぞこれだけの作品が書けたものだと驚きました。ベートーベンもわたしと同じ、一人の人間なのです。わたしはベートーベンの身長や肩幅、髪の毛の量は知りません。でも、わたしたちとそんなに変わってはいなかったはずで、空腹を覚え、痛みを感じ、わたしたちが経験するすべての、いやそれ以上の問題を経験していたのではないのでしょうか。しかし、靈感に満ちたこの人物の頭脳からは偉大な作品が創作され、それが長年にわたって世界中の人々に慰めを与えているのです。

わたしは人間の心と体に驚きを覚えます。皆さんは自分自身の体の驚くべき機能について思いをはせたことがありますか。物を見る目、音を聞く耳、話をするための声。これまで作られたどんなカメラも、人間の目は比べものになりません。これまで考案されたどんなコミュニケーションの手段も、人間の声や耳ほどの働きはできませ

ん。いかなるポンプも、人間の心臓のように長い間、効果的な働きをすることはできません。また、いかなるコンピューターやほかの科学的な創造も、人間の頭脳には匹敵し得ません。皆さんは何と驚くべき存在でしょうか。皆さんは昼には物を考えて、夜には夢を見ることができます。話すことも聞くこともおいをかぐこともできます。指を見てください。指の動きを機械的にどんなに精密に再生しようとしても、それはぎこちない、ほんの一部の動きでしかありません。次に指を使うときは、その動きをよく見てください。そしてその不思議さを感じ取ってください。

皆さんは神の子です。神の被造物の中で最も偉大な存在です。主は地球を創造された後、すなわち闇と光を分け、水を分け、植物と動物の王国を造られた後、男と女を創造されました。繰り返します。どうぞ自分自身をないがしろにしないでください。皆さんの中には自分は魅力的でないとか、自分には才能がないかと思っている方がおられるのではないのでしょうか。自己憐憫という無駄な世界をさまようのはやめましょう。世界に名の知られた宣教師の中で最も偉大な人物パウロは、背が低く、ローマ人特有の大きな鼻といかつい肩をした鼻声の人物と言われている、その特徴のどれもが、ある人々にとっては魅力に欠けるものとなっています。アメリカ最大の英雄エブラム・リンカーンは悲惨なほどの不器量な人でした。しかし、その彼の偉大な心と頭脳から、ほかのほとんどの人が口にするものなかつた偉大な言葉が語られたのです。

自分をさげすんだり、悲観的な目で見たり、自分を過度に責めたりすることのないようにしましょう。決して人を笑い物にしないでください。交わるすべての人々の生活の中に徳を見つけていくようにしましょう。

祝福とチャレンジを主に感謝する

わたしが今よりももっと若いころ、「いい点を強めて」というタイトルのポピュラーソングがありました。人格や人間的な魅力、人とうまくやっているかどうかを左右するのは、ほかの何よりも増して態度です。聖典には「人はその心に思うそのままであるからだ」（欽定訳箴言23：7）とあります。

結婚を希望する独身の兄弟姉妹の皆さんに、わたしはこう申し上げたいと思います。望みを捨てないでください。努力をやめてはいけません。しかし、伴侶となる人を見つけることばかりに、気を取られてもいけません。そのことを忘れて、ほかのことを一生懸命するようになると、良い相手に巡り会える可能性が飛躍的に高くなります。

新聞の「アビー様へ」の欄（訳注——『シカゴ・トリビューン』紙〔Chicago Tribune〕の投書欄）から少しご紹介しましょう。

「男性にも女性にも好かれる方法は次のとおりです。親切であること。正直であること。気転が利くこと。とてもかわいいとは言えない（ハンサムとは言えない）人は身だしなみをよくして趣味のよいものを身に付け、いつも姿勢をよくするように注意し、ほほえみを忘れないこと。

体と心を清潔にすること。頭が良くなければ人一倍努力すること。スポーツが得意でなければスポーツマンシップを十分に発揮すること。何か一つ秀でたものを持つこと。ダンスも歌もだめなら楽器を習うこと。

自分なりの生き方をしながらもルールは守ること。親切な言葉や思いやりの行為を惜しまず、逆に辛口の批判は避けること。……これを行えば、後でよかったと思うはずです。」(『シカゴ・トリビューン』1991年3月17日付、6)。

わたしはできればすべての女性がすばらしい男性と、すなわち伴侶として生活するうえでふさわしい人、妻としての皆さんだけでなく皆さんのもとに生を受ける者たちの面倒をよく見る働き手、家族の守り手、力の源、いつも愛しいたわってくれる伴侶たるべき人と結婚してほしいと願っています。またすべての男性が、自分を愛してくれる人、慰め励ましてくれる人、読書をしよく考える人、自分だけでなく相手の長所もよく理解し積極的に認めてくれる人、自分の本音を打ち明けられる人、不死不滅と永遠の命へと通じる人生の道を並んで歩ける人と永遠の伴侶になってほしいと思います。しかし残念ながら、物事はいつもこのようにうまくはいきません。うまくいかないことが多いのです。

結婚は高度な忍耐を必要とします。わたしたちの中にはその忍耐力を養わなければならない人もいるでしょう。わたしは次のジェンキンス・ロイド・ジョーンズ氏の言葉が好きで、だいたい前に新聞から切り抜きをしておきました。彼はこう言っています。

「ドライブイン・シアター（訳注——自動車に乗ったまま映画を見ることのできる施設）で手を握り合ってキスをするわたしたちの若人（男女）の多くには迷信があるようだ。彼らは結婚とはいつまでも枯れることのないタチアオイで囲まれた別荘のようなもので、永遠にハンサムな夫が永遠に美しい妻のもとに帰宅するものだと思っている。しかし、タチアオイもやがては枯れ、倦怠感と請求書に直面すると、離婚訴訟のための法廷がごった返すのだ……。

〔結婚生活において〕無上の喜びが得られるのはごく普通のことだと思う人はだれでも、それが奪われてしまったと叫び回って無駄な時を過ごす。

〔現実には〕ほとんどのパットはホールインしない。軟らかなステークはあまりないし、子供だって大人になってみればほとんどがごく普通の人間だ。結婚生活で成功している人は、お互いに高いレベルでの忍耐を示し合っている。そうでなければ、結婚生活の中で行わなければならないほとんどのことは、つまらないことが多い……。

人生とは古き良き時代の列車の旅のようなものだ。遅れ、列車交換のための待ち合わせ、煙、ほこり、すす、揺れ。美しい風景や胸のすくようなスピードを味わうのはほんのまれでしかない。

肝腎なのは、この人生という列車に乗れたことを主に感謝することだ。」(“Big Rock Candy Mountains” *Deseret News* 「ビッグロック・キャンデーマウンテンズ」『デゼレトニュース』1973年6月12日付、A4)

この世の人生にあって、結婚を経験

する人もいればそうでない人もいるという現実を直視しましょう。結婚を経験する人にとっては、人生とは自らを何の条件もなく完全にささげることが意味します。全身全霊をもってことごとく忠誠を尽くさなければなりません。それは永遠に続く聖約であり、伴侶としての関係は常に心を配り養っていかねばならないものなのです。

熱心に善いことに携わる

結婚を経験されない方々に申し上げなければならぬのは、この人生の現実に正面から立ち向かってほしいということです。しかし、独身の状態が続くということは、機会やチャレンジや大きな報いから見放された状態を意味するものではありません。

多くの人にとって、孤独を癒す最良の薬は、人のために働くことだと思います。皆さんの問題を過小評価するわけではありませんが、それよりも深刻な問題を抱えている人がたくさんいるということをあえて申し上げます。そのような人々に手を差し伸べ、助けと励ましを与えてください。わずかな気配りや励ましがないために、暗い学校生活を送っている青少年が非常に多くいます。苦痛、孤独、不安の中で生活している高齢者の方々がいますが、その多くは簡単な会話があるだけで、ある程度希望や喜びを感じられるのです。

自己を捨てて人々のために奉仕してください。イエスは言われました。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い……自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。」(マタイ16:25)



人生に行き詰まりを感じたら、重苦しい孤独感に襲われたら、自分は価値のない人間だと感じたら、出て行って自分よりも惨めな生活をしている人を捜してください。たくさんの方が見つかるでしょう。目の不自由な人のために、お年寄りのために本を読んであげてください。希望を失っている人を助け、悲しんでいる人に慰めを与えてください。貧しい人々に皆さんが持っている物の中から少しを差し上げてください。物を分かち合えば世の中は皆さんにとってもっとすてきな、もっと喜びの多い場所となるはずです。「神に頼って生きるようにしなさい。」(アルマ 37:47) わたしたちにできることで、すばらしい報いが得られるものがたく

さんあるのです。

最近わたしのもとにユタ少年院の会報が送られてきました。そこにマイクという少年の話が載っていました。書いたのは少年裁判所の判事です。

「マイクは9歳のときから車を寝ぐらにするようになり、ギャングともかかわり、危険な武器をも手にし始めた。州の機関は彼を更正させることはできなかった。そこで援助を申し出たのがユタ少年院である。ユタ少年院はマイクの命を救った。少年院はマイクに住む場所を提供し、価値観と標準を教えた。環境は一変し、住む世界も変わったマイクは、今はもう少年院を出て立派に生活している。」

マイク自身の手紙も載っていました。

わたしたち一人一人には学び続けるという偉大な可能性があります。

こう書いています。

「こんにちは。マイクです。ほくは小さいころ、悪さばかりやっていました。悪い仲間に入っていました。それからここに来ました。ここに来られたことをうれしく思っています。ここに来なければずっと悪い仲間と一緒に、問題を起こし続けていたからです。ここに来てほんとうにうれしいです。クリスやデルファのようないい人と会えたからです。ほくも今は家族がいて、楽しくやっています」(ユタ少年院, *New Beginnings Round-Up* 『新たな始まり』1996年秋季, 1)。

傷ついている人はたくさんいます。彼らはその傷に包帯をして宿屋まで連れて行ってくれる良きサマリヤ人を求めています。困っている人には小さな親切が大きな祝福となり、また親切な心を示す人の心にも良い気持ちをもたらします。

続けて学ぶ

もう一つ覚えておいていただきたいことがあります。わたしたち一人一人には学び続けるという偉大な可能性があるということです。重い病気にかかっているかぎり、わたしたちは年齢に関係なく読書をし、勉強をし、素晴らしい人々の著したものを心ゆくまで味わうことができます。ジョシュア・リーブマン博士はこう語っています。「偉大なことは、生きているかぎり成長するという特権を得ていることです。新しい技術を学んだり、新しい仕事に着手したり、新たな目的のために献身したり、新たな友人を作ったりすることができます。そこで、自分たちには得手不得手があるという事実、また天才はほとんど存在しない、ほとんどが中くらいの人だという事実を受け入れたうえで、自分たちは変わるし変わらなければならぬのだということに心に留めましょう。わたしたちは死ぬその日まで成長することができます。自分自身の内にある隠れた宝を掘り当てるのです。」

この教会の会員であるわたしたちには、主からの驚くべき約束があります。主はこう言われました。「神から出ているものは光である。光を受け、神の

うちにいつもいる者は、さらに光を受ける。そして、その光はますます輝きを増してついには真昼となる。」(教義と聖約50:24)。

何とすばらしい言葉でしょうか。これはわたしの好きな聖句の一つです。この聖句には、成長、進歩、神へと通じる道を進むことが語られています。そしてこの聖句は、以下の偉大な宣言と対を成すものです。「神の栄光は英知である。言い換えれば、光と真理である。」(教義と聖約93:36)「もしある人が精励と従順によって、この世でほかの人よりも多くの知識と英知を得るならば、来るべき世でそれだけ有利になる。」(教義と聖約130:19)「わたしたちがこの世において得る英知の一切は、復活の時にわたしたちとともによみがえる。」(教義と聖約130:18)

これらの驚くべき言葉に秘められたチャレンジは、何と深い意味を持っていることでしょうか。わたしたちは続けて学ばなければなりません。続けて知識を増し加えていくことは、神から授けられたわたしたちの務めだからです。

わたしたちにはインスティテュートのクラスや大学の公開コース、教育週間などたくさんの機会が与えられていて、そこで学び、人々と意見を交換することにより、わたしたちの内には驚くべき能力の蓄えがあることに気づくでしょう。

学ぶに遅すぎることはありません。わたしはこのことを心から信じています。ヒンクレイ姉妹もわたしも年を取りました。二人とも80代半ばです。でもわたしは、妻の読書好きにはほんとうに驚かされています。新聞を1日に2

種類読み、雑誌に目を通し、『モルモン書』と『教義と聖約』を熱心に読んでいます。それに加えて先日の夜は、分厚い伝記を読んでいました。

様々な分野の書物を読むこと以上に会話を魅力的にしてくれるものはありません。主はわたしたちにこうっておられます。「最良の書物から知恵の言葉を探し求め、研究によって、また信仰によって学問を求めなさい。あなたがた自らを組織しなさい。……怠惰であるのをやめなさい。」(教義と聖約88:118-119, 124)。

最良の書は聖典です。主は言われました。「聖文を調べなさい。あなたがたはその中に永遠の命があると思っているが、これはわたしについて証をするものである。」(欽定訳ヨハネ5:39) 教会の機関誌を読んでください。ほかにも読んでためになるものがたくさんあります。読書は心を研ぎ澄まします。知性に磨きをかけます。わたしたちの時代のみならず歴代の偉大な人々の思いに触れることにより、皆さんの語る言葉はもっと豊かになることでしょう。

でも、何を読むかに注意してください。疫病を避けるようにポルノグラフィを避けてください。ポルノグラフィは死に至る病気と同様に危険だからです。汚らわしい言葉を避けてください。また、多くのテレビ番組、ビデオ、風俗雑誌、電話による風俗情報に見られる、人を誘惑する卑しい情報を避けてください。わたしが申し上げているこうしたわいせつな情報が、今やインターネットで見られるようになってきました。これらは皆さんに何の利益ももたらしません。皆さんを破滅に陥



PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

れるだけです。

もう一つ申し上げます。最近独身の男女だけで旅行をしたり、遠い所を訪問したりすることが増えています。そうした行為は危険をいっぱいにはらんでいます。独身の男女がそうした状況にあるとき、どれだけ無防備かを理解してください。火遊びをしてもやけどはしないからと思っておられるかもしれませんが、それは、わたしから言わせれば危険な考えです。皆さんが持っておられる最も大切なものに忠実であってください。そして妥協を求められるような状況に遭遇したときには、鋼鉄のような自制心を働かせてください。

兄弟たちに申し上げます。勝手気ま

まな振る舞いをする権利は皆さんにはありません。神の神権を持つ人が人を不道徳な行いに誘うことは、あってはならないことです。自制心を働かせて思いをコントロールし、衝動を抑えることは、どうしても必要なことです。

教会で奉仕する

皆さん全員に申し上げます。教会の中での奉仕への招きはすべて受け入れてください。そしてこの栄光あふれる主の業にあって、誠実かつ忠実であり、忠誠と支持を怠らないでください。わたしたち一人一人がこの偉大な大義と

皆さん全員に申し上げます。教会の中での奉仕への招きはすべて受け入れてください。

王国の一翼を担っているのです。この全能者の業には、怠け者や批評家、悲観論者のいる余地はありません。クラスを教えてください。それは少年少女を立派な男性と女性に成長できるように方向づけをすることになります。プロジェクトがあったら進んで参加を申し出てください。そして最も大切なこととして、普段の人知れない生活の中で、主が皆さんに与えてくださった善を反映させるような行動を取りましょう。皆さんはすばらしい国に、しかも

世界の歴史の中の偉大な時期に生を受けました。皆さんは回復された福音の知識や教会員としての資格、主の業への心からの証を祝福として得た、比較的少数の人々に数えられるのです。

よく祈ってください。皆さん一人一人が朝晩ひざまずいて、主に感謝の気持ちを書いていただければと思います。また義にかなった心の望みを主に話してください。そして、助けを必要としている人、悲しんでいる人のために祈ってください。

ひとり親の兄弟姉妹の皆さんに特別な感謝の気持ちを申し上げたいと思います。皆さんの重荷は大変なものです。わたしたちはそれを知っています。皆さんの悩みは深いことでしょう。経済的に楽になることはありません。時間的にも楽になることはありません。どうぞ最善を尽くして、あとはお子さんが恵みと理解と、そして最も大切なこととして、信仰のうちに成長することができるように、主に助けを願ってください。それを行えば、ひざまずいて目に涙をいっぱいためながら、主が授けてくださった祝福に感謝する日が訪れるでしょう。

伴侶に先立たれた年配の兄弟姉妹、皆さんは貴重な存在です。皆さんは長い人生を送り、経験が豊かです。酸いも甘いもかみ分けてこられました。痛みや悲しみ、孤独、恐れも多くも経験済みです。しかし同時に、わたしたちの父なる神はわたしたちが困っているときには決して見捨てることはなさらないとの心地よい、何ものにも代え難い確信もお持ちです。皆さんのこれからの日々が安らかであるように願っています。天からの祝福がありますよう

に。過去の思い出の数々から慰めと力を得られるように願っています。また、皆さんがその成熟した愛と思いやりをもって、失意にある人々に手を差し伸べ、援助してくださることをお願いいたします。

兄弟姉妹の皆さん、試練を超えたところを見てください。人の苦しみを和らげる努力をすることにより、自分の苦しみを忘れるようにしましょう。機会があれば人々と交わりましょう。そうすることは大切です。わたしたちには話し相手が必要ですし、心の思いや信仰を分かち合う人がいなければなりません。友達を作ってください。まず自分が相手にとって良い友達になることから始めましょう。

重荷を主と分かち合いましょ。主はわたしたち一人一人にこう言っておられます。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。

わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。

わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ 11:28-30)

提案をいたします。家族歴史の業を始めてください。そのとりこになるはずです。

いつも、どのような状況にあっても、神殿推薦状を受け、それにふさわしい生活をしてください。皆さん一人一人が神殿推薦状を受けておられると思います。もしまだであれば、生活を正して主の家に入る資格を得てください。

定期的に神殿に参入しましょう。神殿では自分では何もできない人々のために助けをすることができます。そして神殿を出るときはいつも、入ったときよりももっと善い人間となって出て来ることができます。皆さんが財布やハンドバッグに入れておられる神権推薦状は、皆さんが守られていることを思い出させてくれるものとなるでしょう。また、皆さんが身代わりで行われる業は、ほかからは決して得られない大きな満足をもたらしてくれるはずです。

さて、もう一つだけお話しします。わたしたちには傲慢さや利己心はあってはなりません。主は啓示の中でこう言われました。「あなたは謙遜でありなさい。そうすれば、主なるあなたの神は手を引いてあなたを導き、あなたの祈りに答えを与えるであろう。」(教義と聖約 112:10) わたしはこのことを信じています。皆さんもこれに倣っていただければと思っています。

最後に、わたしたちが皆さんを心から愛していることを知っていただきたいと思います。皆さんに対して尊敬と信頼を抱いていることをご理解ください。わたしは自分に託されている権能の範囲に従って皆さんを祝福いたします。信仰と義の道を歩まれるときに、たくさんの方が幸福が得られますように、必要な物質的な恵みが頂けますように。考えていることや感じていることを分かち合える友人に恵まれますように。そして世の贖い主の愛を味わうことができますように。□

1996年9月22日、ソルトレーク・タバナクルでの説教から。

「知識の言葉」

「別の人には、知識の言葉が与えられる。それは、すべての人が教えられて賢くなり、また知識を得るためである。」(教義と聖約46：18)

すべての御^{みな}霊^{たま}の賜物のように、知識の言葉は聖霊の力により受け、また伝えられます。モロナイはこう教えています。「聖霊の力によって、あなたがたはすべてのことの真理を知るであろう。」(モロナイ10：5)

知識は喜びをもたらす

わたしたちが得ることのできる最も重要な知識は、神と御子イエス・キリストを知る知識です(ヨハネ17：3参照)。主を知ろうと忠実に求める者は、「啓示の上に啓示を、知識の上に知識を受けて、……喜びをもたらす永遠の命をもたらすものを知ることができるようになるであろう」(教義と聖約42：61)と、主は約束されています。

ある教会員は、『モルモン書』を2度目に読んだとき、この賜物を受け、約束された喜びを受けました。1度目は、できるだけ早く読み終えるために、ただざっと読みました。でも2度目は『モルモン書』が教えることを理解したいという願いをもって読みました。

「読んでいくうちに、新しい考えが心に浮かんできました。そして、読んだこととわたしが経験したこととのつながりが分かるようになりました。自分をどのように改善する必要があるか、気がつきました。でも、しかられているというよりは、愛されているという気持ちを感じました。わたしの心

は喜びにあふれました。」

研究と信仰を通して知識を求める

神についての知識を求める際には、「神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない」(1コリント2：11)ということをお忘れではありません。御霊はほかでは見いだすことのできない証と知識を与えてくれます(1コリント12：3参照)。

こういう訳で、主はわたしたちに、「研究によって、また信仰によって学問を求めなさい」(教義と聖約88：118、下線付加)と勧告されています。研究による学習は頭と関連しますが、信仰による学習は霊と関連します。アンモンがラモーナイ王を非常に驚かせた福音の知識を得たのも、このような方法によるものでした。アンモンはこのように述べています。「その御霊の一部がわたしの内にとどまっています、神に対するわたしの信仰と望みに応じて、

理解と力を与えてくれるのです。」(アルマ18：35)

また主はわたしたちに、「研究して学び、すべての良い書物に通じ、またもろもろの言語と国語と民族に通じるように」(教義と聖約90：15、88：79も参照)と期待されています。

ソルトレーク・シティーに住むハイデイ・ハリス姉妹は『モルモン書』を研究したいと思いましたが、学校の勉強が忙しくてできないと思いました。ある晩、数学の問題が解けなくて困ったとき、信仰を行使し、助けを祈り求めました。祈り終わると、まず『モルモン書』が目に入りました。彼女はこのような述べています。「それを手に取ると、読み始めました。……ニューファイ第一書の一つの章を読み終え、わたしを悩ませていた数学の問題に再び取り組みました。すると、解けたのです。」

数週間『モルモン書』を読んだ後、ハイデイの成績が良くなりました。「もちろんそれでも勉強はしなくてはなりません。しかし『モルモン書』を読むことで、もっと頑張りが利くようにな……るのです。そして勉強している事柄についてよく理解できるようになり、根気も出てきました。成績が上がっただけではなく、今までになく人とうまくやっていけるようになり、幸せを感じるようになったのです。」(『聖徒の道』1996年2月号、13)

●どのようにしたら霊的な知識を増すことができるでしょうか。

●どのような機会にわたしたちは自分の知識をほかの人と分かち合うことができるでしょうか。□

ILLUSTRATED BY CAROL CUTLER



新しい ワードに なじむ

ジョアン・ドクシー

わ たしたちは皆、自分のワードや支部において接待係です。転入者、訪問者、そして求道者を歓迎したり、ほかの人々に思いやりをもって接したりすることは、末日聖徒としてわたしたちの責任なのです。しかし時として、わたしたちは自分の殻に引きこもってしまい、そこから出て来ようとしなくなったり、見知らぬ人に対して友好的になれなくなってしまったりする傾向があります。以下は自分たちの集会にほかの人々を歓迎するための提案です。

1. ほかの人々を自分たちの兄弟姉妹と見なし、自分が接してほしいと望むように彼ら



にもそのとおりに接する必要があります。救い主もこうおっしゃっています。「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。」(マタイ7:12)

2. 転入者が自分たちのワードや支部に来たら、彼らを歓迎し、自己紹介をし、助けになれるよう、また友好的になれるよう努める必要があります。キリストの福音から見いだした喜びを放つ必要があります。

3. 親切で、友好的なあいさつや、受け入れようとする姿勢に訪問者は反応するものです。教会員でない人の多くは、なぜ自分がそんなに親切に接してもらえるのかを知りたいと思うでしょう。もちろんその答えはイエスの教えに見いだすことができます。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハネ13:34)

4. マービン・J・アシュトン長老の勧告は、古くからの友人のみならず、新しい知人に対しても当てはまります。「人と交わるとき、また友人を今よりもっと幸福な状態にしようと努めるとき、自分のことは忘れましょう。」(The Measure of Our Hearts『心の物差し』114)

もしわたしたちが教会でほかの人々、特に「町のうちに寄留している他国人」(申命24:14)を高め、仕える機会を見つけるといふ決心をするなら、多くの人々に祝福をもたらすことができるでしょう。わたしたちが神の子らを歓迎し愛するとき、主が導いてくださるのをはっきりと知ることができます。そして、彼らは「もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者」(エペソ2:19)となるのです。□

転入者への提案

パトリシア・ニールセン

数年前、主人の会社での昇進に伴い、わたしたちは別の州へと移り住みました。新しい土地での最初の数週間は、孤独で陰うつな気分でした。

ある日、前のワードの扶助協会会長から手紙が届きました。その手紙の中で、彼女も幾つかのワードで転入者となった経験があり、新しいワードになじむのがいつも困難だった、と書いてありました。そして次のようなアイデアを分かち合ってくれました。

1. 隣に座った人が自己紹介してくるのを待っていないで、自分の方から自己紹介しましょう。

2. ワードの会員たちに、この地に来たことをうれしく思っていて、彼らともっと知り合いたいと心から願っていることを伝えましょう。前向きな態度は、人々をあなたに引きつけます。

3. あなたを必要としている人を探してください。

4. 扶助協会や神権定員会の指導者に頼んで、訪問教師やホームティーチングの割り当てをもらいましょう。

5. 扶助協会や神権定員会の指導者に、自分と同じ関心事を持っているワードの会員の名前を教えてください。そして彼らに自分から自己紹介するのです。

6. 人生の中で小休止とも言えるこの時期を利用して、今まで忙しくてできなかったことをやるようにしてみましょう。

7. 自分が神の子であり、人にしてあげられることが多くあるのを忘れないでください。

この提案に従うことで、わたしはすぐに新しいワードに溶け込めました。早く新しいワードになじめるよう助けてくれた友人の思いやりに、わたしはこれからもずっと感謝することでしょう。□





正直に事を行う

生活の中で行いを導く正義の原則は、
実社会でも適用されるべきです。

アラン・V・ファンク

1971年6月初旬、わたしはカリフォルニア州での軍務を終わろうとしていました。ちょうどそのころ、妻のジュディは最初の子供を出産したばかりで、隣の州に住む妻の両親の実家に帰っていました。義理の両親の集うワードに妻とわたしの家族を集め、長男に命名と祝福の儀式を行うことをわたしは心待ちにしていました。わたしの両親はカリフォルニアから車で、わたしは飛行機でそれぞれ土曜日に現地に向かうことにしていました。わたしはその前日の金曜日に退役することになっていました。こうして、日曜日の断食証会あかしかいに全員が出席できるようすべての手はずが整っていました。

ところが、予定されていた解任日の前日か2日前のこと、必要な事務処理

相手から財政的な申し出をされたり、こちらからしたりしようという誘惑に駆られるのは、「虹の端には金のつぼ」の物語（虹の端の方には金のつぼがあるというアイルランドの伝説。どこまで行っても虹に端はない）とほとんど同じです。わき見をすることなくいつも正直であることによって、両手いっぱいあかしの悲しみを免れることができます。

が期日までに終わりそうにないので、翌週の初めごろまで基地に残るようにとの知らせを受けたのです。その悪い知らせを聞いて、予定どおり子供の命名と祝福の儀式を実行するにはどうしたらよいだろうかと考えました。退役手続きの担当官に事情を説明しましたが、理解してはもらえませんでした。

期日どおり儀式を決行しようと思っていた折りも折り、わたしは何週間か前に聞いたある話をふと思い出しました。それは、わいろと交換に退役の時期を早めてくれる人物がいるという話でした。わたしはその人物と連絡を取りたいという誘惑に駆られました。しかし、早くこの基地に別れを告げ、神権の祝福を授けたいからといって、わいろを差し出すというのはわたしの良心が許しませんでした。わたしは家族の皆に祝福を延期するという連絡をしました。

3週間後、わたしのもとに軍の調査官から電話がかかってきました。わたしがわいろ事件の証人および被告として召喚される可能性があるという内容でした。面談の中で、調査官からこのわいろ事件にかかわったとして嫌疑がかけられている軍人の写真を見せられました。以前に、退役の遅れについて知らせてきたあの下士官の写真もその

中にありました。

あのとき正しい選択をしていてほんとうによかったと思います。もし逆のことをしていたら、わたしの仕事上の夢は実現しなかったことでしょう。またふさわしい状態で息子を祝福するのも危うくなっていたことでしょう。わたしはこのとき、正義の原則に忠実に従うことによってのみ、「神の前において〔わたしたちの〕自信は増」すということを悟りました。また、これまでに幾度となく同じ真理を思い起こさせられました（教義と聖約121：45）。

毎年1回、わたしは神殿に参入するためのふさわしさについて監督に報告します。この報告をする際、私生活であれ実社会であれ、自分がほかの人どのように接してきたかよく考えます。業務上の不正を調査する会計事務所あかしの経営者として、わたし自身同様に自分の仕事を霊的見地から常に監督し、評価しなければなりません。また、どれだけ不正や疑いをかけられるようなことを避けているかだけでなく、どれだけそのような行いの原因となるようなことを避けているかという観点から自分を評価しなければなりません。

わたしは道義にもとる不正行為が発生するためには概して、動機、状況的機會、高潔さの欠如という3つの要素

を満たさなければならないということ
を発見しました。この3つの要素のう
ち一つか二つの要素がそろったとし
ても、道義にもとる不正行為は普通発生
しません。

このような観察をする中で思い出す
のは、ボーイスカウト時代に学んだ火
を起こす方法です。火を起こすには、
燃料、酸素、そして熱が必要です。こ
の3つの要素のうち一つでもなくな
ると、火は消えてしまいます。同様に、
非倫理的な行為を避けたいならば、そ
のような行為を生み出す要素の一つも
しくはそれ以上を自分の生活から消し
去ることで。

動機

裕福であっても、貧しくても、また
その中間ぐらいであっても、わたした
ちは目先の満足、結果的に過度の浪費
を促す環境の中で生活しています。世
の中にはぜいたくを必要と見なす風潮
があり、それが原因で財政難に陥り、
より大切な事柄が見えなくなる人が大
勢います。このような環境にあって、
わたしたちの動機はとともたやすく悪
化してしまいます。非倫理的行為に先
行する動機は、多くの場合、借金、
貪欲どんよく、かけ事、薬物中毒やアルコール
依存症などと関係があります。

企業に働く人にとっていちばん大き
な危険の一つ、それは職場の中に非倫
理的行為をよしとする外圧があるとい
うことです。特に、個人的な利益が絡
んでいる場合はそうです。一見小さな
ごまかしや非倫理的行為と思われるこ
とであれば簡単に合理化してしまう人
が多いのです。彼らは次のように自分
に言い聞かせます。「ここで行われて
いる職場慣行については自分には責任
がない。」「自分はただ上司に依頼され
たことをやっているだけだ。」「会計上
ほんの少しの額なので、この機会に乗
じ、もう少し経済的余裕ができたところ
で返済しよう。」

今月の給与から前月の支払いを済ま
せるような人の場合、非倫理的行為に
走る動機は高くなり、正しいことを行
おうという高潔さがあるかどうかを試
されます。

状況的機會

人は簡単な方法でお金を稼げるよう
な状況に置かれると誘惑に負けること
があります。そのような機会が道徳的
判断力を曇らせるのです。実例を挙げ
ると、何千人という投資家たちから、
ある特定の会社が財政上安定している
かどうか意見を求められるような、社
会的に信頼される仕事に就いている人

福音を通して、日曜日だけでなく、平
日仕事をするときにどのような人物に
なればよいのか学ぶことができます。
真実の原則は、日常の出来事と切っ
も切れない関係にあるのです。

がいました。もし、その人が問題の会
社の財政難について真実を語れば、そ
の会社を自分の顧客のリストからなく
すことになるわけです。この男性は6
年間にわたってうそをつき、沈黙の代
償にその顧客からいろいろをもらい続
けました。最終的には、真実が暴露され、
問題の会社は倒産し、投資家たちは何
億というお金を失い、不正を行った当
の男性は刑務所に入ったのです。

非倫理的行為を行う機会はどこに
も転がっています。不正直な人々を避
けて仕事をするのは至難の技なので
す。しかし、だからこそいつでも正直
で信頼できそうな人と働くよう努めな
ければなりません。さらには、置かれ
た状況に妥協するのを避け、正直に働
くことで、同僚たちに良い影響を及ぼ
すことができます。たとえ事実や誤り
が暴露され、その結果として危害や恥
を被ることになっても、進んで正しい
ことを行い、結果を受け入れなければ
なりません。そうすることによって、



誠意や信頼が生まれるのです。

高潔さの欠如

高潔さの欠如は、ほとんどの場合正当化という形で現れます。疑問の残る商業行為を正当化するために最も頻繁に用いられるのは、「仕事だから」と

という言葉です。言い換えると、疑いの残る商業行為というものは、世の常識となっていたり、だれかに危害を加えることのない違反と見なされるかぎり、問題視しないということです（2ニーファイ28：8；教義と聖約10：25-26参照）。

スペンサー・W・キンボール大管長

は、高潔さを「完全であり……どこまでも純粹かつ道徳的な性質」と定義づけ、さらに続けてこう語っています。「実質的に、不正直な行為というものはすべて、内面的なわい曲いゆる正当化にその端を発し、大きくなっていくものです。正当化というのは、最も古く、最も悪質で、最も油断のならない、また最も破壊的な種類の欺瞞、すなわち自己欺瞞なのです。」（メキシコ・中央アメリカ地域大会、大会報告-1972年度、27）

福音は1週間に7日間、つまり毎日、わたしたちがどんなタイプの人間になればよいのかを教えてください。「わたしたちは、正直、真実、純潔、慈善、徳高くあるべきこと、またすべての人に善を行うべきことを信じる。」（信仰簡条1：13）

最善を追い求める

わたしたちが自分の知恵と経験によっていつも即座的に確な決定を下せるという日は決して来ないのではないかと思います。わたしたちは皆過ちを犯します。時として十分な事実を把握していないためにこのような過ちを犯すことがあります。悪い判断を下したために犯す過ちもあります。わたしたちは過ちを犯したときには、進んでそれ

を認め、そこから何かを学ぶ必要があります。

間違いを犯したことに気づいたら、すぐにその間違いを正しましょう。わたしたちの行いが真昼の光に照らされるようにする必要があります。使徒パウロは次のように語っています。

「夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。そして、宴楽と泥酔、淫乱と好色、争いとねたみを捨てて、

昼歩くように、つつましく（訳注—英文では“honestly”）歩こうではないか。」（ローマ13：12-13）

教会の会員として、わたしたちは人生のあらゆる分野において最善を追い求めるように、特に最も優先すべきは天父との関係、そして家族との関係であると教えられてきました。わたしたちが自分の職場で、また地域社会で最善を追い求めていくことも、最も大切な責任の一つです。

残念ながら、仕事上での最善が、利益や総資産、依頼人や顧客の数、株価など金銭的な観点で計られることが多いのですが、このような基準でほんとうの意味での最善を計ることはできません。最善には、人間性という観点からしか計ることのできない霊的な面があるのです。

わたしは一人のお婆の誠意に満ちた努力を思い出します。その行いはメディアでほめたたえられることも、何らかの形で表彰されることもありませんでした。お婆の家の近くに夫を亡くした内向的な性格の女性が住んでいました。特異な行動に走ることがよくあり、近所の子供たちの物笑いの種になっていました。わたしのお婆は、この女性に友人も家族もないのを知って、頻りに足を運んで、食べ物を届け、話し相手になり、慰めを与えました。この女性が亡くなったとき、彼女の葬式に出席したのは、わたしの母、おじ、お婆の3人だけでした。

これはほんの一例ですが、わたしのお婆は個人的かつ誠意を感じさせる方法で最善を尽くしました。このお婆にとって、「人々の抱える問題が〔自分の取り組むべき〕業だったのです。」（チャールズ・ディケンズ作品集『クリスマス・キャロル』543）

正直を堅持する

『モルモン書』の中に、ある民に関する記録が記されています。その民は一人の例外もなく「……神と人々に貢献する熱心さでも秀で……すべてのことについてまったく正直でまっすぐで

あり、また最後まで確固としてキリストを信じた」（アルマ27：27、下線付加）とあります。

主はその民に今日でもまったく同じことを求めておられます。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、次のように語りました。「どこにあっても、自らに授けられた主の御名と召し、自らの理解する福音に忠実であろうとする末日聖徒ならば、仕事であれ宗教であれ、真理、名誉、徳、純潔、正直を堅持するはずである。」（Conference Report『大会報告』1968年10月号、122）

仕事で成功するために妥協という犠牲を強いる必要はありません。正しくない動機、状況的機會、非倫理的行為を退けることに力を注ぎ、福音の原則に忠実であろうと努めるなら、人々と接するときに正直であろうとするわたしたちの決意を貫けるよう、御霊が助けてくれるでしょう。

イエス・キリストの福音を通じて教会員にもたらされる最大の祝福の一つは、福音の原則に心から従う教会員は霊的に強められ、不正直の誘惑に対抗できるということです。キリストの岩の上に堅く立つならば（1ニエファイ15：24；ヒラマン5：12参照）、その人の心と生活の中に不正直の入り込む余地はまったくなくなるのです。□

フレッシュナーからの開放

テレサ・ハンセーカー



わたしの頭は疲れ切っていました。歴史の教科書の1ページを3度も読んだのに、一つの言葉も頭に残っていませんでした。疲れた目をこすって、その本を閉じたときは、真夜中をとうに過ぎていました。学期末テストで良い点を取らなかったのに、勉強するにも限界が来ていました。頭が痛くて、もう何一つ受け付けなかったのです。

わたしは歴史の教科書を置いて、ごく自然な習慣から別の歴史書、『モルモン書』を取り出しました。その表紙を見ると心が和みました。こうして、アルマ書を開いて毎晩の読書を始めました。わたしはこんな疲れ切った状態で、何も頭に入るとは思っていませんでした。でも、とても驚いたことに、さっきまでずきずきしていた頭痛は消え、代わりに温かくて、心地よい平安がわたしの体を包んだのです。

心が和らぎ、頭はさえてきました。一つ一つの

言葉がはっきりと、容易に理解できました。それはまるで、心優しい天父が、直接わたしに話しかけていらっしゃるかのようでした。

わたしはこれまで何度も、聖典の言葉が理解できないと感ずることがありました。しかし、聖典を読んだ日は、自分の態度に違いがあることに、このとき気づきました。不思議なことに、聖典を読むと、わたしは幸せな気持ちになり、家族がもっとすてきに感じられ、もっと忍耐強く、そして満ち足りた気分になるのです。聖典を読んでいるとき、しばしば御霊がわたしの心に語りかけ、指示と導きを与えてくれます。わたしたちが聖典を読むときにもたらされる霊的な経験は、そのページに書かれている御言葉と同じように大切です。わたしは『モルモン書』の一つ一つの言葉が、わたしたちの時代にとって大切であることを知っています。□



下, 上から—サンパウロ宣教師訓練センターで訓練中の姉妹宣教師; ブラジル, レシフェ・ボーアピアジンステーク祝福師のウィルソン・サンチェズ・ニトー, ステーク家族の歴史センターにて。右ページ, 左—ブラジル, サンパウロ・タボーウンステーク, フェラールワードのエドワード・ノウム監督。右ページ, 右—サルバドルおよびサルバドル北ステークの祝福師エブラジオ・カバルカンティと奥さんのディルザ。下—リオディジャネイロ



PHOTOGRAPHY BY DON L. SEARLE AND DAVID MITCHELL; MAP OF BRAZIL BY PAT GERBER



ブラジルのあいさつ「トウド・ベン」

ブラジル人がよく使うこの言葉は「人々にあらゆる祝福を」という
願いを込めて使うあいさつです。
ブラジルの末日聖徒が福音に添って生活し福音を分かち合うことによって、
この言葉は文字どおり実現されようとしています。

ドン・L・シール, デビッド・ミッチェル

質 問—南アメリカで最も多くの人々に使われている言語は何語でしょうか。

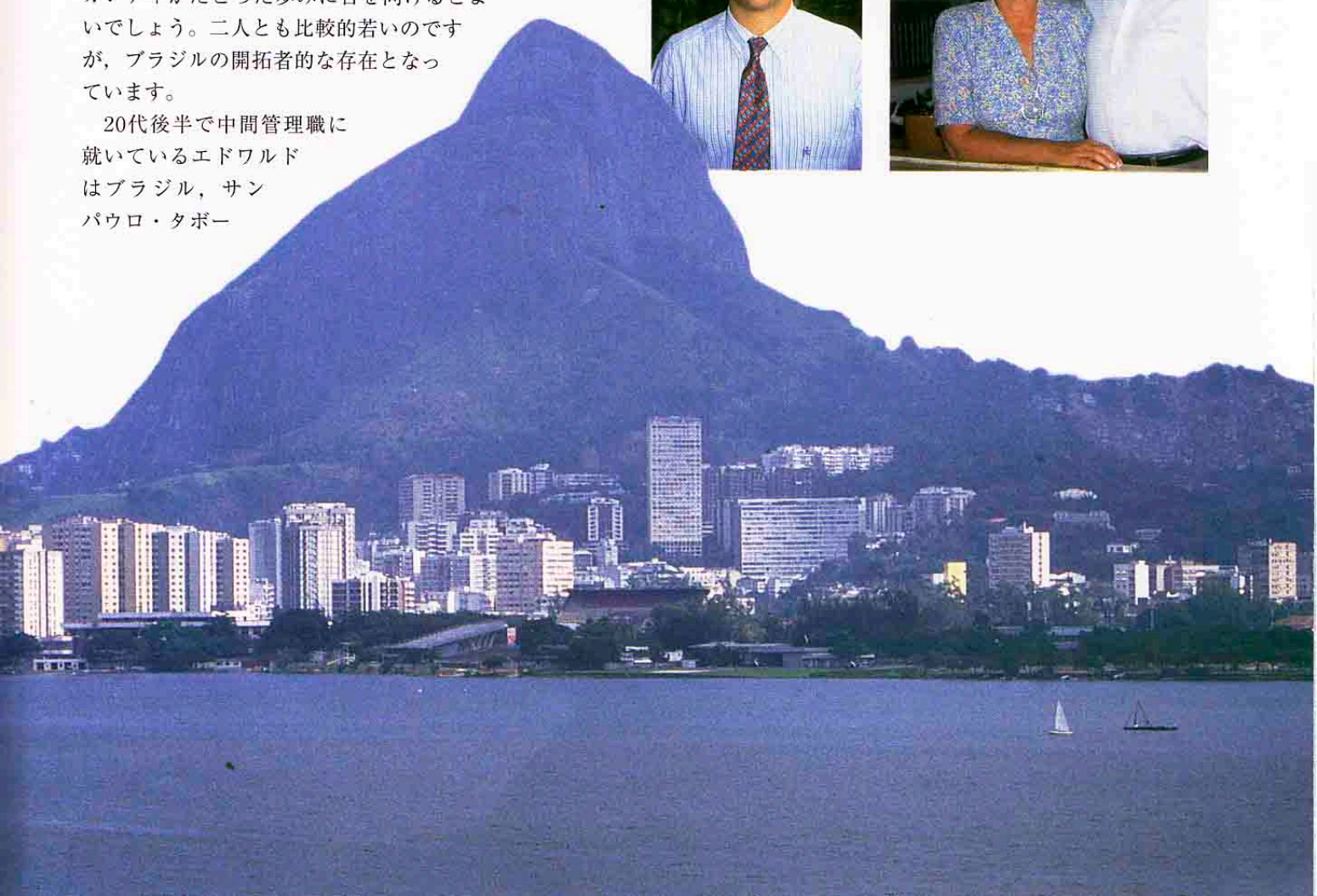
答え—ブラジルで使われているポルトガル語です。南アメリカの巨人と呼ばれているブラジルには、この大陸のほかのすべての国の人口を合計したよりも多くの人が住んでいます。

50万人以上の末日聖徒が住んでいるブラジルはアメリカ合衆国とメキシコ（メキシコには約75万人の末日聖徒が住んでいます）に次いで世界で3番目に末日聖徒が多い国です。

ブラジルにおいて福音がどのように広がっているかを理解するにはエドワード・ノウムとエビラジオ・カバルカンティがたどった歩みに目を向けるとよいでしょう。二人とも比較的若いのですが、ブラジルの開拓者的な存在となっています。

20代後半で中間管理職に就いているエドワードはブラジル、サンパウロ・タボア

ウンステーク、フェラールワードの監督を務めています。1991年に改宗した彼が監督に召されたのはこれで2度目です。末日聖徒でない親戚からは、エドワードが教会の召しで時間を使っているが、なぜ金銭的な報酬を受けていないのかと不思議がられています。「わたしは主のために働いています。教会で働くことによって、イエスが確かに生きておられることを知りました。イエスはわ



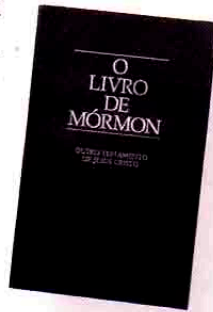
た私たち一人一人のためにそこにおられます」とノウム監督は話しています。この確信を得ることだけでも、それはいかなる犠牲にも勝るかけがえのない宝なのです。

ブラジルの美しい海岸線をサンパウロから北へ約1,600キロ行くと、そこには16世紀から17世紀にかけて数千人のアフリカ人奴隷が入国した港、サルバドル市があります。ここにブラジルの開拓者エビラジオ・カバルカンティが住んでいます。彼は同市のサルバドルステーキとサルバドル北ステーキで祝福師として働いています。カバルカンティ兄弟が専任宣教師と初めて出会ったのは、1971年、サルバドルの北約500キロにあるマサオー市に住んでいたときでした。カバルカンティ姉妹が最初にバプテスマを受け、その後にカバルカンティ兄弟とバプテスマの年齢に達していた子供たちがバプテスマを受けました。カバルカンティ家族はバプテスマを受けてから1年たたないうちにサルバドルへ引っ越しました。

「当時、ここには教会の組織がまったくありませんでした」とカバルカンティ兄弟が話してくれます。「わたしたちが教会そのものでした。ようやく支部が組織されたのは1978年になってからで、わたしは初代の支部長に召されました。」

それまでの間、カバルカンティ家族は福音について理解している範囲で、最善を尽くして忠実な生活を送りました。「わたしたちは教会についてあらゆることを知っていたわけではありませんでしたが、自分たちが教会員であるのを否定したことはありませんでした。いつも人々に自分たちがモルモンであると話していました。

そうしている間も、もしかしたら宣教師が来てい



るのではないかと期待しながら、わたしたちは白のワイシャツを着た青年を毎日のように捜しました。教会員がサルバドルを訪れることがあると、一緒に集会を開きましたが、それもめったにあることではありません。子供たちに福音を教えるのに正式なテキストはありませんでしたが、正しい生活を送ることによって模範を示そうといつも努力していました。」

カバルカンティ家の4人の子供たちは最終的に全員が神殿のエンダウメントを受けて、専任宣教師に召されました。現在も全員が活発な教会員です。

未来を築く

ブラジルで専任宣教師による伝道活動が行われたのは、ドイツ語を話す移民を相手に福音を宣べ伝えたのが最初で、1928年にさかのぼります。それから10年後にポルトガル語の『モルモン書』が出版されました。けれども第二次世界大戦によって伝道活動は中断されました。しかし、1966年に最初のステーキが組織された後の成長は目覚ましく、現在では150のステーキに60万人を超える教会員がいます。

教会にとって今後の最大の課題は恐らく、この急激な成長にどのように対応し、管理するかということでしょう。ブラジルでは一つの集会所を4つか5つのワードで使用している所があります。宣教師たちはブラジル全体で、平均して一月に一つのステーキを組織できるほどの人々にバプテスマを施しています。

過去2年間の改宗者のバプテスマのうち約25パーセントは男性でした。ブラジル地域会長会は、彼らが適切な支援を受け、経験を積んでいけば、家庭において力強い指導者となり、さらに将来は神権指導者になれると考えています。「バプテスマに導くための努力、霊性を培うための努力、改宗者を定着させるための努力、これらをバランスよく行うことが大切です」と以前にブラジル地域会長を務めた七十人のグラス・N・アーチボルド長老は語っています。

宣教師たちの話によると、男性は霊的な意義を持つ事柄について直接的に話しても女性ほどの反応を見せません。けれども、子供を持つ男性は、家族にとって役立つような話題については興味を示します。宣教師たちは「P A I S - F」という言葉を頭に置きながら、福音がどのようなものを家族に提供できるかを教えています。これは以下の単語の頭文字を

組み合わせて作った言葉です。最初は教会の目的（“Prposito”プロポジット）です。すなわち、地上の家族を強め、彼らに救いの儀式を施すことです。次は福音を通じて真の友達（“Amigos”アミーゴス）を得ることです。そして、愛と思いやりのある交わり（“Integração”インタグラソウン）を築き、知恵の言葉によって肉体の健康（“Saúde”サオウジェ）を得、そして最後に、永遠に結ばれる家族（“Família”ファミルユ）です。ポルトガル語で

左ページ、上——1939年に初版が発行されたポルトガル語の「モルモン書」。左ページ、下——リオデジャネイロを見下ろす高さ約37メートルのキリスト像。37ページ——マリオ・ルイス・デ・ソーズ・ダ・シルバと奥さんのレジャニ、娘マリアニと息子ティアゴ。

「pais」とは父親たちという意味です。

アーチボルド長老は新しい改宗者を定着させるために現在実施されている方法をブラジルにおけるビルの建築方法にたとえて説明しています。ビルを建てるにはコンクリートを流し込んでまず1階の部分の床を作り、その後順に上の階を重ねていきます。コンクリートを流し込んでから少なくとも21日後には、その階の部分が固まって、上の階を支えるだけの強度を持つことができます。

「新会員が教会での強度を身に付けるにはどれほどの期間が必要でしょうか」とアーチボルド長老は質問を投げかけています。ブラジルでは、神権指導者と補助組織指導者は少なくとも1年間、新会員の家族が神殿に入って結び固めを受けるまで、彼らに対し



てできる限りの支援をするように求められています。

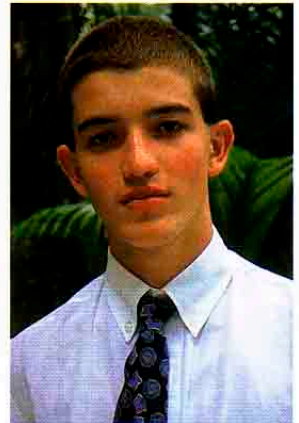
実践されている福音

ブラジルはポルトガルの影響を強く受けていますが、ヨーロッパをはじめとする世界各国の影響も強く残っています。アマゾン地域にはインディオの先住民、南部諸州にはヨーロッパとアジア民族の子孫、中央臨海地域にはアフリカ民族が中心に住んでいます。

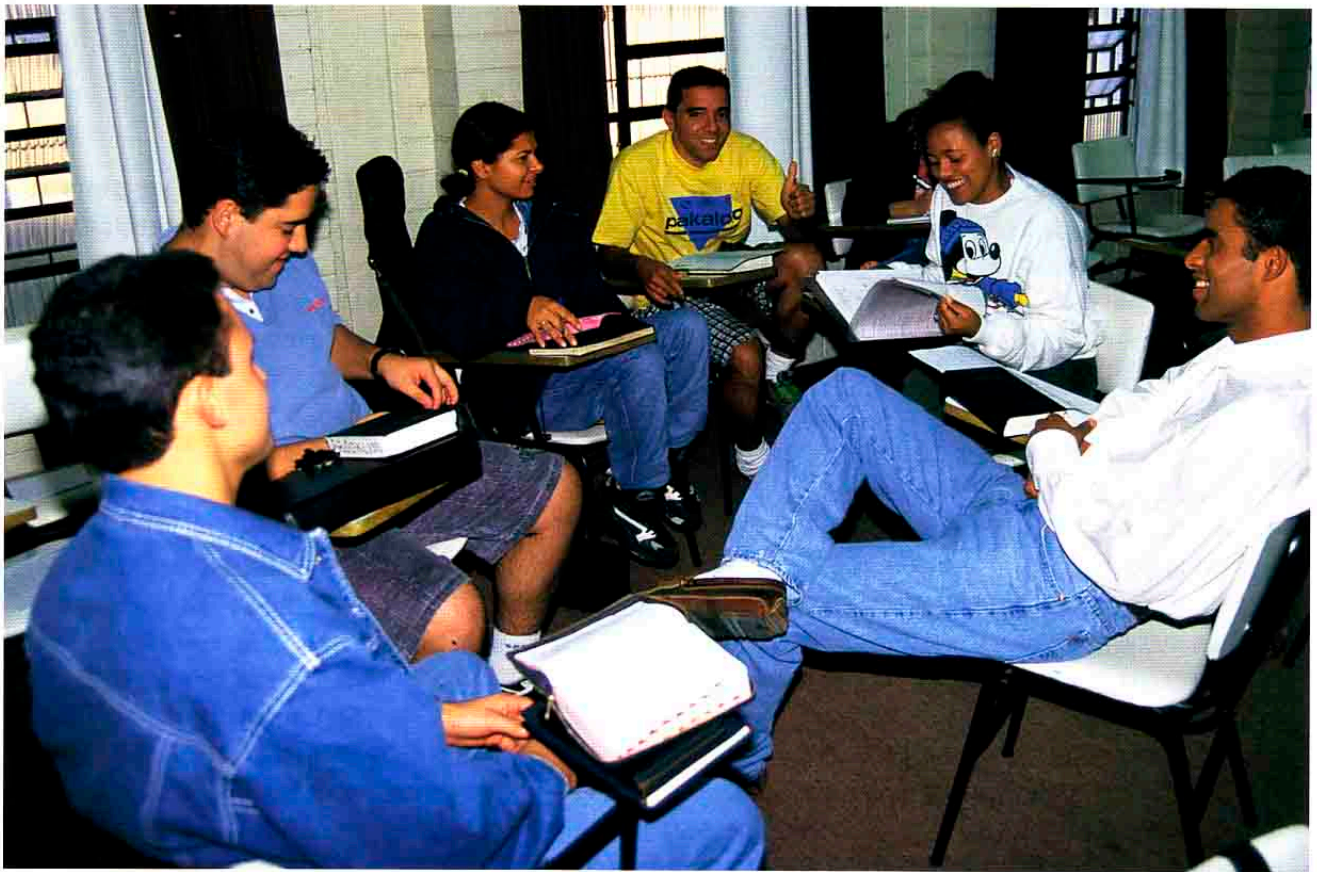
ブラジルには日本人の子孫が大勢住んでいますが、ブラジル、クリチーバ・タルマステークのビラペルナ支部に所属するオタビオ・およびセツコ・ナガタもその一人です。彼らは日系二世のブラジル人です。この国に住む外国系民族は多くが現在では2代目か3代目になります。ナガタ夫妻は自分たちがブラジル人であると考えているのでしょうか。それとも日本人であると考えているのでしょうか。

「第1にわたしたちは末日聖徒です」とナガタ兄弟は言います。その次にブラジル人です。けれどもナガタ兄弟は福音、日本人を先祖に持つこと、そしてブラジル文化の3つが混じり合った受け継ぎを持っており、それらが祝福となっていると付け加えています。

ナガタ兄弟姉妹はともにブラジルで伝道しました。ナガタ兄弟は結婚生活21年間のうち16年を監督として、あるいは監督会、支部長会で働いてきました。ナガタ姉



左、上から——セミナーの活動に参加する青少年；ブラジル北東部で開かれた若い女性のキャンプ；レシフェに住むキャンプディレクターのマルシア・リンヤリス。上、左から——ルーシーリ・ゴンサルビス・フェレイラ；リオデジャネイロ植物園を訪れる若者。



サンパウロ市のブルックリン・インスティテュート『旧約聖書』のクラスに出席する生徒。

妹は、すでに亡くなった父親と祖父との霊的な経験から、先祖のために神殿の儀式を行うことの大切さを実感しています。自分たち夫婦の生活と、4人の子供たちスペンサー、ハイラム、カミリア、パトリシアの生活の中で福音の持つ影響力を強めることにより、堅固な土台を築けると彼らは話しています。

ブラジルの会員たちは、福音の標準を生活の中にもっと取り入れていく必要があると感じています。彼らは日曜日の礼拝、毎日の福音の勉強、セミナーとインスティテュートのクラス、補助組織が提供する力強いプログラムなど、教会が提供するあらゆるものから霊的な力を得ています。

レシフェに住むマルシア・リンヤリスはブラジルの北東地区若い女性キャンププログラムのディレクターとして働いています。彼女は、キャンププログラムについてこう言っています。「少女たちに祝福をもたらしています。わたしはこのプログラムが大好きです。」

「キャンプの間、若い女性は様々なワードからの種々雑多な人々の寄せ集めではありません」とリンヤリス姉妹は強調します。「彼女たちは一つになっています。」若

い女性はキャンプの目標を達成するだけでなく、ほかの末日聖徒の少女たちとの間で友情のきずなを築きます。彼女たちはカーニバルの間、都会を脱出します。このカーニバルで人々は、1週間にわたって、慎みのないふしだらな服装で街をパレードします。昨年は1万2,000人の若い女性と1万4,000人の若い男性がカーニバルのこの世界的な影響の及ばない郊外で開かれたキャンプに参加しました。教会の開拓者時代をしのぶ今年、ブラジルのキャンププログラムのテーマは「信仰こめて、一歩ずつ」です。

ブラジル、リオデジャネイロ・アンダライステークのテズーカワードに所属する18歳のフェルナンダ・ペライラ・サントスは信仰によって歩もうとしている若いブラジル女性です。

フェルナンダはパーティーに誘われたときに、その内容が福音の原則に添わないために丁寧に断ると、学校の友達から皮肉っぽく「ええ、あなたのご立派な聖徒ですものね」と言われることが時々あります。最近、フェルナンダはパーティーに誘われました。自分では参加しても問題のないパーティーだと考えました。けれども母親の忠告や日曜学校のレッスンで学んだことを思い出して、あえて危険を冒すことはないと考え、出席を見合わせることにしました。そのレッスンではモーサヤ書第2章41節について勉強しました。この聖句は彼女の祝福師

の祝福の中でも引用されています。「神の戒めを守る者の祝福された幸福な状態についても考えてほしい。……もし最後まで忠実であり続けるならば、彼らは天に迎えられる……る。」

早朝セミナーのクラスで友達を作っていれば、福音に従って生活し、健全な活動に参加するのは、それほど難しいことではなくなるとフェルナンダは言います。以前は、学校の中で末日聖徒は彼女しかいませんでしたが、現在は二人になりました。フェルナンダからセミナーに誘われて福音を勉強し、最近バプテスマを受けた若い女性が一人増えたのです。

末日聖徒の若人はセミナーを通して聖文を研究し、祈り、福音の原則に従って生活するための励ましを受けています。彼らはセミナーによってこの世の影響力から守られているのです。

「末日聖徒ではない人で、たばこを吸ったり、お酒を飲んだりしている学生を知っています」とサルバドルのセミナー生徒であるアナ・クラスティナ・サンパイヨーは言います。「わたしはそのような場所には絶対に近づかないことにしています。天父はわたしの祈りにこたえてくださり、わたしが正しい生活ができるように助けてくださると知っています。」

サルバドルで教会教育部の指導主事を務めるサンドロ

ー・カテルは、現在、地区内に通常のセミナーのクラスと家庭学習プログラムに登録している生徒は約400人になると話しています。インスティテュートのクラスには約500人の学生が登録しています。

これらの生徒の中に、ジョナス・ムーライズとライムーンダ・ムーライズの子供たちがいます。ジュースアルダ、ジョーレニルダ、ジョーイシラディ、ジョーナタン、ジーニの5人です。「わたしたち家族の7人は週の7日間、家庭の夕べを開く責任を順番に受け持って、毎日家庭の夕べを開いています」とムーライズ兄弟は話しています。

ムーライズ兄弟は2階建ての自宅前に、1階建ての自動車修理工場を開いています。歩道から少し下がった所にある住まいには家族のペットである3匹の小猿も一緒に住んでいます。この猿は手のひらほどの小さな猿です。

サルバドル北ステークのソウン・カイトノー支部で熱心に教会に集うムーライズ家族は神殿を訪問するために貯金をしています。「年長の子供たちは自分で稼いだお金を貯金に回しています」とムーライズ兄弟は説明してくれました。「どうしたらお金をためられるかを家族全員でいろいろと考えています。」家から5キロ離れた教会までバスを使わずに歩いて行くのもその一つの方法です。



左上—ジョナス・ムーライズと奥さんのライムーンダ、娘のジュースアルダ、ジョーレニルダ、ジョーイシラディ、ジーニと息子のジョーナタン、ムーライズ兄弟(左)は自動車の車体修理を職業としている。右上—サンドロ・カテルと奥さんのルーシアと子供たちアンドレイ、ライアンドロ、ダニエラ。右—フェルナンダ・ペライラ・サントス

人々に手を差し伸べる

ブラジルの末日聖徒は福音を分かち合うために隣人に対して積極的な働きかけを行っています。多くの人々が真理に飢え渴いているようです。近所の人々が末日聖徒の家族に声をかけて、次のように言った、という話もこの国ではそんなに珍しいことではありません。「あなたがたが教会に入ってから生活がすっかり変わったのを見ってきました。あなたがたはわたしたちが必要としているものを持っているんです。教会について教えてください。」

ブラジル、サンパウロステークでは、1966年にステークが組織されてから30周年を迎える記念行事として、人々に教会を紹介するために宣教師によるオープンハウスを計画しました。教会が家族にどのようなものをもたらしているかを紹介しました。訪れた人々は扶助協会、若い女性と若い男性、初等協会のレッスンを体験することができました。例えば初等協会の部に参加した子供たちは「神の子です」を歌えるようになり、また絵を描いてそれぞれ家に持って帰りました。

ステーク伝道部長のノーベルト・カルロス・ロパズは活動的な人です。オープンハウスのときは足をけがしたために松葉杖つえを使って歩いていました。けれども彼はこのイベントの間、忙しさのために文字どおり飛び上がってあちらこちらと移動していました。このオープンハウスでは約616人の人々に教会について紹介しました。それから数週間にわたって宣教師は平均して1日に一人の割合でバプテスマを施しました。多くの会員が人々を招待し、またイベントの手伝いをしました。これらの働きは、常に福音を分かち合おうとしているブラジルの聖徒たちの気持ちの表れであるとロパズ兄弟は述べています。「人々に対する働きかけをやめるわけにはいきません。人々の心がいつ開かれるかはだれにも分からないからです」とロパズ兄弟は語っています。

サンパウロに代表されるブラジルの主要都市は世界各地の大都市と同様に、事務所ビル、スーパーマーケット、近代的なショッピングモール、高層アパートであふれています。もちろん、「ファビラス」と呼ばれる小屋のような家々が建ち並ぶ地域もあります。

マリア・ライオバルディナ・ドウ・エスピトー・サントは「ファビラ地区」の片隅こんぼうに梱包用の木枠と建築現場で余った資材を使って建てられた小さな家に独りで暮らしています。数年前に、マリアは同じ「ファビラ」に住むリンディ・ナウが日曜日になるとマリアの家の前を

通ってどこかへ行くことに気づいていました。リンディにどこへ行くのかを尋ねると、一緒に教会へ行こうと誘われました。そして宣教師がマリアを訪問するようになり、マリアはそれから2週間もしないうちにバプテスマを受けました。

その後のマリアは教会員や宣教師の洗濯をして生計を立てていました。けれどもパーキンソン病にかかったため、現在では「政府から支給されるわずかばかりの生活援助と友達に助けられて」生活しています。彼女はジャーディン・ダス・パルマスワードへ行くのに、自力で行けないこともあります。「けれども扶助協会の姉妹たちが自動車に乗せてくださるんです。わたしは賛美歌が好きです。祈りも、毎日の生活に欠かせないものとなっています。」

世界で最も多くのローマ・カトリック教会の信者を誇る国ブラジルに生まれたマリアですが、彼女は以前の教会に活発に集ったことはありませんでした。「けれども、わたしは末日聖徒イエス・キリスト教会に対して強い証あかしを持っています。これからも体が許すかぎり、集会に出席するつもりです。」

消防士のオザイル・リバイローはブラジル、クリティエーバ・バカシェリステーク、グアラタイパワードの監督です。1990年に彼と奥さんを含む数名の人々が教会に加わると、ステーク会長会はクリティエーバ市に末日聖徒のグループを組織しました。その後このグループは成長してワードとなり、分割され、さらに集会所に入り切れないほど大きくなりました。1996年の毎週日曜日の平均バプテスマ数は5人から8人に達しました。「ワードの全員が伝道活動に参加しています」と監督は述べています。ワードでは1週間おきに「収穫の日」が計画されています。会員たちはこの日に、宣教師を紹介する人たちの名前を用意して教会に集うのです。

このような収穫はブラジル全土で見ることができます。それは遠くアマゾンにまで及んでいます。地図を見ると、アマゾン川は南アメリカ大陸の西端にそびえるアンデス山脈から大陸の東端の大西洋まで6,400キロを流れており、大陸を南北に二分しているように見えます。この大河の河口は145キロもあり、また水深も十分にあって、海洋を航行する船舶が約1,000キロ上流までさかのぼることができます。

アマゾン川によって生計を立てている人々は大勢います。アマゾンの小さな町イタコアチャラのイタボラガ支部に所属するオノーラトール・ブルーセ・ローリン兄弟も



左からアマゾンの漁師オノラト・ブルーセ・ローリンと奥さんのニルザを訪れたエレイサンズラとリディアニ・オザギ・パティスタと息子のオノラト、エイオーシニ、ヒリオウ。

そうした一人です。漁師を職業とするローリン兄弟は、宣教師を自宅に招き、やがてバプテスマのチャレンジを受け入れることによって、自分自身が福音という網に囲み入れられました。ほかの教会の会員であった奥さんのニルザは教会に入ることを恐れていました。

「友達が末日聖徒イエス・キリスト教会に入ることに反対して警告したのです。夫は教会に入れば地獄へ行くことになる。そしてわたしが夫に従えば、同じ目に遭うと言われたのです。」

しかしローリン兄弟は教会が真実であることについて強い証あかしを持っていました。ニルザと年長の息子たちにもバプテスマを受けてもらいたいと願っていました。そこで彼は一計を案じました。イタコアチャラは自動車はまだ普及していない町です。日常生活では馬車が一般的であり、バスは町の周囲を運行しているだけです。自転車に乗るにしてもここは未舗装道路をこがなければなりません。ほとんどの人は歩いて移動しています。ローリン家から教会までは3.2キロの道のりでした。

「初めて教会へ行くのに歩いていかなければならないとしたら、妻は絶対に教会へ行こうとしないのがわたしには分かっていました」とローリン兄弟は説明しています。「けれども、わたしは妻が一度でも教会へ行けば御たま霊を感じると考えていました。そこで初めて教会を訪れるときにはタクシーを雇おうと考えました。」タクシー料金をためるには3か月以上かかりました。

ニルザは伴侶はんりよの思いやりに感動しました。「教会に着いたとき、故郷に帰ったような気がしました」とニルザは当時を思い出して話してくれました。「会員の皆さんと会って心が安らぎました。わたしは自分の教会でそれまで学んできたことよりもはるかに多くのことをその1日で学びました。」間もなくニルザは二人の息子、14歳のヒリオウと8歳のエイオーシニとともにバプテスマを受けました。そして三男のオノラトも8歳になってからバプテスマを受けました。

ローリン兄弟姉妹はほかのブラジル人聖徒と同じように、喜んで人々と福音の証を分かち合っています。彼らは友人を家に招いて宣教師に引き合わせています。彼らのフェロシップによってこれまでに少なくとも35人がバプテスマを受けています。

「ブラジルの聖徒はローリン兄弟姉妹のような人々が多いのです」と話すのはイタコアチャラで伝道した帰還

宣教師のマシュー・コネリー長老です。「彼らは熱心に福音を分かち合っています。一つの例を挙げますと、ある会員の家族が教会員でない友達を紹介するためにわたしと同僚を家に招いてくれました。わたしたちは2人か3人くらいが来るのかと思っていました。けれどもその家族はわたしたちのために20人以上の友達を招いてくれたのです。」

ブラジルでは人口に比例して宣教師の数が非常に少ないため、地元の会員たちの助けがどうしても必要です。アーチボルド長老の話によれば、宣教師が派遣されたことのない、人口が5万人から20万人の町がたくさんあります。南アメリカのほかの国と同じ割合で伝道部を設立するとすれば、ブラジルには85の伝道部が必要です。しかし、現在のところ23の伝道部しかありません。

ではブラジルは必要な宣教師をどこから求めることができるでしょうか。

サンパウロにある宣教師訓練センターのジェリー・F・トウィッチェル所長は、宣教師の年齢に達しているブラジル人の青年男女4万4,000人のうち現在伝道に出ているのは約3パーセントであると報告しています。この数字を10倍に引き上げることが目標です。この増員に対応するために宣教師訓練センターは今年、新しい建物に引っ越しました。従来の施設では年間2,000人の宣教師にしか対応できませんでしたが、新しい施設ではその6

倍の人数に対応することができます。しかし、実践するよう宣教師が受けている訓練は、宣教師訓練センターの所長が大切にしている1枚の絵によく描かれているように、今も昔も変わりません。その絵は50年前に末日聖徒の宣教師から教えを受け、バプテスマを受けたブラジル最初のステーキ会長バルター・スパットの作品です（『バルター・スパットと南アメリカ最初のステーキ部』『聖徒の道』1991年3月号、32-35参照）。絵にはひざまずいて祈りをささげる二人の宣教師の後ろ姿が描かれており、日々の伝道活動により彼らの靴底には穴が開いています。

ブラジルで働いている宣教師の約40パーセントはブラジル人です。ブラジル、リオデジャネイロ・アンダライステーキのドーリマー・ファグーンディズ・バティスタ会長は、宣教師たちは伝道地で経験することが帰還した後に指導者として働くための備えとなり、地元の教会にとって将来の力となると述べています。ブラジルは人口の移動が頻繁に行われるため、指導者がいなくなってしまうという問題が付きまっています。バティスタ会長が管理する地域には非常に裕福な人々から非常に貧しい人々までおよそ450万の人々が住んでいます。激動するブラジル経済では、中産階級の教会員すらも就職先を探すために引っ越しをしなければならぬことがあります。けれどもこの移動は、引っ越し先の地域に必要とされる経験豊かな指導者をもたらすことにもなります。永遠の価値に

左下、上から——「スーパーサタデー」に参加するセミナーの生徒たち；ザードン・ボタニコワードの福音の教義クラス。右下——宣教師訓練センターの長老たち。



心と思いを寄せる教会員がブラジルには非常に大勢いるので、主はどのような地域であろうと、必要な場所に指導者たちをお立てになれるとバプティスタ会長は語っています。

永遠に心を開ける

福音における進歩の道を歩んでいるブラジルの聖徒たちは、神殿参入に対して大きな望みを抱いています。現在、ブラジルにはサンパウロに神殿が一つあるだけです。遠方から訪問する人々の宿泊施設として宣教師訓練センターの宿舎が使われています。さらに、彼らが受ける神殿の儀式の日程も入念に計画されています。「神殿の年間スケジュールは1年前からいっぱいです」と神殿の予約担当のサルジオ・カードソー・ムーニョスは話しています。

サンパウロ神殿は週末に非常に大勢の人々が参入するため、金曜日の朝から土曜日の夜遅くまで休まずにセッションが行われています。このため、ステーキに割り当てられるセッションの開始時刻が土曜日の午前2時というようなこともあります。

この広大な国では神殿まで行くことが多くの聖徒にとって大きなチャレンジとなっています。イタコアチャラの教会員を例に挙げると、この地域の人々の平均月収は70ドル（約8,000円）です。会員たちはステーキが主催する神殿訪問に参加するために、船とバスをチャーターする料金として大人一人当たり250ドル（約2万8,000円）を払わなければなりません。神殿に参入する1週間のほかに、往復6,400キロの旅をするために2週間が必要です。

幸いなことに、ブラジルでは現在、神殿が建築されています。サンパウロの北東約1,900キロに建てられるレシフェ神殿ではブラジル北部と近隣諸国の12以上のステーキと地方部のために儀式が執行されることとなります。また、今年の初めに3番目の神殿がサンパウロのすぐ北のカンピナスに建築されることが発表されました。

ブラジルにおける教会の成長を考えると、聖徒たちは神殿が不足するという問題に今後もし立ち向かわなければなりません。しかしブラジルの多くの聖徒はそのような犠牲を払うことがむしろ祝福であると考えています。前神殿長のアソーズ・M・デ・アモーリン兄弟は、結び固めを受けるために家族とともに神殿にやって来た小さな男の子について話してくれました。「少年は御霊を感じました。そして神殿で行われていることがどれほど大切かを感じ取ったようでした。少年はささげるようなもの

は何も持っていませんでしたが、主にささげ物をしたいと思いました。彼は神殿長のもとへ来ると、恥ずかしげに握り締めていた手のひらを開いて、抜けたばかりの歯を差し出したのです。」

ブラジル、クリティーバステーキ、クリティーバ第2ワードのエルナスティナ・コーンサソウン・ドス・サントスは活発な86歳の婦人で、ステーキが主催する神殿定期訪問に欠かさず参加しています。「わたしは神殿訪問に参加する体力を与えられるようにいつも天父にお祈りしています」と彼女は言います。彼女は70代半ばのころに足を骨折して参加できなかったときが何度かありました。けれども松葉杖をつけるようになると、また参加し始めました。神殿についてよく理解していない教会員は、末日聖徒であることによって手にすることのできる最も大切な祝福を逃しています。サントス姉妹はこう言います。「わたしたちができる最も良いことは何かといえば、それは主と聖約を交わすことです。」

普通なら堪え忍べられないような試しを受けても、神殿の聖約によってそれに立ち向かう力を得ている教会員がいます。柔らかな物腰のアントニーオー・エディソン・ベローコウは政府の高速道路事業を監督する仕事をしています。ブラジル、クリティーバ・バカシェリストーク、アフワードの会員であるベローコウ兄弟は1988年に教会に入りました。そのとき、奥さんと5人の子供たちは教会に入る準備ができていませんでした。彼らがバプテスマを受けたのは数年後のことでした。それから、彼はこう話してくれました。「福音はわたしたちの生活の中で最も大切なものとなりました。わたしたちは福音で求められていることをすべて行いました。」ベローコウ兄弟の家族は、神殿に参入するために車を走らせていたときに、事故に遭いました。命を取り留めたのはベローコウ兄弟だけでした。彼が病院で意識を回復したときには、奥さんと子供たちはすでに埋葬されていました。

ベローコウ兄弟はその後に家族と神殿で結び固めを受けました。事故の傷跡はよく手入れされたあごひげで隠されています。しかし永遠の真理を理解していたベローコウ兄弟は、霊に傷跡を残すことはありませんでした。「もしイエス・キリストの福音を知らないときにあの事故が起きたとしたら、わたしはどうなっているか想像することもできません。現在のわたしにとって最も大切なことは、家族と永遠に一緒にいられるように、自分を清くふさわしい状態に維持することです。わたしはすべての望みを福音に託しています。」

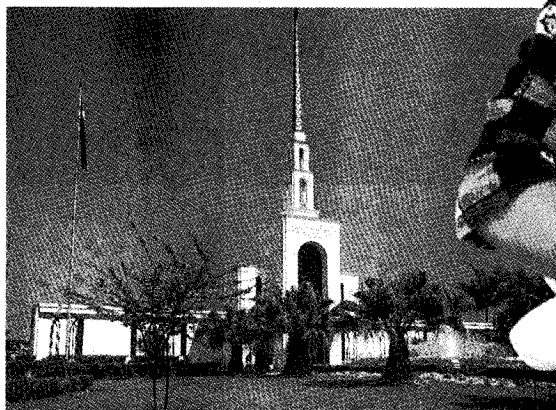
会員たちを再び霊的に目覚めさせる

ブラジルにおいて間もなく3つの神殿が運営されようとしているという事実は、会員たちの霊的な力が高まっていることをはっきりと物語っています。けれども、世界の各地で見られるように、この国にも自分の道を見失ってしまい、再び教会に活発に集うようになるために、愛と関心を必要としている人々があります。ブラジルの地域会長会は十二使徒定員会からの指示に基づいて、宣教師に対して全伝道時間のうち最大3分の1を、現在福音の完全な祝福にあずかっていない会員たちの再活発化に充てるように要請しました。活発でない会員たちに、神殿に通じる道を手伝ってもらうことが目的です。

神権指導者と会員たちは宣教師と協力して活発化のために努力しています。ブラジル、リオデジャネイロ・マドレーラスステーキのアキレス・ミゲル・ダ・オリベイラ高等評議員の話によれば、彼のステーキの神権定員会は活発でない会員を助けるに当たって個々の人々の状態に応じた方法を考え出しています。彼らは兄弟たちを単に訪問するだけでなく、訪問先の家庭で福音を教え、個人を強めるための活動を実施したり、定員会の割り当てを与えたりしています。また、聖文を読むこと、家庭の夕べを開くことを奨励しています。会員たちの家

庭の夕べに活発でない会員の家族を招待することもあります。彼らの目標は宣教師と同様に、神殿に通じる道を手伝ってもらうことです。

活発でなくなった会員を活発化させる際には微妙な問題にぶつかることがあると、マドレーラスステーキ会長会のマリオ・ルイズ・ダ・ソズ・ダ・シルバ第一副会長は言います。悔い改めを必要とする場合に、監督はその人を悔い改めの道に導くために、「完全に御霊に頼らなければなりません。〔投薬は適量でなければなりません〕」とダ・シルバ副会長は説明します。〔薬



サンパウロ神殿において家族の結び固めを受け、満面の笑みを浮かべているロベルト・ロシヨール・フィルヨー、奥さんのシルバナ、子供のラファエル、アンドレイ。母親に抱かれているのはティアゴイ。



の量が多すぎると、患者を殺してしまうことになります。逆に少なすぎると、病気は治りません。どれほどの量の薬が必要かを告げることができるのは主をおいてほかにおられません。』

人を霊的に生き返らせるという結果を目にすることは、そのために働いた人々が支払う犠牲に対して与えられる報いです。けれども、受けた祝福と比較すると、払った犠牲はいかにも小さく感じるものだと

ダ・シルバ副会長は述べています。

ダ・シルバ副会長が語ったことがブラジル全土の末日聖徒の間で起ころうとしています。会員たちはほかの人を助けるために自分が持っているものを差し出しています。それによって教会全体が強くなっているのです。

クリティーバに住むスペンサー・ナガタは、現在第二副管長を務めるジェームズ・E・ファウスト長老がかつて述べた以下の言葉どおりに、この国は福音の影響を受けていると話しています。「教会が……今日^{こんにち}の力を得るまでに発展したのは、謙遜^{けんそん}で献身的な数百万の人々の忠誠心……があったからです。彼らは自分の5つのパンと小さな2匹の魚を主の御業^{みわざ}にささげました。」（『5つのパンと2匹の魚』『聖徒の道』1994年7月号、6）ブラジルでも同じことが起きています。大勢の人々による主の業への貢献が、聖徒の家族を強め、成長させているのです。□

左——ニタロイワードのフェルナンドー・V・ビンセンチ。下、左から——アグワ・ブランカ支部のアキレス・ミゲル・ダ・オリベイラ・ジュニア；クリティーバ第2ワードのエルナスティナ・コーンサソウン・ドス・サントス。



彼らは自ら正しいと知っていることを行う

レシフェに新しく家を建てたミルトン・ソアレズ・ジュニアと奥さんのイレーンは笑顔を絶えずに招待した人々を迎えています。二人は生涯の大半を築くことに費やしてきました。それは家族を築き、またここレシフェで彼らとともに始まった教会を築く仕事でした。

二人は初めて受け取った末日聖徒のパンフレットを今でも大切に保管しています。それはジョセフ・スミスの物語で、表紙の内側には宣教師の手書きによる、使徒たちという土台の上に築かれた教会の絵が描かれています。彼らが長年愛読している別の教会の書物には、ミルトンがこの神権時代にレシフェで最初にバプテスマを受けた人であることを示す宣教師のメッセージが記されています。それはミルトンにレッスンを教えた宣教師が記したものです。日付は1960年5月15日となっています。奥さんとバプテスマを受ける年齢に達していた子供たちはそれから3週間後に教会に入りました。

イレーン・ソアレズは伴侶が福音を勉強し始めたとき、最初は批判的な目で見ていました。けれどもイレーンは伴侶が善良な人であることを知っていたので、もし彼が福音を受け入れるとすれば、それは正しいことに違いないと考えていました。イレーンが真理について強い証を得たのは、十二使徒定員会のジョセフ・フィールディング・スミス会長と七十人のセオドア・タトル長老がレシフェを訪問したときのことでした。「わたしはそれまで学んできた事柄が真実であり、スミス会長が預言者であることを心にはっきりと感じました。」

当初、ミルトンとイレーンはそれぞ

れの家族から、なぜ二人がだれも知らないような教会に入るのかと尋ねられたとき、二人が説明のよりどころにできたのは自分たちの信仰だけでした。ミルトンの家族は時がたつにつれて彼の決断を受け入れてくれましたが、イレーンの両親と兄弟は反対し続けました。けれどもイレーンは見いだした真理を放棄することができませんでし

た。

イレーンは笑いながら当時の様子をこう話してくれました。「教会に入って1週間たっただけで、わたしはもういちばん古い教会員になってしまったんですよ。」彼女は出会うあらゆる人々と親しくなる責任が自分にあると感じていました。彼女が教会に対してささげた最初の犠牲は聖餐用



ブラジルの開拓者ミルトン・ソアレズ・ジュニアと奥さんのイレーン。長年愛読した教会の書物（下）には、二人に福音を教えた専任宣教師たちのメッセージが記されている。



のテーブルクロスを作ることでした。二人の小さな支部が集会所を移転したとき、ミルトンはバプテスマフォントを作り、イレーンは苦勞してバプテスマ用の服を作りました。

ブラジルにおける教会の初期の会員たちと同様に、ミルトンとイレーンは自分の家族のために福音の種をまきました。そしてブラジルの多くの家族と

同じように、ミルトンとイレーンが示した模範は後の世代に実りをもたらしました。二人の長男イラザがその良い例です。10代でバプテスマを受けたイラザはすぐに宣教師とともに働くことに喜びを見いだすようになりました。そして1966年にイラザはブラジル人として外国の伝道に召された最初の長老となりました（チリで伝道しました）。現在、彼は地域七十人として働いています。□

教会とともに成長する

マ ティルデ・フェルバーが末日聖徒イエス・キリスト教会に加わったのは、教会がブラジルに根を下ろして間もなくのころでした。そしてマティルデは教会とともに成長しました。

ブラジルにおける末日聖徒の宣教師活動は当初、国の南部地域に移民していたドイツ語を話す人々の間で行われました。ドイツ語を話すスイス人の家庭に生まれたマティルデは、わずか10歳だった1938年に、初めて宣教師と出会いました。父親が娘たちの母親と娘たちにバプテスマを受ける許可をくれたのはそれから3年後のことでした。

マティルデの求道者時代と新会員時代には北アメリカから来た宣教師たちがよく彼女の家を訪れました。彼女はアルバムを見ながら、若き日のジェームズ・E・ファウスト長老、ウィリアム・グラント・バンガーター長老をはじめとする多くの長老た

ちの名を挙げて、彼らがマティルデの家を訪れたことを話しています。

マティルデが結婚した男性イノース・ダ・カストロ・ダオスは集會に出席し、教義を細部にわたって研究し、頼まれれば支部の手伝いをするという生活を5年間続けた後、1952年にバプテスマを受けました。彼は自分の生涯を託すことができる教会でなければ会員になるまいと心に決めていました。真理を確信したかったのです。

イノースとマティルデに始まるダオス家は3代にわたって、クリティーバにおける教会の発展に力を尽くしました。マティルデは教会の各補助組織の指導者としての責任を果たしてきました。17年間にわたる扶助協会会長会の責任のほか、ステーキと伝道部における様々な召しを果たしてきました。イノースは支部長を4回、監督を2回、地方部長、そして副支部長、副伝道部長、ステーキ副会長の

責任を果たしてきました。イノースはまた、クリティーバにおいて教会が確立していなかった時代に、最初の集會所を建築する際に設計を手伝っています。そして、昨年暮れに他界しました。

「教会は最初、なかなか大きくなりませんでした」とマティルデは話します。「ここに住む人々をバプテスマに導くことはほんとうに大変でした。」現在では多くの会員たちが示している良い模範が伝道的手段となって、福音の実りをもたらしています。このため、教会について人々に話すのはずっと容易になっています。

マティルデは、義理の娘が日曜日の朝に隣の家の人から垣根越しにじっと見られているのに気づいたときのことを、にこやかに話してくれました。その隣人は「家族がそろって教会へ行く様子に見とれていました」とのぞき込んでいた訳を話したそうです。□



マティルデの少女時代にブラジルで伝道した宣教師たちの写真に見入るマティルデ・フェルバー・ダ・カストロ・ダオスとご主人のイノース。



ユタの画家エベレット・クラーク・ソープ（1907-1984）は末日聖徒の開拓者の姿を描いた一連の壁画を制作した。
この油絵（300×150センチ）はユタ州ローガンステーク、ローガン第1ワード所蔵のものである。

ブラジルにおける教会

人口 1億6,000万人

教会員 60万1,000人

ステーク 150

伝道部 23

地方部 43

神殿 運営中 1(サンパウロ)

建設中 1(レシフェ)

建設発表済み(カンピナス)



神 聖な神殿の聖約を交わすことを目標にして、セミナーとインスティテュートを学ぶ若い末日聖徒たち(写真上, 左)は、ブラジルのあいさつ「トゥド・ベン」に込められた「人々にあらゆる祝福を」という精神を実践している。本誌「ブラジルのあいさつ『トゥド・ベン』」34ページ参照。

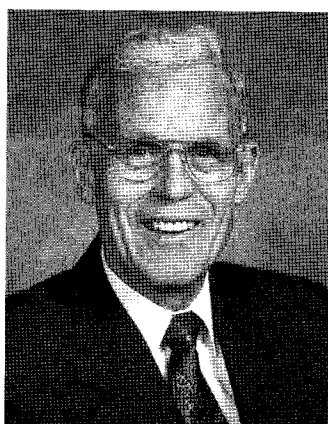


アフリカにおける教会

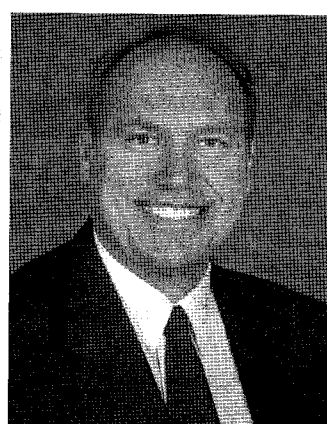
アフリカにおける教会の歴史をひもといてみると、1853年には早くも南アフリカ共和国において教会が設立されている。しかし、アフリカ大陸のほかの各地で伝道活動が開始されたのは1978年以降である。「新しい地域において次々に教会の堅固な基礎が築かれ、そして教会が各地に広がっている現在の状態を目にすると、わたしは胸が高鳴る思いがします」とアフリカ地域会長会の長老たちは口々に語る。アフリカにおける教会の発展状況を把握するために、国際機関誌編集員は先ごろ、アフリカ地域会長で七十人のジェームズ・O・メーソン長老、第一副会長で同じく七十人のデニス・E・シモンズ長老、第二副会長で地域七十人のクリストフェル・ゴールデン・ジュニア長老とインタビューを行った。



デニス・E・シモンズ長老



ジェームズ・O・メーソン長老



クリストフェル・ゴールデン・ジュニア長老

質問——アフリカ地域に住む会員数は1997年1月に10万人に達しました。アフリカにおける教会の進歩と成長の状態について詳しく紹介していただけますか。

答え——アメリカ合衆国の3倍の地域に約6億の人々が住むアフリカ地域には、地中海沿岸諸国を除くすべての国々とさらにマダガスカル島、モーリシャス島、レユニオン島が含まれます。地域内の47か国中、教会が正式に登録されているのは27か国です。地域内には11の伝道部があり、18か国で930人の宣教師が働いています。これらの宣教師のうち436人がアフリカの各国から召されているという事実は、アフリカにおいて教会が力強く発展していることを示していると思います。現在、アフリカには17のステークがあります。国別に見ると次のとおりです。ナイジェリアには8ステーク内に90のワードと

支部、南アフリカ共和国には6ステーク内に74のワードと支部、ガーナには2ステーク内に24のワードと支部、そしてザイールには1ステーク内に9つのワードと支部がそれぞれあります。さらに、地域内には42の地方部が組織されています。1990年以降、改宗者のバプテスマの割合は多少、減少傾向にありましたが、最近になって再び増加しており、1996年には7,000人近くの人々がバプテスマを受けました。

指導者は、教会が認可されている国内で人口の集中している地域を中心として、そこから順次発展させる方法を取っています。教会が急速な成長を見せたのは、スペンサー・W・キンボール大管長が1978年に受けた、すべてのふさわしい男性に神権が授けられるという啓示が発表されてからです。アフリカでは、宣教師活動を



ガーナ・アクラステーク、テマワードの若い女性と指導者たち。

PHOTOGRAPH BY DON L. SEARLE

展開し、神権者の訓練と指導を実施することが可能であれば、教会はどの地域でも発展する可能性を持っていることがはっきりしています。アフリカには1,000以上の言語と多くの方言がありますが、わたしたちは3つの外来語すなわち英語、フランス語、ポルトガル語を中心に伝道を展開しています。つまり、教会はおおむね都市地域を中心に発展しているということです。教会はこのようにして、将来アフリカにおいて福音を広めるための基礎を築いているのです。

わたしたちはアフリカの会員たちが力をつけていることに喜びと満足を覚えています。教会は、教会の指導者として働く責任を喜んで引き受ける兄弟姉妹という大きな収穫を現在刈り取っています。教会が急速かつ確固とした発展を遂げている過程で、家族が非常に重要視されているアフリカの文化的背景を見逃すことができません。全教会員に対する活発なメルキゼデク神権者の割合は非常に高く、教会のほかの地域と比較しても引けを取りません。聖餐会せいさんかいの出席率が70パーセントに達しているステークが幾つかあります。訓練集会では出席する人々が教会の手引きの大切な箇所箇所に赤線を引いたり、しばしば手引きを参照したりしている光景をよく目にします。アフリカの会員

たちは主の王国の教義と秩序を理解しています。彼らは福音のメッセージと福音がもたらす祝福どんよくに対して実に貪欲です。

質問——アフリカの会員と指導者は福音を通して、どのように訓練に打ち勝つ力を得ているのでしょうか。

答え——アフリカの人々は福音の光にこたえたときから、開拓者として歩むことを要求されます。人々は改宗によって、福音と相いれない文化的伝統から離れなければならないこともしばしばあります。多くの人々にとって福音の教えに従って生活することはまったく新しい生活を始めるということの意味しています。例えば、アフリカの会員たちは、実際に神殿に参入できるか否かにかかわらず、常に有効な神殿推薦状を持つようにとの預言者の勧告を真剣に受け止めています。ナイジェリアからヨハネスブルクまでの旅は、距離や費用の面でロンドンへの旅行とほぼ変わらないほど負担がかかるため、これらの負担は一部の会員たちにとって神殿へ参入するうえで直面するチャレンジと考えられています。しかしながら、ある伝道部長からの報告によると、その伝道部には神殿推薦状の面接を受けるために往復29キロの道のりを徒歩で訪れる夫婦がいます。こ

の夫婦は神殿に参入するうえでかなり困難な環境にありますが、教会に対する誠実と預言者に対する従順を示すためにこの道のりを喜んで歩いてきました。主を信じるがゆえに、肉体的な苦難に耐え、社会生活や生活習慣を大きく変えた人々の話は数多くあります。教会員が福音に従って生活するよう励ましている教会のプログラムを特に二つ挙げるすることができます。アフリカでは言語と教育が大きな問題となっているために、福音に基づいて実施されている福音学習能力向上プログラムは非常に有益です。また、セミナーとインスティテュートは若人と指導者双方に大きな成果をもたらしています。ジンバブエでの例を挙げると、あるセミナー教師は、クラスの開講当初わずか一人だった生徒が、年度末には30人にまで増えたという経験をしています。セミナーとインスティテュートは若人に福音の持つ価値観と原則を教えるうえで最も効果的な手段と言えるでしょう。また、彼らが受け継いでいる文化の持つ良い面に福音を重ねることによって、福音の伝統と文化を若人の間で確立するためにも有効な手段となっています。

ザイール(訳注——現コンゴ民主共和国)における教会の発展は感動的です。広大な国土を持つこの国で宣教師の活動が開始されてしばらくしてから、内乱が起きたために宣教師は1年半にわたり国外への退去を余儀なくされました。しかし、地元の神権指導者は会員たちを組織して伝道活動を続け、このために教会はさらに発展し、成長しました。これらの宣教師活動の中断と様々なチャレンジに遭遇したにもかかわらず、わたしたちは1996年11月にザイール・キンシャサステークを組織しました。2,056人の会員を擁するこのステークには400人近くの活発なメルキゼデク神権者がいます。最初のステーク大会には1,600人以上の会員がタクシーやバスを連ねてあるいは徒歩で会場に足を運びました。しかしごく最近、再び政情が不安になったため、専任宣教師は退去させられていますが、ザイールの教会は成長を続けています。

質問——アフリカにおける教会の将来をどのように考えておられますか。

答え——アフリカが抱える部族主義、戦争、貧困という問題を解決するための答えは、預言者ジョセフ・スミスによって回復されたイエス・キリストの福音です。教会員が戒めに従い、王国の建設への努力を続けるならば、この大陸の状態は改善されるとわたしたちは固く信じています。大陸全体の人口と比較すれば末日聖徒はわずかしきませんが、教会がもたらす光と真理と知識は、人数の割合から考えるよりもはるかに大きな影響力をこれらの国々に及ぼすことができます。これらの人々が守られていること、また彼らの間に福音を宣べ伝えることができているのは、主の手が差し伸べられているためであることをわたしたちは実感しています。例えば、南アフリカ共和国の黒人に対する人種隔離政策があれば急激に変化するとはだれが考えていたでしょうか。南アフリカ・ヨハネスブルク神殿がアフリカ大陸に与える影響度の大きさは計り知れないものがあります。ヨハネスブルク神殿と今後建設される神殿は大きな影響力を及ぼして、人々の生活が変わり、国々に祝福がもたらされることでしょう。

19世紀には大勢の改宗者がユタに移



最近、マダガスカルでバプテスマを受けた会員たち。

PHOTOGRAPH COURTESY OF RICHARD P. LINDSAY

住するために喜望峰から旅立って行きました。当時は開拓者精神がみなぎっていました。この精神は聖徒の間で今なお力強く残っています。教会は一つの大きな家族です。これほど多くの白人と黒人の宣教師が同僚となって、一緒に生活し、一緒に働き、イエス・キリストの福音がまことの兄弟愛、姉妹愛をもたらすことを示している光景を、世界のどこで見ることができるでしょうか。このような同僚関係は、二

つの世界がそれぞれに持つ最も良きものを一つに結び合わせています。同僚から様々な事柄を学ぶこれらの宣教師は、世の過去の因習を引きずることのない新しい人に生まれ変わっているのです。わたしたちが兄弟姉妹として福音において一つとなるときに、アフリカの教会で、また全世界の教会において、人種や文化の違いについて必ず同様のことが起こることでしょう。□

モルモンタバナクル合唱団のヨーロッパ演奏旅行

ソルトレーク・シティ発

世界的に有名なモルモンタバナクル合唱団は1998年の夏、ヨーロッパの7か国、9都市を訪れて演奏会を開催することになった。8月に大管長会が発表したところによると、同合唱団はロンドン、ブリュッセル、ジュネーブ、ジェノバ、ローマ、マルセイユ、バルセロナ、マドリッド、リスボンを訪れる。総勢300人の合唱団はブリュッセル、バルセロナ、マドリッドにおいて教会

のファイヤサイドでも演奏を行う。また、日曜日のレギュラー番組「ミュージック・アンド・ザ・スポークン・ワード」はロンドン、ジュネーブ、バルセロナから放送される。演奏会の日程は次のとおりである。6月14日ロンドン、ロイヤルアルバート・ホール；6月16日ブリュッセル、パレス・デ・ボー・アーツ；6月18日ジュネーブ、ビクトリア・ホール；6

月20日ジェノバ、ジェノバ・オペハウス；6月22日ローマ、アカデミア・サンタセシリア；6月24日マルセイユ、ザ・ドーム；6月26日バルセロナ、バラウ・デ・ラ・ムジカ；6月29日マドリッド、オーディトリオ・ナシオナル；7月1日リスボン、コリーセ。タバナクル合唱団のヨーロッパ演奏は1955年の初演以降、1973年、1982年、1991年に実施されている。□

ボストン神殿 の鍬入れ式

十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老は1997年6月13日、大管長会の指示により、ボストン・マサチューセッツ神殿の建設に先立って鍬入れ式と敷地の奉献を行った。この式典にはほかに、北アメリカ北東地域会長で七十人のマーリン・K・ジェンセン長老、同地域第一副会長で七十人のW・ドン・ラッド長老、地域七十人のロバート・S・ウッド長老が列席した。

スコット長老は奉献の祈りの中でこのように述べている。「わたしたちはとりわけ、この神殿を建てる目的、すなわち夫婦と子供たちが家族として永遠に結び固めを受けるための儀式を執行することが、あなたの聖なる御子の



青少年とともに鍬入れ式に参加するリチャード・G・スコット長老（左）。

PHOTOGRAPHY BY RON CATALANO

贖罪しよくざいによって実現していることを感謝します。」

竣工が予定されている今世紀末から21世紀初頭に完成すると、この神殿は

ニューイングランド地方で最初の神殿となり、約5万4,000人の教会員のために儀式を執行することになる。□

ブラジルで新たに奉献された宣教師訓練センター

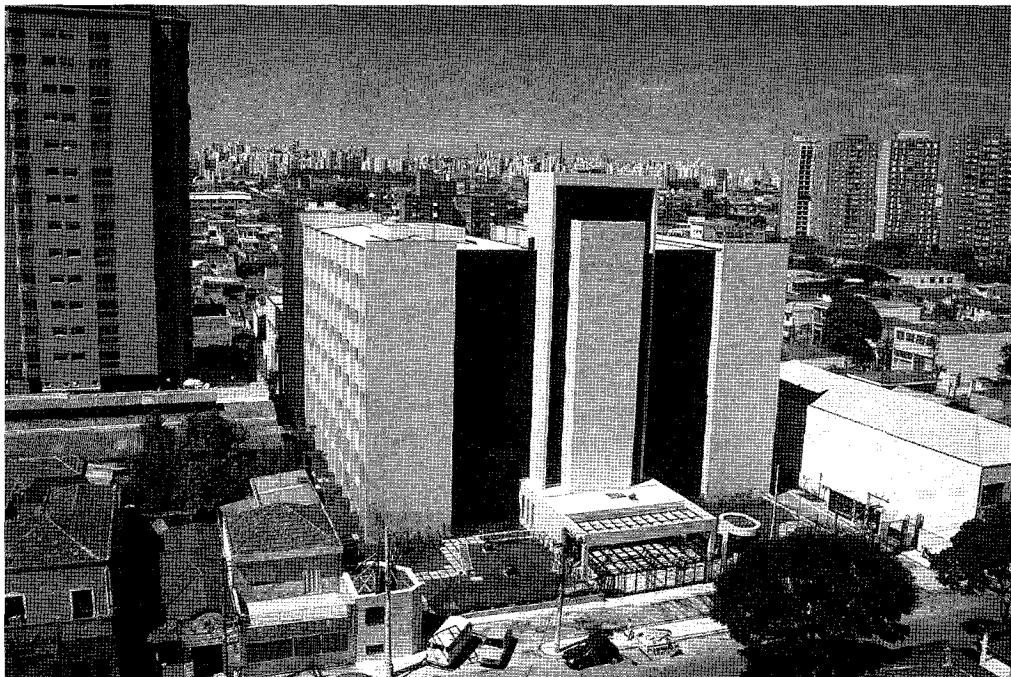
1997年5月18日、サンパウロでブラジル宣教師訓練センターの奉献式が行われた。会場となった800席設置の講堂は1,100人を上回る人々で埋め尽くされた。十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老は英語で説教

を行った後に、ポルトガル語で奉献の祈りをささげた。

ネルソン長老は祈りの中で、「ブラジルの国民が正義の下で成長する自由と責任を手にし」、「この偉大な国家の指導者たちが知恵と高潔さを得る」よ

うに祝福した。さらに、ネルソン長老は「多くの国々に住み、また様々な状況に置かれた忠実な聖徒たちの什分の一基金により建てられたこの聖なる建物が、……これらのすばらしい施設を利用する特権を得た息子娘たちに対して、祝福をもたらす場所となる」ように祝福している。

アメリカ合衆国外で建設された教会最大の建物の一つであるブラジル宣教師訓練センターは、6階建てのビルが2棟並び、各々375人の宣教師を収容できる。ただし、当面は1棟のみを使用することになる。二つのビルを結ぶ建物は、カフェテリアと講堂として使用される。□



新たに完成したブラジル宣教師訓練センターは、アメリカ合衆国外での教会建築物としては最大の規模に属する。

新伝道部長セミナー

—ユタ州プロボ発—

「皆さんは素晴らしい体験をする
ことになるでしょう。そして、
これまでの人生で経験したことのない
ほど、熱心に働くことでしょう。しか
し、その働きによって皆さんは心の奥
底に必ず大きな満足を覚えることでし
ょう。」6月最後の週にユタ州プロボの
宣教師訓練センターで行われた毎年恒
例の新伝道部長セミナーにおいて、ゴ
ードン・B・ヒンクレー大管長は新し
く召された伝道部長と夫人たちに向け
てこのように述べている。「主の御霊
により皆さんの重荷は軽くなるでしょ
う。皆さんは御霊に励まされ、これまで
自分には絶対不可能だと思っていた
事柄を成し遂げることでしょう。」

ヒンクレー大管長は伝道の業を成功
させる5つの原則について述べた後に、
「もしこの原則を実践するならば、皆
さんは大いなる祝福を受けて働き、務
めを果たせます」と約束した。大管長
はこれらの原則として、神の栄光にひ
たすら目を向ける、研究と労働という
大いなる習慣を實踐しました教える、個
人の安全と福祉を大切にすることを築
く、愛に導かれた生活をする、いつい
かなるときにもどのような状況にあっ
ても主に近く生活する、という5つを
指摘した。

「主に近づき、力の源を常に主に求
めてください」と大管長は述べている。

「これを行うならば、ほかでは見
いだせない喜びをきつとこの奉仕の業か
ら得られることでしょう。」

1週間のセミナーでは、大管長会の
トーマス・S・モンソン第一副管長、
ジェームズ・E・ファウスト第二副管
長をはじめ、十二使徒定員会および七
十人会会長会から数人の幹部が説教を
行った。

「皆さんの心と思いの中にとどめ、
また宣教師たちの間にも浸透させてい
ただきたい約束があります。教義と聖
約第84章88節に記されている言葉で
す」とモンソン副管長は語った。「『わ
たしはあなたがたに先立って行こう。
わたしはあなたがたの右におり、また

左にいる。わたしの御霊はあなたがた
の心の中にある。また、わたしの天使
たちはあなたがたの周囲にいて、あな
たがたを支えるであろう。』落胆する
日があっても、この約束に目を通し
さえすれば、皆さんは御霊によって心
を励まされます。そして、宣教師たちの
軍勢とともに前進する力を二重に受け
ることでしょう。」

モンソン副管長はまた、ステークと
専任宣教師の間の協力についてこう述
べた。「伝道部は会員たちとの協力の
下で努力しないかぎり、その最大の成

果を上げることはできません。」

ファウスト副管長は伝道部長を選ぶ
際に、一つの大切な質問について考え
ることを明らかにしている。それは
「わたしは自分の息子や孫をこの伝道
部長と夫人の下で働かせたいと思っ
たろうか」という問いかけである。ファ
ウスト副管長は次いで、伝道部長と夫
人に対して、宣教師たちが救い主の贖
罪とジョセフ・スミスの使命に対する
証を得て、正直、勇気、従順という特
質を伸ばす手助けをするようにと要請
した。□



年次訓練セミナーに出席した新伝道部長は現在39か所の任地で働いている。

PHOTOGRAPHY BY JOHN HART, COURTESY OF CHURCH NEWS

マザー・テレサへ贈られた 大管長会からの賛辞

大管長会は、1997年9月5日のマザ
ー・テレサ逝去の報を受けて、次
の声明を発表した。

「わたしたち末日聖徒イエス・キリ
スト教会の大管長会は、世界中の何百
万人もの人々とともに、カルカットの
マザー・テレサの死に追悼の意を表し
ます。自己を忘れて奉仕の業にささげ
た彼女の生涯は、全世界に感動を与え
ました。キリスト教徒としての徳に満
ちた彼女の行いは、後世の人々の記憶
にいつまでもとどめられることでしょう。

子供たちに対するマザー・テレサの
特別な献身を思うと、彼女がまさに救
い主が説かれたように生涯を送ったこ
とが分かります。『また、だれでも、こ
のようなひとりの幼な子を、わたしの
名のゆえに受け入れる者は、わたしを
受け入れるのである。』（マタイ18：5）

わたしたちは、カトリック教会なら
びにマザー・テレサと親しく交わりの
あった方々に心からお悔やみを申し上
げます。（Church News『チャーチニ
ューズ』1997年9月13日付）□

新たに組織された 地域会長会

地域会長会の再編成が大管長会より発表された。この変更は、1997年8月15日から発効となる。地域会長会は七十人定員委員会によって構成されている。今回の異動で、地域会長会の各長老の中には、現在の任地にとどまる長老がいる一方、ほかの任地に異動となった長老もいる。新たに組織された地域会長会には、最近地域七十人の召しを受けた9人の長老も含まれており、9人とも、現在地域会長会副会長を務めている。



4. 北アメリカ南東地域会長会



ローレン・C・ダン 第一副会長
ジョン・K・カーマック 会長
ゲリー・J・コールマン 第二副会長

5. 北アメリカ南西地域会長会



アンヘル・アブレア 第一副会長
リン・A・ミケルセン 会長
D・トッド・クリストファーソン 第二副会長

1. 北アメリカ北西地域会長会



F・メルビン・ハモンド 第一副会長
グレン・L・ベイス 会長
*C・スコット・グロー 第二副会長

6. 北アメリカ西地域会長会



ジョン・B・ディクソン 第一副会長
デビッド・E・ゾレンセン 会長
ジョン・M・マドセン 第二副会長

9. メキシコ北地域会長会



デール・E・ミラー 第一副会長
アンドリュー・W・ピーターソン 会長
*トマス・バルデス 第二副会長

2. 北アメリカ中央地域会長会



ケネス・ジョンソン 第一副会長
ヒュー・W・ビニック 会長
リン・G・ロビンズ 第二副会長

7. ユタ北地域会長会



ロバート・K・デレンバック 第一副会長
アレクサンダー・B・モリソン 会長
ジェイ・E・ジェンセン 第二副会長

10. メキシコ南地域会長会



リチャード・E・ターレーシニア 第一副会長
カール・B・ブラッド 会長
*オクタビオ・テノリオ 第二副会長

3. 北アメリカ北東地域会長会



W・ドン・ラッド 第一副会長
マーリン・K・ジェンセン 会長
ドナルド・L・ステアラー 第二副会長

8. ユタ南地域会長会

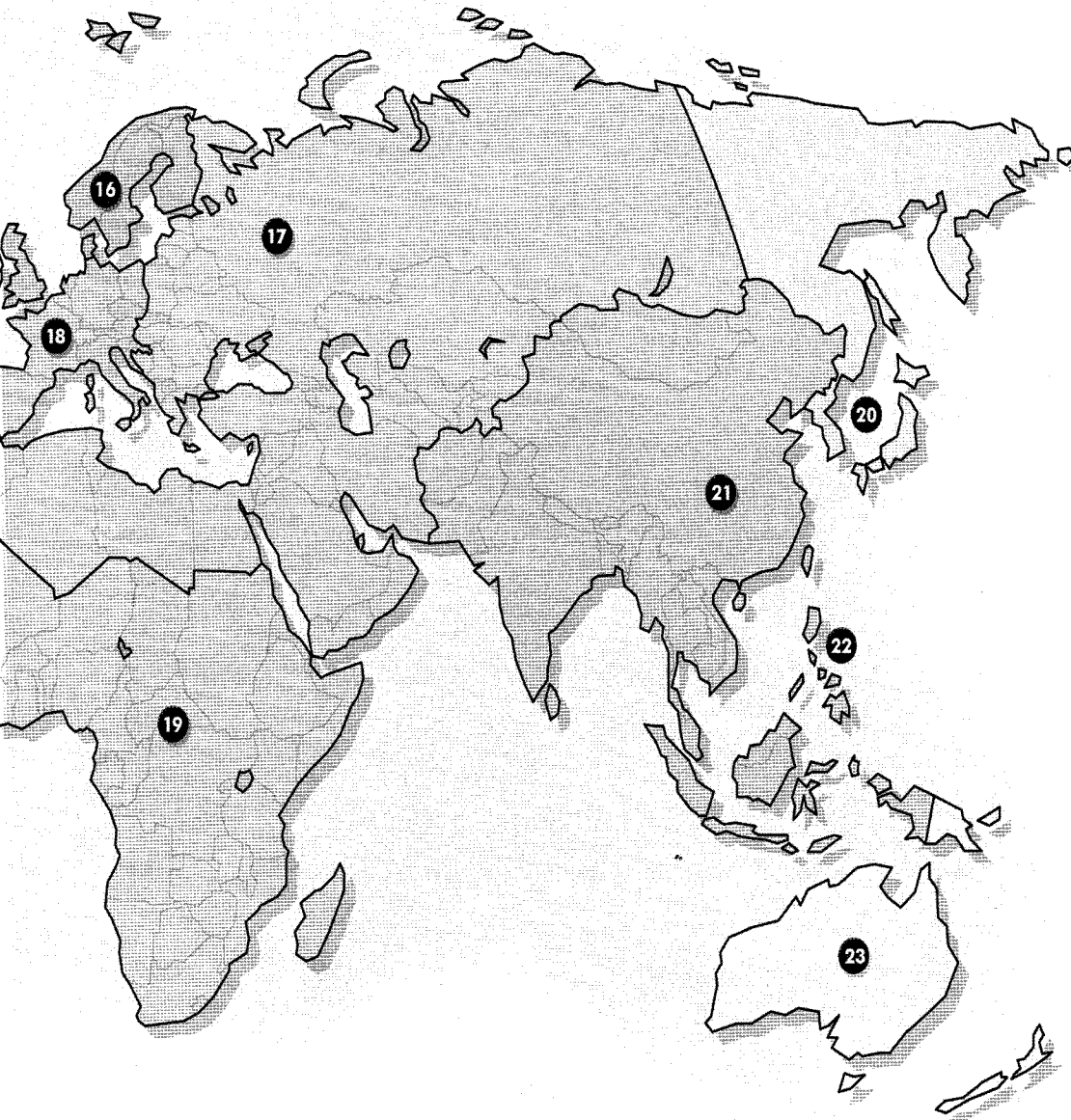


デニス・B・ノインシュンダー 第一副会長
ベン・B・バンクス 会長
ニール・L・アンダーセン 第二副会長

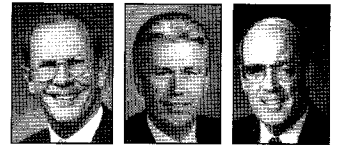
11. 中央アメリカ地域会長会



*フリオ・E・アルバラド 第一副会長
ウィリアム・R・ブラッドフォード 会長
*E・イスラエル・ペレス 第二副会長



18. ヨーロッパ西地域会長会



ジーン・R・クック 第一副会長
 ディーター・F・ワークトドルフ 会長
 F・バートン・ハワード 第二副会長

19. アフリカ地域会長会



デニス・E・シモンズ 第一副会長
 ジェームズ・O・メーソン 会長
 ※クリストフェル・ゴールデンジュニア 第二副会長

20. アジア北地域会長会



L・ライオネル・ケンドリック 第一副会長
 レックス・D・ピネガー 会長
 L・エドワード・ブラウン 第二副会長

21. アジア地域会長会



クリー・L・コップフォード 第一副会長
 ジョン・H・クローバーク 会長
 リチャード・E・クック 第二副会長

(※印は地域七十人)

12. 南アメリカ北地域会長会



エラン・A・コール 第一副会長
 フランシスコ・J・ビーナス 会長
 リチャード・J・メインズ 第二副会長

14. チリ地域会長会



ジェラルド・L・テラー 第一副会長
 ダラス・N・アーチボルド 会長
 ※エドワード・A・ラルマルティネ 第二副会長

16. ヨーロッパ北地域会長会



スパンサー・J・コンディー 第一副会長
 セシル・O・サミュエルソンジュニア 会長
 ウィリアム・ロルフ・カー 第二副会長

22. フィリピン・ミクロネシア地域会長会



クエンティン・L・クック 第一副会長
 シェルドン・F・チャイルド 会長
 デュエイン・B・ジェラード 第二副会長

13. ブラジル地域会長会



クラウド・R・M・コスタ 第一副会長
 W・クレイグ・スウィック 会長
 J・ケント・ジョリー 第二副会長

15. 南アメリカ南地域会長会



リチャード・D・オールレッド 第一副会長
 カロス・H・アマゾー 会長
 ※ヒューゴ・A・カトロン 第二副会長

17. ヨーロッパ東地域会長会



F・エンツィオ・ブツィエ 第一副会長
 チャールズ・ディディエ 会長
 ウェイン・M・ハンコック 第二副会長

23. 太平洋地域会長会



ブルース・C・ヘーフェン 第一副会長
 ボーン・J・フェザーストーン 会長
 ※P・ブルース・ミッチェル 第二副会長

ウラジオストックの会員と宣教師たちが 公共の場所を清掃

この夏、ロシア連邦ウラジオストックの教会員たちは他団体と協力してウラジオストック中心部の公園など公共の場所の清掃に当たった。これは現地市民団体の美化キャンペーンの一環として行われたもので、福祉宣教師として派遣されているブラッドフィールド夫妻らの呼びかけにより、教会員とその友人たち、および6人の専任宣教師が参加した。



上/長老たちの手によって公園が清掃された。
左/美化プロジェクトに参加したウラジオストック支部の会員と宣教師、友人たち。



以下の記事は、1997年8月14日木曜日付、『ノボストイ』紙第115号に掲載されたもの。

町の美化活動、ついに青少年が着手

8月16日曜日、町の住民は、朝からほうきなどの清掃用具を手にした青少年の団体をウラジオストック中央広場で目にするようになる。

付近一帯では近々、「きれいにしよう みんなの町」をスローガンに掲げたポスターをはったコカ・コーラの運搬車が登場する。これは、ウラジオストック・ロータリークラブの後援により最近組織された青少年団体「インタラクト」が、世界規模のプログラム「クリーン・アップ・ザ・ワールド」への協力を決定したことによる。団体に所属する青少年たちは、美しい町の清掃の行き届かない有

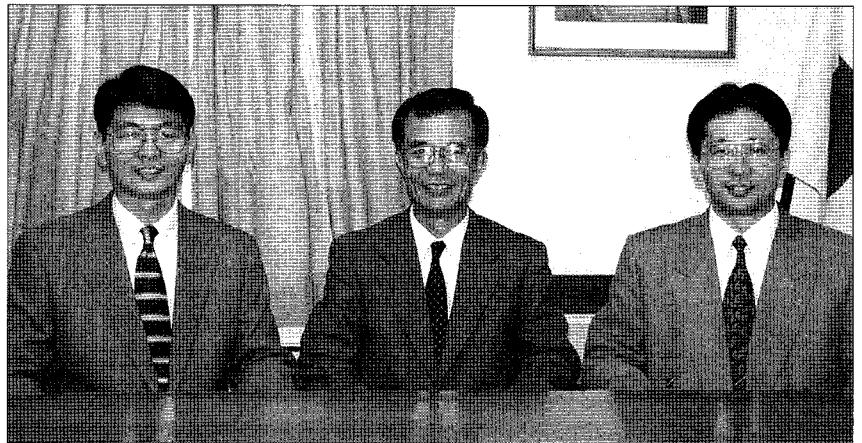
様を外国からの招待客が目にするのは地元にとって恥ずべきことと受け止めている。このキャンペーンには、コカ・コーラ社に加え、アメリカ合衆国の末日聖徒慈善事業団とウラジオストック市役所も協賛している。

清掃に参加する団体には少なくとも6人の外国人が含まれる予定。中央広場でごみを除去した後、美化の戦士とも言うべき二つの団体は公園に向かう。その後、公園を出発し、市立病院にほど近い公共庭園へと進む。予定が順調に進めば、「インタラクト」の参加者は、国境を越えて互いに手を携え合う仲間を、幾分清掃の行き届いているウラジオストックの史跡へと案内することになるだろう。



再組織された神戸ステーキ会長会

去る9月7日、アジア北地域会長会のL・ライオネル・ケンドリック第二副会長管理の下に開催された神戸ステーキ大会で、1989年よりステーキ会長の責任を果たしてきた堂ノ本勉兄弟が解任され、新たに長濱 修兄弟（写真中央）が召された。第一副会長には津田信男兄弟（写真左）が、第二副会長には長沼雅仁兄弟（写真右）が召され、その任に当たる。



神戸の人々の心に主の慰めと平安を

神戸ステーキ会長
長濱 修

1976年、台所で妻の家事を手伝っていると、団地内の遊び場から突然大きな声で「ぼくが大きくなったら宣教師になりたい」と歌う長男（4歳）とそれに続く次男（2歳）の歌声が聞こえてきます。「宣教師ってなに？」と聞く友達に、「宣教師って長老のこと」と堂々と答える我が家の小さな宣教師の願いが将来必ずかなえられるように、妻と顔を見合わせ決意する。

家族で新聞を配達して10年

1982年、神戸市郊外への転居を機に伝道資金を蓄える目的で、自宅周辺約120軒の家庭へ、家族で新聞配達が始まりました。毎朝4時30分、我が家の玄関に約120部の新聞が届けられます。これを父用、母用、子供用とそれぞれの配達分に仕分け、5時に子供たちを起こして一斉に配達へ出発。5時30分には全員配達を終了して朝の家族の祈り、聖文学習または早朝セミナーの後、7時に朝食。

この日課は、1992年横浜に転勤するまでの10年間、雨、風、雪の日はこちら

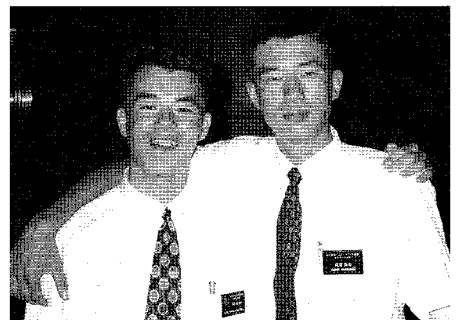
ろんわたしの出張や子供たちの修学旅行、また妻の出産があってもお互いが協力し合い、休刊日を除いて一日も休まずに続けることができました。家族での新聞配達、伝道資金を蓄えるのみならず、子供たちが大きくなったら伝道に出るという決意をさらに強め、早寝早起きの習慣を身に付けることにもつながりました。中学生、高校生、という多感な時期に、クラブ活動の早朝練習に向かう顧問の先生や友達に配達途中で出会っても、臆することなくあいさつを交わす度胸も養うことができ、この新聞配達は家族が一つとなり「大きくなったら宣教師になりたい」という夢を実現するためのまさにクリーンヒットとなりました。

子供たちの伝道を通して 祝福される家族

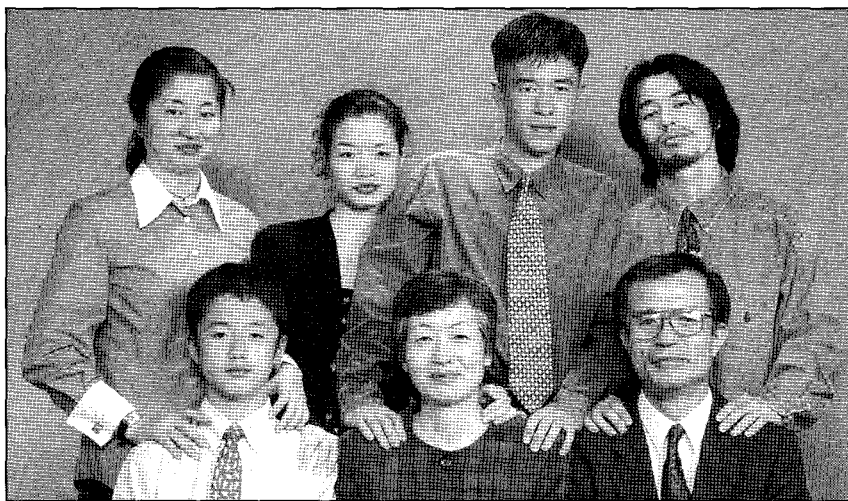
1992年、1994年にそれぞれ19歳に達した長男、次男は専任宣教師として召されました。

長男は2年間の自分の任地での伝道を終えた後、地域会長と両伝道部長の許可を頂き、別の伝道部で働く弟の元に転勤して同僚として10日間働く機会を得た後に帰還しました。兄とともに

に伝道したいという弟の願いと2年間培った伝道のスキルを弟に伝えたいという兄の願いが実現しました。そのときの様子を次男は、「わたしは、今、最高の喜びを感じています。長濱創長老とともに伝道しています。『モルモン書』を携えて神様のメッセージを人々に伝えています。わたしはこの機会に口で表せない喜びを感じています。彼とともに働くとき、何も恐いものはありません」と14通目の手紙に書いてきました。また、長男からは、伝道を終えるに当たり「今までの25か月の間いろいろご支援してくださり、よく祈ってください、とても感謝しています。これまでに多くの人の改宗する姿を見ることができました。スマートに頭を使っ



同僚として働く兄の創兄弟（右）と弟の穰兄弟（左）



長濱ご家族。上段左から、長女・百合子姉妹、次女・真衣子姉妹、長男・創兄弟、次男・稜兄弟、下段左から三男・武兄弟、長濱ご夫妻。

やらに働きました。何の悔いもありません。アルマ書第29章17節、モーサヤ書第7章18節にあるように骨折りがある努力が実を結ぶのです。伝道の業は神聖な業でした」という108通目の手紙が届きました。

そして現在、札幌伝道部で働く長女からの伝道スピリットにあふれる手紙が毎週届けられています。

この6年間、我が家では手紙に書か

れている求道者や新会員の方々のために家族でともに祈り、また神殿での祈りに加わることにより、家族が伝道のスピリットで一つになるという祝福にあずかっています。

彼らが求道者や新会員に注ぐ愛の深さと献身的な働きそして思いの清さに驚かされます。伝道する子供たちを通して支援する家族も祝福されています。

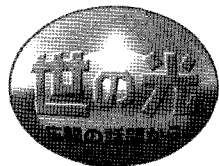
今回、長男が伝道したこの地でステ

ーク会長の召しを受け、神戸伝道部の部長の掲げる「バランスの取れた」会員伝道を神権指導者、会員、宣教師とくびきを共にし一体となって押し進めることでステーク内が伝道のスピリットにあふれ、震災で荒廃した神戸の人々の心が、イエス・キリストの贖いによる慰めと平安で癒されるように願ってやみません。(ながはま・おさむ)

長濱修ステーク会長

の紹介

1944年旧満州国（現在、中国東北部）鞍山市生まれ、宮崎市育ち。九州大学工学部造船工学科卒業後、川崎重工業（株）に入社し、現在も造船所で造船設計部長を勤める。1964年に改宗。1972年に河内静子姉妹と結婚。3人の息子と2人の娘がいる。教会にあつては、これまでステーク副会長、高等評議員、監督などの責任を果たしてきた。現在神戸ワード所属。



広大な宇宙に思いをはせて

世界的な天文学者J・ワード・ムーディ博士の講演会

ブリガム・ヤング大学の天文・物理学准教授J・ワード・ムーディ博士はこの夏、京都の国際会議場で開催された「第23回国際天文学会」に招聘され、シンシア夫人とともに来日されました。そこで8月22日、大阪・阿倍野の教会にてファイヤサイドが開催され、会場となった礼拝堂には教会員および天文ファン約150人が詰めかけ満員の盛況となりました。

ムーディ博士は1974年から76年まで神戸伝道部の専任宣教師として働かれた経験を持っています。当日は、この会の企画者である神戸伝道部の松下部長のあいさつの後、シンシア夫人が短い証とお礼を述べ、入江伸光兄弟の通訳でムーディ博士が演台に立たれました。

「わたしはユタ州の小さな町の農家に生まれ、小さいときから星に興味がありました。両親はわたしが星についてあまりに多くの質問をするのに閉口

して、天文学の本を買ってくれました。それ以後ますます星や宇宙について興味を持ちました。

伝道終了後、ブリガム・ヤング大学で天文学を学び、さらに米国の天文学の最高峰といわれるミシガン大学へ進みました。この時点でわたしは結婚をしていましたが、妻のシンシアと一緒にミシガンへ向かう途中で、家財道具をすべて盗まれるという災難に遭いました。しかし、姉が住んでいた関係で立ち寄ったシカゴの会員が失った家財道具のほとんどを提供してくれました。また、ミシガンに到着したわたしたちを待っていたのは地元の教会員の温かい親切でした。同大学で5年間研究を重ね、博士号を取得しました。

ミシガンを離れてユタに帰るとき、わたしたちにはすでに3人の子供が生まれていました。家族を持つことは研究の妨げになると言う教授もいました



が、わたしは教会と神様を第一にするならば祝福があると信じて研究活動に打ち込みました。その結果、宇宙について様々な発見をしました。

この広大な宇宙は人間たちを喜ばせるために神様が創造されたと思わずにいられません。たゆまない努力と研究の結果、新しい事象を見いだす喜びは何ものにも代え難いと感じています。

大きな星が自身の重力に耐え切れずに崩壊し、ブラックホールという存在になります。この天体は望遠鏡で見ることではできませんが、この周辺では時間や空間が変化してしまいます。わたしはこれによって、神と人との時間に

は違いがあるということを理解しています。

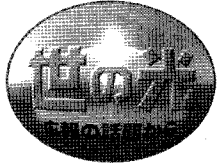
また、わたしたちの住む地球がある太陽系、その太陽系がある銀河系、そして銀河系の外にあるといわれるそのほかの銀河系を研究すればするほど、それらはグループで組織立って存在し

ているということが分かります。そのときにだれかがこれらの天体を組織したと感ぜずにはられません。」

この後、質疑応答に入り、かなり専門的な質問も飛び出しましたが、来場者はしばし宇宙に思いをはせ、そのとつもない時空間の広大さを実感し、

日夜、未知の分野を研究している科学者に尊敬の念を覚えたようです。

最後に博士は、青春時代の思い出の地を再訪し、自身の研究の一端を分かち合えたことを心から感謝すると述べられ、有意義だった会を締めくくられました。(レポーター：原田 明)



星の夜、歌声は響く

札幌ステーク少年少女聖歌隊 GENESIS結成

札幌ステーク厚別ワード

武田 修

19 96年11月札幌ステークにおいて小学3年生から中学3年生までの15人の少年少女による聖歌隊「GENESIS (ジェネシス)」が結成されました。『聖書』の創世記から名付けられたこの合唱団の目的は、教会音楽の水準を高め、コンサート活動を通して広く地域社会の人々に親しみ、伝道活動に貢献するというにありま

す。多くの人が感動し、また福音に心を開くような質の高い音楽を目指して、オーディションによって歌が大好きな子供たちを集めました。しかし、発声から始まり、呼吸法、発音、表情、態度、姿勢、ハーモニーこれらをまったくのゼロから作り始めるのは並たいていことではありませんでした。特に最初の半年は、音程は乱れる、ハーモニーは合わないと苦勞は尽きず、2、3の練習曲をとりあえず聞けるというところまで持ってくるのが精いっぱいでした。そのため、5月に予定していたコンサートは延期せざるを得ませんでした。

「音」が「音楽」になる

指揮者として音楽指導をしていくには時間と忍耐とそして限りない愛情が必要でした。時には厳しい言葉を飛ばしながらも、子供たちが誇りと自信を持ち、この経験が特別なものとなるよう願っていました。そうして、最初の苦しい半年が過ぎると、それまでがま

るでうそのように練習がはかどりハーモニーも美しくなってきました。半年で数曲しかこなせなかった子供たちが、1日で5曲をこなせるようになるまでに成長したのです。それまでの地味な練習が花を咲かせ、実を結んだ瞬間でした。「音」から「音楽」へ、心の喜びを表現できるようになっていったのです。この成長から指導者、子供たちの両親、そして子供たち自身がこの活動のすばらしい可能性を感じるようになりました。

貴重な一歩となったコンサート

結成して8か月、未熟な点は残しつつもその可能性を感じてもらえたらということで、今年7月札幌ステークセンターにおいて「七夕コンサート」を開きました。

このコンサートでは、10曲のうち1曲だけ賛美歌を歌い、そのほかの9曲はすべて「こいのぼり」や「春の小川」といった誰もが一度は口ずさんだことのある日本の歌を中心に選曲しました。そこに映し出される日本人の共通の風景を通して福音を伝えていきたいと思ったからです。

そして、このコンサートには実に200人もの人々が聴きにきてくださいました。その中には、近所に住んでいる方や、隊員の友達など教会員ではない方も多く見受けられました。これは、わたしたちスタッフをはじめ多くの



札幌ステーク少年少女聖歌隊GENESIS隊員。

の予想を上回るものでした。

信仰の目で見ていたものを実際に目の当たりにするという大きな喜びを今回得ることができました。このコンサートはゴールではなく、描いているビジョンのための貴重な一歩となったことはほんとうに祝福であると感じます。

また、子供たち一人一人をはじめ、ご家族の方々(中には、毎週車で片道40分かけて送り迎えをしてくれたご家族の方もいました。)そして、この活動を支えるスタッフの皆さんに心から感謝しています。

GENESIS(ジェネシス)はこれからも、社会的に認められる高い音楽性の聖歌隊を目指すとともに、キリストの光を受けている聖歌隊にしていきたいと思

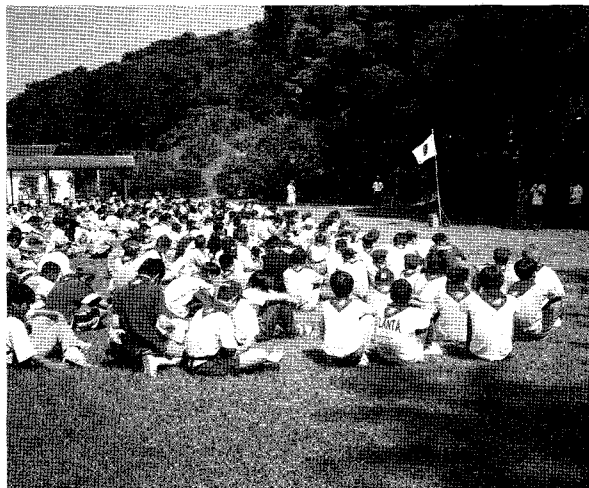
います。当面の活動としては、市民合唱祭やクリスマスコンサート、福祉施設への慰問などを計画しています。まだまだ手探りの状態ですが、将来的には青少年部門、シニア部門などいろいろな年齢層の人がいつでも参加できるような層の厚い活動をしていければいいと願っています。(たけだ・おさむ)

開拓者150周年記念「若い男性キャンポリー」 開催される

開拓者150年を記念し「信仰こめて、一歩ずつ」のテーマを掲げて、1997年8月4日から8日の4泊5日間、「若い男性キャンポリー」が開催されました。都心の西方、稲城市にある米空軍の多摩レクリエーションセンターの森に、北は釧路から南は長崎・熊本までの、全国21ステークと日本本州軍人地方部を含む9地方部から総計630人（指導者200人を含む）が一堂に集いました。

準備はアジア北地域会長のレックス・D・ピネガー会長を大会委員長に頂き、地域七十人のゲリー・松田長老の下に東京と横浜地区の各ステークの代表者が実行委員会を組織して始まりました。1年半の準備期間中、仕事は多岐にわたりました。

まず、会場探しです。最初は静岡県、朝霧高原の施設を予定していたのですが、夏休み期間はどうしても地元の行事優先ということで予約ができませんでした。その後、米海軍にお勤めの松田長老のご苦勞もあり、何とか多摩レクリエーションセンターに予約を入れることができました。



しかし、条件がありました。それは米軍施設のため一般日本人の立ち入りは米軍の方1人に対して10人までというルールでした。そこで日本本州軍人地方部の兄弟姉妹の助けを頂くべく奔走することとなりました。最初は200人から300人の参加と高をくくっていた実行委員会でしたが、参加表明が600人を大きく超えたころになると心穏やかではありません。参加者、関係者が全員無事に入場するためには60人以上の米軍の方々に来ていただくことになるわけです。軍人地方部の兄弟から在日米軍の各支部に呼びかけていただいたり、施設側と交渉したりしてい

ただきましたが、状況は一向に好転しません。最後には横須賀に帰港中の空母インディペンデンスの水兵さんたちに助けを求めようという案もありましたが、8月4日朝の出港命令が下るなど、対策に大変苦慮しました。

ところがひそかに断食と祈りをして何度目かの下見に会場に行ったとき、何か良い方法はないかと憲兵隊の方と打ち合わせをしていますと、何と最近1対10のルールが変わったということを知りました。確認してみると、軍の人1人に対して何人入場しても構わないというのです。さらには憲兵隊長の特別な計らいで、ゲートの確認業務や駐車場や受付に日本人スタッフを配置することが可能になりました。主が助けてくださった！と感謝と喜びでいっぱいになりました。

大会初日は540人の参加者と30余人のスタッフ、そして100台を超える参加者の車、また10台以上の食料、資材搬入の大型トラック、冷凍車などを迎えることとなりました。夕刻には大会委員長のピネガー長老も到着され、青

あかし 参加者の証から(抜粋)

●ぼくたちは選択プログラムでバードウォッチングをしました。自然の中でじっとしていると神様がお造りになった自然がとてもすばらしく見えました。

次の日、日本本州軍人地方部のスカウトたちと、王様陣取りと鬼ごっこを混ぜたような遊びをしました。向こうの人の言葉はよく分からなかったけれど、一緒に夢中になると言葉が通じないことも関係ないような気がしました。違う人間でも一緒に頑張れば心が通じると分かりました。(高根沢 誠 東京ステーク三鷹ワード)

●ぼくにとって忘れられないプログラムは二日目の「富士登山」だ。午後4時ごろバスは5合目に着

いた。今にも雨が降りそうな天候だった。夕食後、降りだした雨の中を登り始めた。6合目まで、は仙台ステークの全員が登ることができた。しかし少し行くと一人の兄弟が気持ち悪いと言いだしたので、ぼくは別の兄弟と一緒にその人の荷物を持つのを手伝ってあげてゆっくり登った。そのため速く登る人から遅れてしまった。結局その兄弟は6合目を少し行った所でぼくたちから離れてしまった。

兄弟の荷物を持ったりしたので、ぼくも7合目近くから少しばててきた。おまけに酸素はどんどん薄くなるし、風が強くなってくるし、眠くなるしでとても苦しくなり、休憩所があると必ず休んで少し眠った。その度に「もう登るのをやめよう」と思ったが、ぼくより年下の兄弟が息を切らせなが

ら頑張っているのにやめるわけにはいかないと思い、お祈りをして「あそこまで行こう、あそこまで行けば休める」と自分に言い聞かせながら懸命に登った。

8合目を過ぎた所で、ある兄弟が吐いて、もう登れる状態ではなかったため、3人の兄弟が少し下の休憩所まで連れて行った。その間ぼくはほかの数人の兄弟と岩の影に隠れて風や雨になるべく当たらないように眠った。やがて3人の兄弟が戻って来てまた登り始めた。そして夜中の1時ごろ、休憩所のある本8合目に着いた。

ほかのいろいろなステークの兄弟たちが休んでいて、指導者が山頂に行くかどうか相談していた。ぼくはすごい寒気がしたため、山頂に行くのをやめ休憩所にとどまったが、高い熱があることが分か

った。寝る前に、明日熱が下がり、みんなに迷惑をかけることがないようにと祈った。

次の日の朝、熱が下がり、無事下山することができた。残念ながら頂上に達することはできなかったが、キャンポリーのテーマどおり「信仰込めて、一歩ずつ」歩くことができたと思う。また「備えよ常に」の大切さを知った登山だった。(猪股雄介 仙台ステーク泉ワード)

●バーリー・P・プラットというわたしの高祖父を含む開拓者の一団がソルトレークに着いてから150年がたちました。その記念に日本仙台ステークの若い男性とともに1週間のキャンポリーに行ってきました。

開拓者が親しんだ野外生活を

春18キップで到着した大阪方面の隊も間に合い、設営、夕食もそこそこに関会式が始まりました。

生涯スカウトでもあり、スカウト世界連盟の理事も7年勤められたピネガー長老は楽しそうに各キャンプサイトを巡り、全国から集まった若い男性や指導者に声をかけていらっしゃいました。開会のあいさつの中ではトーマス・S・モンソン副管長や十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老からのメッセージとともに、アロン神権者が大きな力を発揮できることへの期待と励ましの言葉を頂きました。その後、北海道の兄弟たちの息の合った郷土の踊りや東京北、仙台、横浜などの地方色豊かな発表があり、楽しく友情を培う第1日目が始まりました。

2日目から4日目までいろいろな全体ゲームや料理コンテストに加え、13の選択プログラムが展開されました。地図や路上のサインなどを見て目的地に到達する「追跡ハイク」や「ウォークラリー」、自然観察の「バードウォッチング」「ネイチャーゲーム」「野草観察」そして史跡を巡る「日本奉獻史跡ハイク」「日本史跡巡りハイク」などありましたが、一番の参加希望者を集めたのは「富士登山」でした。

4台のバスに約160人の参加者、指導者そして医師と看護婦の兄弟姉妹で出

発しました。現地では台風の接近もあり、風と雨そして寒さと戦いながらの登山となったようですが、ふとした晴れ間にはふもとの花火大会を楽しむなどして、結局37人が登頂に成功したそうです。下山の折には、あやまって別の下山道を取ってしまった兄弟も8合目で気づき、冷静な判断とその体力で再登頂をして下山されるなど日ごろのスカウトとしての訓練の一端がうかがえました。あの天候の中、賢明な勇気ある決断をしてくださった兄弟たちに感謝と尊敬の念を覚えます。あまりの天候に20人以上の成人指導者も体力を落とされたとのことで、山登りの厳しさ、日ごろの準備の大切さを思い知らされ、信仰を込めて一歩ずつ歩んだ開拓者の気持ちを感じさせられました。

日程が3日目になるころから、参加者もテントや自炊生活に慣れ、いろいろな所から助け合う光景や笑い声、歓声が聞こえるようになりました。軍人地方部からの兄弟たちとも楽しく遊んでいる姿が見受けられました。ある指



導者は「日程が長いことによって子供たちが自然の中で変わっていく姿がよく分かった」と言われました。またこの期間中親子で参加していらっしゃる方々も多く、キャンプサイトの中でよく父子が話しているのをほほえましく拝見しました。また、夜には別のキャンプサイトに出かけて遅くなった子を一生懸命捜し、夜遅くまでテントで待っていらっしゃる指導者の姿に子供たちへの愛を知り感銘を受けました。

キャンプファイヤーでは大阪からやって来た手車も登場しました。各サイトごとに工夫をこらした教会歴史のスキットを通して自分たちの信仰に流れ

し、富士山に登りながら開拓者が味わった徒歩の旅のつらさをうかがい知ることができ、また無事に下山した後は、スカウトたちの演劇(スキット)を通して開拓者時代を思い起こすことができました。

富士山では雨と強風のため、ウィリー手車隊と同じように「無理をして命をかけて進むか、あきらめて次の年まで待つか」という選択をしなくてはなりません。わたしは雨具の上着しか準備していませんでしたので、雨で足がすぶぬれになりました。雨がやんだら次は強風になり、涼しいひとときを過ごしました。遠く下の町の花火大会が目に入りました。あまりにも遠くに見えた花火の爆発がまるでおもちゃのようで、手を伸ばせば手のひらにきれいに乗せられるかと思いました。

そのときに携帯電話が鳴りました。信号が弱くてほとんど聞こえませんが弱くても聞こえるのが奇跡だということに気づきました。そして神様はわたしたちにあらゆる技術を教えてくださることに感謝しました。携帯電話の信号は弱くなりますが、祈りの信号はどんな高い山に登っても弱くならないことにも感謝を覚えました。

初めは野外生活に慣れていない若い男性に対して不安がありました。テントを張るのに変な場所を選んだり、火をたくときは危険なほど燃え上がらせたり、燃料不足で消えてしまったりしました。しかしちょっとした指導者ですぐに技術を身に付けていき、料理コンテストでは「150周年ラーメン」で「野外生活日本一」という賞まで頂きました。また彼らは現

代の世の中の誘惑の激しさに耐えられるかどうか、霊的な意味でも不安がありました。しかし、このキャンプをはじめ、彼らと一緒にいろいろな活動することによって、今の若い男性には開拓者に負けないくらいの信仰があるということがよく分かりました。

開拓者150年はそろそろ終わりになりますが、現在の若い男性の開拓者精神が消えることはないと思います。彼らには霊的にも社会的にも技術的にも先頭に立っていただきたいと思います。(ポール・S・ギル 仙台ステーキ泉ワード若い男性会長)

●ほくがいちばんよかったと感じたのは、奉仕隊として活動することができたことでした。奉仕隊は自分のこともやりながら、ほかの

ところの食料を運ぶのを手伝ったり、班に分かれてサイトの点検をして回り、悪いところを直すのを手伝ったりする役目でした。いろいろなステーキから数人ずつ選ばれていて、自分のステーキとは別のサイトにテントを張りました。

ほくたちの行ったサイトでは溝が土で埋まっていて、野菜などを洗った水がちゃんと流れていませんでした。そこで溝の泥をスコップで掘りましたが、滑るし汚れるし、力も要るので大変でした。

終わってから奉仕隊のみんなと話しましたが、ほかの班も大変だったことを聞いて「みんな頑張っているな、こうしてみんなで奉仕できてよかったな」と思い、とてもいい気持ちになりました。(西尾健太 岡山ステーキ津山支部)

る偉大な受け継ぎを学び、自分と開拓者をつなぐ霊的な時間になりました。

閉会式は雨のため各キャンプサイトを巡っての式になりましたが、ほとんどすべての参加者に賞が授与され歓声が響いていました。

ある指導者の方は「これでどうしたらアロン神権活動やスカウトをやっていったらいいか分かってきました」と

日焼けした顔をほころばせていました。後日、ピネガー長老からも150周年記念にぴったりのプログラムであったことやこれからもさらに同様の大会が開催されるようにとの提案も頂きました。わたし自身、アロン神権定員会活動としてのスカウトを見せていただき、さらにそのかわりの強さを理解することができました。

この「若い男性キャンポリー」の成功のために、ほんとうに昼も夜もなく働かれた野営長をはじめとする各スタッフの方々、また実現のために一人一人のアロン神権者の状況を見ていただきました地元の指導者の方々、そしてご支援いただいたご父兄の方々に心より感謝申し上げます。(レポーター 服部行彦 キャンポリー実行委員)

小羊は生きておられる



仙台ステーキ泉ワード
梶原 淳司

それは、出勤のため車を運転中の出来事でした。仙台は柔らかな曇り空に覆われ、心地よい5月の風の中を、車は郊外から市街地へと差し加かろうとしていました。しかし、さわやかな初夏の朝とは裏腹に、わたしの心には重苦しい思いが満ちていました。

そのころわたしは、開拓者150周年を記念したワードのオープンハウス実行委員長に任命されていました。しかし予定された期日が迫る中、開催までに解決すべき課題がまだ山積みされていました。そのうえ、わたし自身は個人的な問題を抱えて心底疲れ、頂いた祝福さえ失いかけており、まことにわたしの信仰が試されたときでもありました。

今までわたしは主イエス・キリストについての証あかしを持っていました。それはいわば自然に受け入れた証でした。しかし同時にその中には「主はおられる、おられるはずだ、おられなければならない」という頭で考えた部分が含まれているのではないかとというばく然とした不安がありました。

自分の証の弱さと自身の無力を痛感し、迫り来る様々な悩みに駆り立てら

れたわたしは、「主に頼るしかない」という思いに追い詰められていきました。少年ジョセフ・スミスが聖なる森に入って行ったときのように、わたしもそのとき、祈ればこたえられるという非常に強い思いを感じ、振り絞るような思いで祈りました。「天のお父様、主イエス・キリストについてどうか教えてください。主なる神、イエス様が今生きていらっしゃることを教えてください。わたしはほんとうの証を持ちたいのです。」

するとそのとき、わたしは生まれてこの方感じたことがなく、形容もできず、言葉で表すこともできないほどのとてつもなく大きな温かい力で自分の体が包まれたことを感じました。まるでだれかに抱き締められているようでした。わたしにはそれがどなたなのかすぐに分かりました。その御方がこうおっしゃるのが聞こえました。

「わたしは生きています。ここにいます。あなたの目の前にいます。安心なさい、あなたが今、目にしている草や木そして太陽も皆、わたしが造ったすべてのものがわたしのことを証しているのです。あなたはそれを感じているはずです。」

そうわたしの霊が感じたと同時に車の周りの風景がにわか自分の方に迫ってきて、再びわたしは包まれたように感じました。そして体中がかーっと

熱くなりました。ほんとうにこのように大きな安心感ほほかのどこにもありません。そのときわたしは思いました。「イエス様のところに行きたい。」生まれて初めて心からそう思いました。ほんとうにほんとうに涙が止まりませんでした。わたしが今まで持っていた証は一体何だろうと思えるほど深い経験でした。

わたしには今、強く感じる思いがあります。それは、主イエス・キリストがわたしたちを守ってくださっているという確信です。これだけは何とも言われようと絶対に否定することはできません。わたしはこれまで経験できなかったこと——体全体が震えるほどまざまざと、主が生きておられると感ずること——を体験しました。同時に、わたし自身が悩み苦しんだ末、結局わたしには主の贖あがないしか救われる道はないとこれほどまでに強く感じさせられたことはありませんでした。そしてすべてのことについて、わたし自身の考えではなく、御心みこころのままに任せようと心底思えたとき、心の重荷が取り除かれすっかり軽くなるのを感じました。

「そして今、小羊についてなされてきた多くの証の後、わたしたちが最後に小羊についてなす証はこれである。すなわち、『小羊は生きておられる。』(教義と聖約76:22) (かじはら・あつし 第二副監督)

主に頼り、すべてを主にゆだね



仙台ステーキ山形ワード
渋谷 彰

わたしは、1994年に神戸伝道部の宣教師として召され、宣教師としての誇りと、主から受ける祝福に喜びを感じながら2年間働きました。そして、1996年8月、自分の将来に思いをはせながら帰還の途に就きました。

ところが、いざ帰還してみると伝道中に感じていた誇りや熱意、祝福が感じられなくなってしまいました。ワードも自分が伝道に行く前より人数も減り、心なしか活気がないように思えました。わたしの心は日に日に落胆し、悲観的になっていきました。そして、いつの間にか指導者やほかの教会員に対して批判的な態度を執るようになっていきました。伝道中常に浮かべていた笑顔も消え失せ、やがて「伝道中の自分が人生の中でいちばん最高で、もう取り戻すことはできない」と思うようになっていました。わたしの心は主から遠ざかっていきました。わたしは、多くの指導者や兄弟姉妹の関心や愛も受け入れず、だれもわたしの心を変えられることはできなかったのです。

そんな日々が数か月続いたある断食日曜日、教会員の方と話しているとふと心に「伝道中はあんなに自信があったのになぜ今の自分にはないのだろう」という思いが浮かんできました。答えは、実に簡単なものでした。主に頼っていなかったからです。

この日を機にわたしの生活は変わり始めました。それまでの高慢で利己的だった心の中心が少しずつ主に仕えることやほかの人々に仕える方向に変わっていったのです。

祈りの答えによって

それから、わたしは結婚についての目標を立て、後に予定され実行委員にも召されていたサマーカンファレンス

を一つの区切りとして最善を尽くしました。カンファレンスはとても素晴らしいものでしたが、目標については自分の望んでいたような成果は得られませんでした。カンファレンス最終日の証会ではずっとこのことについて考えていました。すると「惜しみ惜しみではなく、喜んで犠牲をささげる」という言葉が浮かんできました。わたしに必要なのは、自分の思いを主にささげること、自分がいちばん大切にしているものをささげることなのだと感じました。わたしは最善を尽くしたので、あとはヤレドの兄弟のように自分を主の前に持って行って、~~自分の思いが純粋であれば、主は必ず受け入れてくださると感じ、祈ることを決意しました~~。

次の日一人で教会へ行って聖文を読み目標について今の気持ちを祈りの中で主に話しました。「もし、今がその時でないのならわたしは待ちます」と。すると、体が震え目からは自然に涙があふれだしたのです。そして、今は備える時期だということが御霊によって分かりました。その瞬間、わたしの心に大きな変化が生じたのです。それまで関心を持っていたこの世のものに興味なくなり、人が造ったものよりも主が造られたものや、主に關することに対して心が向くようになりました。主が造られたものに心を向けるとき、たとえ小さなことであっても御霊を感じ、喜びを感じるようになりました。わたしの心は伝道から帰って来たころとは180度変わっていました。

アルマのような心の変化

最高と思い込んでいた伝道中よりも、わたしの今の生活はすばらしく御

霊にあふれたものとなっています。これは信じられないほどの祝福です。あれほど悲観的で批判的だったわたしが今は信仰をもって日々の問題に立ち向かっています。伝道中よりも強い信仰を持ち、主にすべてをゆだねて生活しています。これほど大きな奇跡があるでしょうか。

「彼らが神に背いて歩き回っていたときに、……主の天使が現れた。」(モーサヤ27:11)なぜ、天使が現れたのでしょうか。それは、父アルマが息子が真理の知識に導かれるように深い信仰をもって祈っていたからです。わたしの場合も同じであると感じます。なぜなら、わたしは自分で変わろうとは思いませんでしたし、変わる必要も感じていませんでした。

しかし、こんなわたしが悔い改められるようにいつもだれかが祈ってくれたに違いありません。わたしには、それがだれであるか分かりませんが、主は彼らの祈りにこたえられて、わたしがいちばんよいときに悔い改める機会を与えてくださったのだと感じずにはいられません。

「見よ、わたしは主に關することに喜びを感じる。」(2ニーファイ4:16)ニーファイが語ったこの言葉が今の自分にはよく分かります。主はわたしを愛してくださり、わたしが必要なときにわたしを信頼して訓練を与え、主に近づくための助けを与えてくださるのです。わたしは、確かに主が生きておられることを知っています。主はこれからもわたしに必要な試練と助けを与えてくださるでしょう。わたしはこれからも主を信頼して、主が与えられたすべてのことに感謝して主の道を主とともに歩んでいきたいと思います。(しづや・あきら)

専任宣教師

JMTC 216期生15人 海外4人 ●上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット



吉村康徳
神戸伝道部
福岡ステーキ
北九州ワード



高橋あつみ
東京北伝道部
大阪堺ステーキ
三國ヶ丘ワード



吉田なおみ
岡山伝道部
名古屋西ステーキ
一宮ワード



小林あかね
岡山伝道部
東京西ステーキ
八王子第二ワード



後藤由紀夫
神戸伝道部
東京北ステーキ
浦和ワード



菅原基子
神戸伝道部
仙台ステーキ
上杉ワード



齊藤 緑
神戸伝道部
秋田地方部
酒田支部



菅谷優子
神戸伝道部
秋田地方部
酒田支部



勝浦秀行
福岡伝道部
富山地方部
高山支部



石坂恵理
神戸伝道部
東京ステーキ
所沢ワード



白岩美幸
札幌伝道部
福岡ステーキ
北九州ワード



塚原愛美
名古屋伝道部
町田ステーキ
藤沢ワード



重松光治
福岡伝道部
我孫子ステーキ
つくばワード



岩間由絵
東京南伝道部
大阪北ステーキ
豊中第二ワード



石間淳子
ソルトレーク・シティー・
テンブルスクウェア伝道部
静岡ステーキ
焼津支部



白井亜紀
カリフォルニア・
ロサンゼルス伝道部
神戸ステーキ
姫路ワード



児島 要
福岡伝道部
東京西ステーキ
八王子第二ワード



清水理恵
ワシントン・
タコマ伝道部
高崎ステーキ
前橋ワード



主計大輔
オーストラリア・
プリズベン伝道部
ソルトレーク・
グラナイトステーキ
第一ワード

役員の変動

1997年9月3日から10月3日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 東京北ステーキ浦和ワード
監督：原 三城
- 横浜ステーキ川崎ワード
監督：光林繁夫
- 静岡ステーキ
ステーキ会長：小川周一郎
- 静岡ステーキ静岡ワード
監督：芝原宏幸
- 神戸ステーキ北六甲ワード
監督：大嶋 誠
- 神戸ステーキ神戸ワード
監督：種田秋夫

皆さんの原稿を募集しています

◎「ローカルページ」では、現在以下のテーマについての記事を募集しています。

①1997年中に、開拓者150年記念にちなんで行われた各地の活動レポート
1997年11月20日必着で下記までお寄せください。できれば活動のスナップ写真を同封してください。

②現在、日本および海外で活躍している宣教師またはその家族からの便り(近況、証など)。

1997年12月5日必着で下記までお寄せください。できれば写真を同封してください。

◎その他、一般のご投稿も歓迎いたします。

◎ご投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名を記入し、写真を同封のうえお送りください。採用された原稿は編集の際、要約や手直しをさせていただくことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第、編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕、伝道部名、伝道に出る月を明記)

◎あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

おわびと訂正

『聖徒の道』9月号、ローカル「役員の変動」で、名前の誤りがありましたので、おわびして訂正します。

福岡ステーキ八幡支部長
Richards.Ryan Spencer
↓
Richards.Ryne Spencer
横浜ステーキ小杉支部長
田中精也→田中靖也